

504  
127

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

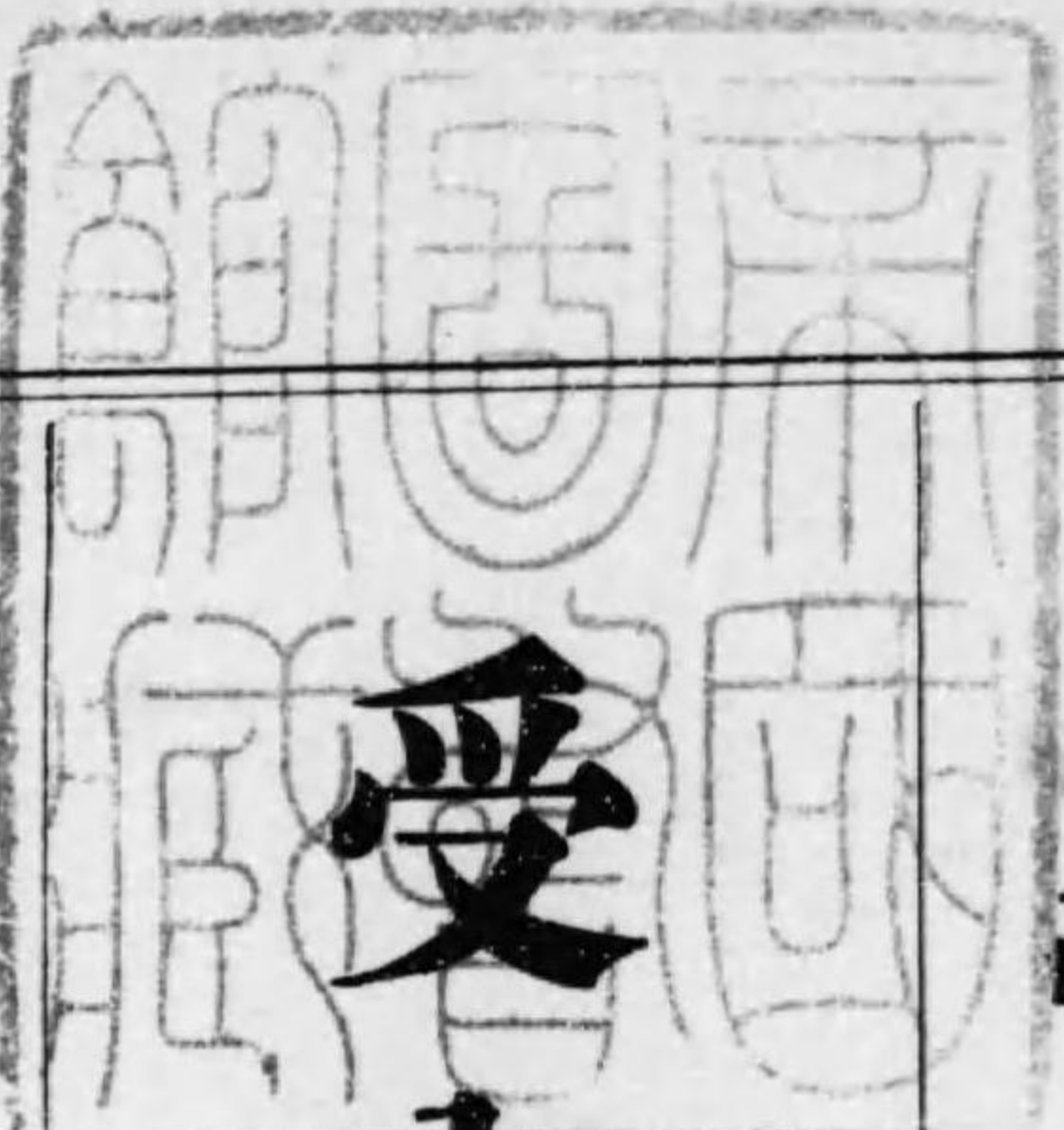
始





504-127

111107



# 受肉者耶穌

下卷

デヴ井ッド・スミス著  
日高善一譯

警醒社書店

大正  
12. 6. 4  
内交



## 後篇序

本書や著者に就いて言ふ可き事は既に言ひ盡してゐる。

後篇の出版に當り譯者は、前篇の出版に際し舊知未知の同情者から意外の賞讃や獎勵を與へられたことを深く感謝せずにはゐられない。特に原著者は次の著書『聖保羅の生涯と其の書翰』の翻譯許諾を譯者が請ふた書信に答へらるゝに當り、前篇の出版に就いて『余は大英國が久しく敬慕し又近來愛着を加へ來れる貴君の國民の間に本書が貴君の望まると如き善果を與へんことを祈願せざるを得ず。地理の上に於ては斯く距たれるも尙ほ同情と厚意とに於て我が國民と斯くも密接せる國民を世界の何所にも之を求むを得ず。神よ、更らに我等を近からしめ給へ』と書き送られたるに對して、感謝の念に禁へざるもの譯者のみに非らざるべきを信ずる。

譯者は感謝と光榮の念に溢れつゝ第二の著作の翻譯に従つてゐる。



尙ほ前篇に對し、最も誠實な批評家は緒論の省かれたことを遺憾とせられた。それは原著序譯文の割註に記した通りの理由で略したのであつたが、斯くの如き要求ある以上は再版の際は是非其の忠言に従ひたいと心得てゐる。

冀くは後篇も亦前篇と等しき同情と愛護とを世に博せんことを祈るものである。

千九百二十三年五月上旬

舊都室町の寓居に於て

日 高 善 一 識

目 次

第貳拾九章	フキニシヤへ隱退	四七五
第參拾壹章	彷徨	四九〇
第參拾壹章	重大なる告白	五〇二
第參拾貳章	苦難と榮光	五一七
第參拾參章	カペナウムへ歸還	五三七
第參拾四章	ガリラヤ滯留	五六一
第參拾五章	ガリラヤ旅行	五八二
第參拾六章	サマリヤ經由	六二一
第參拾七章	エルサレム傳道	六三九
第參拾八章	ヨルダン對岸のベタニヤへ隱退	六八四
第參拾九章	ラザロの甦生	七〇九



第四拾章 逾越節へ上らる.....七二六

第四拾壹章 エルサレム入城.....七五五

第四拾貳章 有司との對戰.....七六八

第四拾參章 深刻なる公訴.....七九五

第四拾四章 未來に就いての教訓.....八一五

第四拾五章 樓上の客室.....八四〇

第四拾六章 ゲツセマネの就縛.....八七三

第四拾七章 祭司長の前にて.....八九四

第四拾八章 ポンテオ・ピラトの前にて.....九二〇

第四拾九章 十字架.....九四七

第五拾章 復活.....九八〇

終

### 第貳拾九章 フ井ニシヤへ隱退



「汝を愛するものと共に戯れ給ふ耶穌よ、あゝ驚くべきかな。」

然かも汝は戯るゝのとき自ら樂み給はず

汝は人を欺かず又欺かれ給はず、汝の包まんを欲し給ふものを排し給ふ、

汝を有せざるものを汝は知り給へば。」

(太十五〇廿一、可七〇廿四―三十一)

ツロマシ  
の地  
へ隱退

耶穌は十二使徒のみと日を送らんことを望まれたが、何れの地に赴か  
るべきであらうか。湖の東岸に渡らるゝも好し、又ガラリヤの内地深く

入り込まるゝことも出来たであらうけれども、從來の経験では、其の何れに赴かれ  
ても望まらるゝが如き閑靜の地を求めらるゝことを得ないのであつた。故に新たな隱  
退の地を求められねばならない。ガラリヤの西北には曾ては世界海上の覇權を握つ

中世紀讚美歌



たが、當時はロオマ帝國の屬地にしてシリヤの一部に編入せられたフキニシヤが横つて居た。其の住民はイスラエル人が約束の地に入るに當り、其の所領を奪取した罪惡に満ち、偶像禮拜を事としたカナアン人種の殘存者であつた。ユダヤ人の眼には嫌惡すべき不淨の國であつたが、此れを隱家として擇ぶに格好な土地であつた。耶穌は此所へ向はれた。而して何人にも認められず、又妨げられざる隱家を求めらるゝ志を以て、會て有名たりしツロとシドンの港町の近郊の地に宿泊を發見せられた。

婦人  
嘆願

然かも耶穌は此所に於ても尙ほ失望せられた。其の名聲は此所にまで既に達してゐた。ツロとシドンの旅行者はガラリヤに於て耶穌の事業を目撃し、故郷に歸つて彼等の見聞せる所を噂したので、其の到着せらるゝや、騷擾は忽ちに國內に起り、十二使徒と共に往來を歩まるに當りて直ちに歎願者——娘の亂心に苦しむ寡婦が現はれた。「主よ汝ダビデの裔よ我れを憫み給へ」(太九〇二十七、太二十〇三十三)

十一、可十〇四十七、四十八、路十、八〇、廿八、廿九、太廿一〇九參照と彼女はユダヤの人民が耶穌を祝するに好んで用ゆる稱號を奉りつゝ叫んだ。此れ實に感ずべき懇願であつて、恩寵深き人の子の心より頑固な情をも柔ぐるに足るものであつた。「是れ實に憫むべき光景なり、斯くも切なき情を以て婦は叫べり、而して婦は母にして、其の娘の爲めに祈る。其の娘は斯くも病に苦しめられたり」と聖クリソストムは言ふ。然かも耶穌は之を顧みず、歩みを續けて、婦を遺棄せられた。弟子たちは情動いて、仲保の役を務めんとして歎願者に主の注意を洩かんと試み、彼等が主の無情を訴ふるやうに思はるゝのを氣遣ひながらも、事情を具に述べて彼女を憫まれんことを願つた。「我等の後より呼ばるが故に彼女を去らせ給へ」と我等は言つた。耶穌は婦には答へず彼等に對して「イスラエルの家の迷へる羊の外に我れは遣はれず」と宣ふた。

彼女の  
不屈

此の應答には希望の綱が悉く斷られたやうに思はれた。弟子たちは最早や一語もなかつたけれども、婦は之に辟易すべくもなかつた。彼女は



尙ほ隨從し來つて、一行が其の宿泊に達したとき、偕に入つて來て、其の食卓を圍まるゝに當つても退かず、耶穌の聖足の下に跪いて『主よ、我れを助け給へ』と祈つた。耶穌は漸くにして彼女に眼を留めて、四圍の光景から思ひ起された語を以て、彼女に向つて『兒女のパンを取りて犬に投げ與ふるは宜しからず』と仰せられた。彼女は忽ち其の語を捕へて『主よ、然り、されど犬も其の主人の膳より落つる屑を食ふなり』と答へた。彼女の熱心は遂に貫徹した。『婦よ、汝の信仰は大いなり、願ひの如く汝に成るべし』と耶穌は宣はせられた。彼女の家を歸るや、娘は癒されてゐたのであつた。

此の物語  
に對す  
る難題

主の地上に於ける傳道の中に此の事件ほど解するに苦しむ問題はな  
い。主の行動が甚だしく品性に反するかに見えるからである。是れをし  
もラビの語ならしめば、何等驚くに足らず、我等の主の異邦人に對する態度の明確  
なるを示めす格好の反證として、ユダヤ人の狹隘なる適例に引用せらるべきもので

ある。然るに耶穌の唇より斯くの如き聖語を聞くは、不適當であつて、此の憐な異邦人に對してパリサイ人其のまゝの行動を執らるゝかに思はるのである。此の行動に就いて、平生の所作と斯くも相反し、アダムの後裔を抱擁しつゝ公平にユダヤ人と異邦人との區別を認めざる福音の精神に相悖る所以を説明の要がある。

主の

拒否

中心の難問は耶穌が歎願者を顧みることを拒まれたと言ふ點ではな  
い。普通の説明は唯だ一部分満足を與ふるに留まるけれども、尙ほ解する  
に然まで困難ではない。論ずるものは此の時耶穌は其の情の動くがまゝに従はれず  
して、傳道事業の要求する所に従はれたものであると言ふ。耶穌の此所へ來られたの  
は遂行せらるべき確定の手段があつて、忠實に其の眞の目的を完成するに急なるが  
故に、其の順序を踏まれたのであつた。是れ其の醗酵の譬(太十三〇廿三、路  
十三〇廿、廿二)に説明せら  
るゝ手段であつて、先づ人道の中心たるイスラエルに福音を付植して、然る後全體に  
之を及ぼさしめらるゝ計畫であつたと言ふのであつた。此の説明の不充分な點は此



所に存する。耶穌はイスラエルの迷へる羊にのみ遣はされ、異邦人を求めずとの主義を、其の地上の傳道の間常に固執せられたけれども、尙ほサマリヤの婦をんなの如き、スカルの町民の如き、其の道に當れるもの、又カペナウンの百夫長ひやくにんのをさの如き、歎願して來るものには、宛然ユダヤ人に對せらるゝ如く、自由に彼等に恩寵を施して、聊かも狐疑せらるゝ所はなかつた。若し其の習慣の如く此所でも行はるゝとすれば、耶穌いすすは喜んで婦の歎願を受納して、彼女かれの心に冀ふ所に應ぜらるべき筈であつた。

隠退の  
希望の  
爲め

耶穌いすすが拒否せられた眞の理由は決して此の婦が異邦人であつたからではない。此れ全く隠遁せんと欲して此所へ來られた事情に由るのであつた。耶穌は十二使徒のみと偕に日を暮し、彼等に必要な教訓を施さんと欲せられたのであつて、此の歎願者の來るのを見て當惑の情があつた。蓋し耶穌いすすには彼女かれを憫み給ふ後の結果が明かに豫測せられたからであつた。奇蹟の風評は擴がり、忽ちに大群の民衆は集り來つて耶穌いすすを圍むに相違はない——治療を懇請する患者や唯だ見

物して喝采する爲めに集まる人々の。故に耶穌いすすは奇蹟を行ふことを喜ばれなかつたのであつて、歎願者が縦しイスラエル人であつても尙ほ之を拒絶するに猶豫せられなかつたのであらう。

(主の  
外觀の  
無情)

中心の困難は此所にあるのではなく、耶穌いすすが婦をんなを逐ひ返さんと欲せられた其の無情な點である。種々の臆説が供提せらるゝのであつて、或は此の矛盾を緩和するに効ある説もないではない。耶穌いすすの無情は唯だ表面を装ふて居らるゝのであつて、此の慳貪な假面を被らるゝことには二つの目的があつたものと思はるゝ。一方に於て耶穌いすすは婦をんなの信仰を試験して、其の忍耐の力を一層顯著ならしめんが爲めなると同時に、又一方に於ては弟子たちをして異教徒と雖も尙ほ救ひに與かる資格あるを悟らしめ、ユダヤ人の偏見を打破して、救ひの全世界に廣く及ぶべき準備を彼等に示めさるゝにあつた。此の註釋は幾分演劇的な氣分での事件を包むでゐるけれども、尙ほ確かに彼等の主が其の傳道の世界的なるべきを第一に意識



せらるゝ事となつたと云ふことを示めすものである。然し耶穌が此の危機に及ぶまで、其の時代並に人種の偏見に囚へられて、此の異教徒が尙ほ恩寵を受くる價値あるを見て驚駭歡喜せらるゝに至つたと想像するのは事實に反すると同時に宗教的本能に悖る議論である。

更らに又耶穌は此所でユダヤ人の傲慢な態度に倣つて異教徒を『犬』と稱せられたけれども、此れは語の軽い意味を用ゐられた—即ち愛撫の意を罩めた軽い調子で、夜中に市内を彷徨して、泥溝の殘物を獵つて歩く不潔な無頼の犬の意味でなく、食事時に食卓の周圍で戯れながら時々主人から屑を與へらるゝ家庭の可愛い犬の事であるとするものがある。恐らく耶穌が使徒と共に食事をせらるゝ室にも斯くの如き犬がゐたのであらう。其れは事實然るべしとするも尙ほ語は『厄雜の野良犬』との意味で侮蔑から出る軽い言ひ廻しであるに相違はない。

格言的  
の語

此等の議論は如何に有力であるとするも、唯だ僅かに此の無情な語を聊か柔げるのみで之を抹殺する事を得ないのである。故に或る人は從來の注意を逸したと思はるゝ他の説を喜んで迎ふるのであつて、此れに由れば主の語から全く無情な調子を除き去ると共に、侮辱を代へて滑かな調子の愉快な意義と爲すに足るのである。其の説に由れば耶穌は既にユダヤの國境を出て、ユダヤの頑固な語の通用せず、了解せられない地方へ來て居られるのであつた。故に此所で用ゐられた語はパリサイ人の傲慢な獸呼はりけものよばをせられた譯ではなく、唯だ一般に膾炙せる諺を引かれたのであると言ふ。ギリシヤには『犬を養ひて汝自ら饑ゆ』と言ふ諺があつた。エラスモスは『生活に需用なるものを得る能はざる貧困の身を以て、尙ほ馬や奴僕を蓄へんと努力するものに適用せらるゝものなり。其の財産乏しくして生活するに困難なるに、尙ほ衣服や外觀を飾りて權勢富貴を誇らんと卑しく努むる人々に適用せらるゝ諺なり。要するに緊急缺く可らざるものを閑却しつゝも尙ほ



娛樂や虚飾に用ゆるものに腐心する人々に適合する諺なり』と説明してゐる。又「隣の犬に深切なる勿れ』と言ふ格言もあり、『迷ひ犬を養ふものは之を繋ぐ綱を損するの外何の利益もなし』とも言つた。エラスモスは之を説明して『此の格言は何等の利益をも齎らざる所に無益の好意を盡くすを誡めたるものなり。隣りの犬は如何に好く養ふも食ひ終れば其の主人に歸り行く』と言つてゐる。耶穌は斯くの如き人々に膾炙せる諺を引用して『兒女のパンを取りて犬に投げ與ふるは宜しからず』と仰せられたのであつて、戯れの答へであつた。此れ恰かも『汝は我れに取りては未見の人のみ、我が家人に屬する祝福を如何ぞ縁なきものに與ふるを得んや』と仰せらるゝと一般であつた。

彼女の答  
辭も亦  
諺なり

次に婦の答辭を研究する。是れも亦フキロストラタスの『チアナのアポロニアスの傳』に見える諺である。アポロニアスには其の往く所として彼を崇拜して、宛然<sup>まなごら</sup>ボスウエルの其の師に於ける如く、彼の活動、其の行爲、言

論其の他些細の事に至るまで書遺した弟子ニネベのダミスが隨從してゐた。一日或る人が此の事を嘲つて『貴下が斯くの如き些事を集めらるゝは、宴席より落つる屑を獵る犬の如し』と言つた。ダミスは之に應じて『神々にして宴筵を張らる事あらば、神々の食せらるゝや、必らず其の些細の屑だも失はざるやう意を用ゆる從者あるに相違なし』と答へたと云ふ。此の婦の答辭は之を其のまゝに用ゐたかに思はるゝ。『然り、主よ、然れど犬も其の主人の膳より落つる屑を食ふなり』と。偶然の符合としては餘りに相似てゐるのに徴すれば、是れ蓋し人口に膾炙した諺であると認むるのが道理であらう。此れ諺を以ての問答ではなかつたらうか。即ち婦は諺を以て諺に應じ、輕快の調子に應ずるに輕快の調子を以てしたものである。

主女の本  
性を洞觀  
せらる

然し此の註釋も亦昔ながらの難題を唯だ新なものに代へたに過ぎぬ。勿論此れに由つてユダヤ人の傲頑な侮辱の語を柔和な耶穌に負はせる虞れのないこととなるけれども、尙ほ如何せん不幸にして其の場の事情が侮辱に等し



き残酷な行爲と見えるのを免れないではあるまいか。耶穌は戯れの調子を以て悲痛に打たれた母に應ぜられたものであつて、畢竟彼女の悲愁を嘲笑せられたことにならう。『諺を以て悲痛を補ひ』、唯だ『假托して苦悶を瞞着し、語を以て懊惱に應ずる』は果して道であらうか。彼女果して斯くの如き時を辨ぜざる諧謔に應ずる事が出来たであらうか。耶穌は曾つてカペナウンに降つて其の子の病を癒し給へとの王の大臣の要求に對して『汝等休徵と異能を見ずば信ぜじ』(約四〇四)との非難を以て之に答へられた場合を見れば、彼は憂悶焦慮しつゝ、『主よ、我が子の死ざる先きに下り給へ』と叫んだ。然るに此の婦は嘲笑を以て嘲笑に應じたと言ふ。是れ蓋し耶穌を残酷と見る以上に不自然な行動ではあるまいか。

然し若し此の場合の事情を具に考究すれば困難は自然と消滅するのである。我等の主の答辯中には勿論嘲笑の意味があるけれども、寸毫も輕浮な調子はない。聖眼には必らずや聖語と共に露が宿つて、其の聖容にも聖語の調子にも聊かも嘲笑の影

だに認められず、痛める母は其の温容に聖旨の厚きを看取したに相違はない。尙ほ其の事情は心配ではあつたけれども絶望の場合ではなかつた。王の大臣の子息は死に瀕してゐたのであるけれども、彼女の娘は狂氣であつた。従つて生死を争ふ問題ではなかつた。即ちカペナウンの大臣と此のサイロビニケの婦の間には性質の異つた世界がある。彼は『滑稽の有力なる恩惠』には門外漢たる生眞面目なユダヤ人であるが、此れは思想の輕妙にして頓智に長け、諷刺や修辭の巧みを喜び、悲痛の間にすら尙ほ諧謔的攻撃に忽ち應ずるギリシヤ人である。彼女に對する我等の主の態度は、畢竟人間の品性を洞觀せらるゝ其の驚くべき能力を示めす一例である。主は其の對せらるゝ人物を一瞥にして看取し、之を如何に遇すべきかを剴切に悟らるゝのであつた。

異教徒  
中の  
傳道

此の事件は耶穌が豫測して、危懼せられた不幸の結果を齎した。其の風評は廣く傳播して隱遁せらるゝ事が不可能となつた。故に再び閑靜な場



所を求めて十二使徒のみを只管に教訓せらるゝことが必要となつた。然し其の弟子を教育せらるゝ事業に急なるものがあつたが、尙ほ暫くはフキニシアに留まらるゝのであつた。神の攝理に由つて異教の地方に福音の入るべき門戸が開かれたので、耶穌イエスは其の召命に服せらるゝのであつた。南方に向ふを止めてツロに出て、更らに北の方地中海沿岸を辿つてシドンに至り、轉じて一巡りレバノン及びヘルモンの裳を迂回し、ヨルダンの上流の東岸をガラリヤ湖まで下られた。此れ我等の主の傳道期間に記憶すべき一挿話である。主がイスラエルの國境以外に傳道せられた例は他に求むるを得ず、異邦人に對する主の唯一の傳道が此の行程中に始めて見らるゝのである。此の海を廻らしたツロなる名の四方に轟ける市モスク「諸の國の集ふ市」モスク「多衆の島々に通ふ諸の國人の商人の市」モスク「上れる世、古へより在りし邑」モスク（賽廿三〇三・結廿七（一）、又其の母なるシドンの市で「全世界の救主」が何を行はれたか、何を教へられたか、如何に行動せられたかは不幸にして其の記録が傳はらないのである。主が異邦人に

對して斯くの如き恩寵を與へられたのがユダヤ人たる福音記者には面白くなかつたのであらうか。或は將た彼等の見聞した所が特筆すべき記憶に残り得ざる不慣よなれの光景であつたのに困惑した爲めであらうか。説明は何れにもあれ、彼等は此の記事を残さなかつたのである。此の驚くべき傳道の全體の記録として、聖マカが僅に主の旅行記の零碎な記事を止むるに過ぎぬ。曰く「耶穌ツロとシドンの地を去りてデカポリスの地を過ぎ、ガラリヤの海に至れり」（可七〇）と。然し耶穌イエスの努力の結果は夥しき成功を齎らしたことは疑ひなき所である。サイロピニケの婦に對する耶穌イエスの厚意は其の郷黨の心を開いたのであつて、後にツロとシドンの人々の好遇した例を以てガラリヤの市邑の人々信仰なきを憂悶し、非難すべき對照として、自らの聖語みことばのうち引用せられたのであつた（太十一〇廿二・四）。



第參拾章 彷徨

『耶穌のイスラエルに現はれ給ふや、彼等は時に之を荒野に逐ひ、時には砂漠に、時には海に、又時には山中に逐ひぬ。然かも尙ほ其の赴かるゝ所として新たなる敵の襲撃に遇はれざる所なく、逐撃を被られざる所なかりき』

ジョン・バンヤン

(太十五〇廿九、十六〇十二、可セ〇三十一一八〇三十六)

隠遁の場所の擲

フキニシアに於ける活動の間にも、耶穌は決して其の中心の目的から眼を放たれなかつた。其のシドンを去つて直ちに南方に向はるゝや、何等の妨害をも受けず十二使徒を教訓すべき隠遁の場所を發見せんと努められた。然かも其の計畫は無効に歸した。群衆は其の前程に集まつて、四千に及ぶまでに漸時増加したのであつた。

湖の東岸にての奇蹟

耶穌は今此の迷惑極まる事情から脱出せらるゝ事が緊急の必要條件であつたので、其の湖岸に達せらるゝや、遁れ出づべき努力を試み給ふた。東岸の何れの所か、丘の上に登つて、群衆が其の閑静を望まると聖旨を重んじて、去り行くであらうと考へながら暫く待たれた。然かも此所に於ても失望の外はなかつた。此の地方の民衆は耶穌の來らるゝを聽いて多くの患者——跛者、聾者、不具者、其の他種々の病者——を癒やされんが爲めに伴つて來たのであつた。耶穌は山上に登られたけれども、彼等は聊かも辟易せず、此等の憐れな病者を負ふて後を逐ひつゝ、其の聖足の下に伴ふのであつた。彼等の救済を等閑にすることは耶穌の耐へ給ふ所ではない、即ち彼等を悉く癒やされた。唯だ一つの事件が特別の注意を曳くのであるが、其れは聾にして訥る患者であつた。彼が自ら耶穌に來らずして、運ばれて來た所を見ると、其の精神にも異狀があつたものと思はるゝのである。其の混亂した頭惱を調べず耳や舌を治されても、効は少ないので、耶穌は其の僅かな



祝福を轉じて偉大なものたらしめ給ふたのであつた。即ち其の人を側に伴ひ、塞が  
つた耳を穿つかの如く、指を耳に挿め、又當時に於ては醫療の効あるものと信ぜられ  
た唾を以て吃る舌を潤ほされた。此れは其の錯亂した頭腦に希望を湧かしむる手段  
であつて彼の不用意なるに拘はらず有力な助勢が加つて其の効が一層強く現はれた  
のであつた。彼の憫むべき風姿は痛く聖情を搖がして、耶穌は「天を仰いで歎ぜ」ら  
れた。其の温情に満つる聖手の所作が、此の憐な患者の注意を引くと共に憫みの單  
る聖顔に彼は全幅の信賴の念を置いた。彼は慈愛に溢るゝ未知の人物に頼り恃んで、  
其の欲せらるゝがまゝに動くこととなつた。「啓けよ」との耶穌の聖語と同時に奇蹟  
は完成された。聾いた耳は通じて訥つた舌は弛み、自由に語ることを得たのであつ  
た。

再び奇蹟  
を以て養  
はる

山上の奇蹟は忽ちにして群衆の熱狂を醸し耶穌の困惑は一層に加はつ  
たので、此れを脱出するの手段を構ぜんと決心せられた。耶穌は如何に

もして彼等を去らしめやうと欲せらるゝも、尙ほ群衆は耶穌に取つても誠に憐れに  
見えるのであつて、此の雲霞の大衆を眺められては聖旨自ら悲しからざるを得ない  
のであつた。彼等のうちにはフキニシアの遠隔の地方から遙々隨從して來つたもの  
もあつて、今や疲勞し盡くして居た。其の蓄へた糧食も悉く費やして、此の荒涼た  
る地に於ては之を求むることを得べくもなかつた。耶穌にして若し彼等を其のまゝ  
遺棄せらるれば、彼等は饑餓に迫まるの外はなかつた。耶穌は弟子を顧みて「我れ  
此の衆人を憫む、彼等我れ共に居る事三日にして食ふもの無し、飢えさせて去らし  
むることを欲まず、恐らく途間にて惱まん」と仰せられた。曩に耶穌が此れに超ゆ  
る群衆を養はれたことを記憶せる弟子たちは之を耶穌に委ねて「野にて此の多くの  
人を飽かすほどのパンを何處より得んや」と答へたが、此れは宛然「是れ我等に  
は能はざる所なり、我等之を汝の聖手に委ぬ」と言ふ意味であらう。耶穌は幾何の  
蓄へがあるかを彼等に問はれたが、ガリラヤの土民の常に糧食とする七つのパンと



少許すこしの魚があるばかりであつた。耶穌イエスは此の僅少の蓄へを取つて、之を祝し、四千人以上の群衆の一團に之を頒たしめられた。是れが充分に用に足れるのみならず、餘りの屑は七つの籃に溢れた。

舟ふねに由りりて通つれ給たまふ

群衆は尙ほ之を引き留めやうと欲したけれども耶穌イエスは脱出すべき方法を工夫せられた。即ち小舟を用意せしめ、奇蹟を行ふや否や湖に降り、之に乗つて、焦慮する群衆を湖邊に残して此所を去られた。此れより何處に赴かれたか明かでないけれども、南方に航路を採つて、湖の下部に上陸し、豫期せられた隱退の地を指して内地に入り込まれたやうである。聖マタイは『マгдаラの境に至れり』と言ひ、聖マコは『ダルマヌタの方に往く』と言つてゐる。此の兩地は此所に名の記さるゝのみであつて、何所とも解わからないけれども昔のヘロマクスに當るヤルマツクを含む地點の北一哩、ヨルダン河畔にエド・デルヘミヤと言ふ所がある。蓋し此れがダルマヌタでマгдаラは其の近傍の村であつたらう。此の村の名も聞え

ないが、其の近郊に於て閑靜な隱退の時を過ごさうと耶穌イエスの志された所以であつたらう。

パリサイ人パリサイイサドカイ人サドカイ來着きやく

然るに此所に於ても亦失望せられざるを得なかつた。湖の東岸に於て夥おほしき群衆を従へて居られたことが忽ち知れ渡つたので、其の敵は直ちに踪跡を探知することとなつた。其の隱退の地に着せらるゝや否や、カペナウンより來たらしく、パリサイとサドカイの黨人が一團となつて訪れて來た。彼等は耶穌イエスに對して故更に難問を試み、其の運命に關すべき言質を得て之れを賣らんとする計畫から跡を追ふて來た。彼等は例の古めかしき慣用手段たる休徵しよしの要求を以て先づ戦端を開いた。事實彼等は休徵しよしを數多あまた次び目撃し、又是れに就いて其の眞偽如何には疑ひもなかつたのであるが、然かも伴り装つて確信を得べき休徵しよしの必要なものと言ひ出たのであつた。即ち彼等は『天あまよりの休徵しよし』を求めた。聖クリソストムは『此れ耶穌イエスに太陽を停留とどめしめ、月夜に雨を降しめ、或は雷を投

『天あまよりの休徵しよし』の要求



げ落す等の如き要求を爲せるなりき」と言つてゐる。此の要求は耶穌の聖意に悲痛を宿さしめ憤慨せしむる一層甚だしきものであつた。是れぞ耶穌の臺前に行はるゝ眞の悲劇である。パリサイ人とサドカイ人とは生れながらにして傳統的な仇敵であつて、兩者は其の教理に於て政略に於て極端な懸隔あるものであつた。然かも共同の敵に當らんがために盲目となつて、彼等の相互の悪感を暫く措いて、兇暴にして不潔な同盟を組織したのであつた。蓋し聖靈に對して罪惡の極致に達したものであつて、到達赦さる可らざる無情此れよりは甚だしきなき所業であつた。『耶穌心の中に深く歎息』せられた。

主の  
拒絶

我等の主が休徴を求むるものに之を拒絶せられたのは、此れを以つて三回目であつて、其の都度如何に其の要求を適當に處置せられたかを特に注意すべきである。第一回は其の傳道開始の當初エルサレムに於て逾越節の間に起つたこと(約二〇十)であつて、其の休徴は有司にも亦當時の弟子にすらも、悟り難

い所であつたけれども尙ほ之に應ぜられた。即ち復活の休徴が此れであつた。第二回は憤慨しつゝ之を辱しめられた。然かも其の慣用の手段を以てニネベの人々がヨナの説教に由りて悔改したることと現在の論争とを比べつゝ、ヨナの説教よりも偉大なる休徴の彼等の前にあるに彼等が尙ほ心に留めざるを戒飾して之に應ぜられたのであつた(太十二三十八―四十二)。今第三回の要求が更らに提出されたが、耶穌は絶對に又之を辱かしめつゝ拒否せられた。『此の世の人、何んぞ休徴を求むるや、誠に我れ汝等に告げん、休徴は此の世の人に必らず與へられじ』と。

北方  
脱出

此等の惡意を含む論争の間に十二使徒を教訓せらるゝ事は耶穌に不可能であつた。故に此の地を去つて更らに隱退の場所を求められねばならなかつた。果して何れに向はれて然るべきであらう。ガリラヤは既に禁足の地であつて、湖の東岸も亦望みがなかつた。擇ばるべき地は更らになかつたけれども、尙ほ北方に今一回赴いて異教徒の地に隱家を求めらるゝ事となつた。故に再び湖岸に出



で、乗船して湖の頭部の端に航路を轉ぜられた。航程十三哩であつたが小舟の緩かに湖上を滑べる間、天の王國に關して十二人を教養せらるゝの機會を得られた。『戒心

パリサイ  
とサドカ  
イの團醉

してパリサイとサドカイの人の麪醉を慎めよ」と誠められた。此の時耶穌は現に遭遇せられた光景を思ひ浮べつゝ、パリサイ派の盲從的傳統教とサド

カイ派の放縱、並にヘロデ王廷臣の貴族的阿諛者に對するを誠められた。一句は其の眞のメッシヤの意義を論ぜらるべき前程(可八〇十 五参照)であつたが、若し其の後を續けら

るゝ事を得たならば蓋し彼等が豫期せざる可らざる——『基督の受けんとする苦難と其の後得んとする榮を』(彼前一〇十二)豫め彼等に示めざる筈であつた。然るに談話は

妨害せられた。乗舟せらるゝとき弟子たちは急いだ餘りにパンを携へ來ることを忘れて僅かに一塊のみの外は持合せなかつたので、耶穌が『麪醉』と仰せらるゝ語を

文字のまゝに解して、パリサイ人やサドカイ人に加擔する人々からパンを得る事を禁じ、其の得べき方法を命ぜらるゝのであると想像した。

十二使  
徒の  
遲鈍

此れ十二使徒の遲鈍にして非靈的なるを示めすものであつた。『麪醉』なる語を精神的の意義に用ゆるはユダヤでは普通であつて、彼等が殊に

先頃見聞した事實を有する以上此の誤解は許すべからざる失態であつた。若し彼等にして人を眞に穢すものに就いて主の教訓(太十五〇十六—二十 可七〇十八—廿三)を心に留めてゐたなら

ば、パリサイ人或はサドカイ人の手に觸れたパンと雖も之を禁ぜらるゝ事なきを夙く悟り得べきであつた。況んやパンの一握を以て數千人を兩回も養はれた耶穌が彼等の間に居らるゝのに何の心配があらうか。『何ぞ互にパンを携へざりし事を論ずるや、未だ悟らざるか、汝等の心尙ほ頑きか、目ありて視えざるか、耳ありて聽えざる乎、又覺らざるか。我れ五千人に五ツのパンを擘り與へしとき、其餘屑を幾筐拾ひしや、又四千人に七ツのパンを擘り與へしとき、其餘屑を幾筐拾ひしや、汝等此れを記えざるか。』パリサイとサドカイの人の麪醉を慎め』とはパンに就きて言へるに非ざるを何ぞ悟らざる』と耶穌は叫ばれた。



ベテサイ  
ダの醫者  
治の療

此の事件に由つて耶穌は愈十二使徒の教養の緊要なるを事新たらしく感ぜられた。時に行程は終つて、小舟は其の航路盡き、一同は湖の北方に到着して上部ヨルダンの河口に上陸せられた。河の左岸を少し溯るとベテサイダと稱する小さき美はしい町があつた。曾つては寂しい村落であつたが太守ピリポが其れを擴張し整理してロオマ皇帝アウグストの娘ユリアの名前を取つてベテサイサイダ・ユリアと稱するに至つた。耶穌は北方に心急かるゝまゝに、私かに此の町を隠れて通過せらるゝ思召であつたらうけれども早くも發見するものがあつた。而して癒やさるゝ爲めにと醫者を伴つて來た。群衆が再び集り來つて、其の行程を遮るべきを觀取せられた耶穌は、醫者の手を執つて、奇蹟を行ふ前に之を町の外に伴ひ、視覺を遮られて居る爲め、觸覺を以て、其の靈性に接せられた。而して當時の醫者の所作に準じ、其の眼に唾を付けて手を觸れ、何物が認め得るかを問はれた。醫者は眼を開いた。蓋し其の聖手と聖音に彼の信仰は燃やされて、之を仰ぎ見んとして

努力したのであつた。其の瞬間に奇蹟は行はれて『我れ此の人々の歩行くを見るに樹の如し』と答へた。英國の一哲學者の言ふに、或る醫者に紅の色に就いて如何なる觀念を有するかを問ふと、彼は、喇叭の強い音を集めたやうに思ふと答へたさうである。此の醫者は周圍の人々を眺めて、其の動くを見れば人なるを知るが故に人を見らると思ふけれども、彼等は盲目中に胸に描いてゐた樹のやうであると答へたのであつた。主が其の兩手を其の錯亂した眼に觸れ給ふや否や、萬物整然と見ゆるに至つた。

ベタニ  
ヤより  
脱出

此の男は近郊の村に住つてゐたものと思はる。耶穌は一般の人に認めらるゝを避けんがため、彼の町に入るを禁じて、直ちに家に歸らしめ、斯くて僅かに活路を得て、遮ざるものなき旅行の途に上られたのであつた。



### 第參拾壹章 重大なる告白

『主の賜を以て祝し給へる汝、

ヨナの子よ幸福なるかな、

「神の靈に由りて生れし如く、

天に在ます我が父に由らすば、

汝の血肉に由りては悟るを得じ』と』

中世紀讚美歌

(太十六〇十三—九、可九〇廿七—九、路九〇十八、二十)

カザ  
ヤビ  
ビにて

恰かもガリラヤの國境に當り、堂々たるヘルモン山の裳にカイザヤ  
ビリビなる一市邑がある。誠に愛すべき地方であつて、ヨルダン河は此

所に源を發し、聖ジエロオムの言ひ傳ふる所では、其の語源を想像してヨルとダン  
なる二つの源泉の下流が彼の神聖にして歴史的な大河と合して流れ、遂に其の名も

二つを結んで稱せられたものであると言ひ、今も尙ほ地方の基督者の間に之が信ぜ  
られてゐるのである。始めギリシヤ人が此所に移住したとき、彼等の神バンの殿堂  
を建設して市の名をバニアスと稱したが、太守ビリボの代に及び市を改修してカイ  
ザル・アウグストの名を取つてカイザリヤと稱し、パレンスタインの海邊の市、カイ  
ザリヤ・ストラトニスなるカイザリヤと區別せんが爲め、自己の名を付してカイザ  
リヤ・ビリビと呼ぶに至つた。

人の子  
を誰か  
なすか

耶穌は長く志さゝれた隱家を此所に發見せらるゝや、天の王國に關  
し、又己が身に及ぶ『一大團落』に對して彼等に準備せしめんが爲め

に、十二使徒教育の事業に全力を注がれた。先づ第一に速かに確定し置かれざる可  
らざる問題として最高主要の時期に關する事から始められた。其の公生涯に入られ  
てより民衆の頻りに論議せる耶穌自身に關し、十二使徒の懷抱せる意見を質し、彼  
等が耶穌に對して如何なる判斷に到達したかを知らんと欲せられた。即ち其の意見



を發表せしめらるべき時期を發見せられたのであつた。耶穌はカイザリヤの近邊を彼等を體同しつゝ歩いて居られたが、聖意は或る大事件に集注せられ、祈禱に己れを忘れて居られたに相違はない。聽がて彼等を顧みて『人々は人の子を謂ひて誰と爲す乎』と問はれた。耶穌が此所に『人の子』なる名稱を用ゐらるゝは目的があつたものである。是れ其の謙讓を表はさるゝ稱號であつて、彼等が其の内に隠れた光榮を發見し、其の真相を如何なる程度まで認識してゐるかを知らんと欲せられたのであつた。耶穌は此所に有司たちの思想は如何と問はれなかつた。彼等の意見は耶穌を以て詐僞者と爲し、速かに之を滅亡に歸せしめんとする決意は既に明白に公表せられてゐる所であつた。然し一般民衆の意見は如何。彼等は勿論其の天に關する教訓と其の奇蹟に對する驚駭とで極力耶穌を敬慕してゐるけれども、要するに唯だ其れだけの事であらう。彼等は果して耶穌の人格と其の事業に就いて正當な概念を得てゐるであらうか。『人々は人の子を誰と言ふ乎』との問ひに、十二使徒は彼等が聞き

得た種々の意見を供提した。即ちヘロデ・アンテバスの如き人々は耶穌を以てバプテスマのヨハネなりと言ひ、或る人はエリヤなりと言ひ、又或る人は古への預言者の一人、恐らくエレミヤであると言つた(可六〇七―九)。

『汝等は  
我を誰  
なり乎』

耶穌は、己れに對する人々の批評を十二使徒よりも一層好く看取してゐられたのは勿論であつて、彼等に之を徵せられたのは其の批評を知らんが爲めではない。更らに一層重大な含蓄ある問題を供提せんが爲めの準備であつた。以上の如きものは民衆の意見である。『然らば汝等は我れを言ひて誰れとする乎』と續いて質された。此れ試験的の重大なる質問であつた。彼等の答辯如何は耶穌に對する弟子たちの態度を定むると同時に其の教訓より彼等が如何なる利益を受け、彼等は又日ならず委ねられんとする責任を果して負ふに足るや否やを示すものであつた。言下に少しの猶豫も置かず答へて『汝はメツシヤなり』と言明したものがあつた。此れぞペテロ、即ち『使徒たちの口、絶えず熱烈に

重大なる  
告白



して、使徒合唱團中の指揮者』たるペテロであつた。誠に重大なる告白である。如何なる事情よりするも耶穌を以てメツシヤと爲すは重大な告白であつて、預言者が豫め主張し、正義の人が見えんことを渴望せる救主として耶穌を認識するもので、長くイスラエルの待望し、人類世界の熱心渴望せる人物を以て之を待つ所以である。然し場合が場合であつた爲めにペテロの告白には格別なる意義を生じ、耶穌に取つて特殊の價值あるものとなつた。其の傳道の首途に當り第一に隨從した弟子たちは洗禮者の證言に勵まされ、又自ら親しく之に接し、耶穌をメツシヤと信じつゝ身を投じて來たのであつた。然し彼等はユダヤ人であつて、メツシヤと其の事業に就いてはユダヤ人の觀念から免るゝ事は出来なかつたが、爾來耶穌と不斷に接觸してゐる間に其の幻想は絶えず破壊せらるゝのみであつた。耶穌は油斷なく、此のメツシヤに就いて一般に確信せらるゝ觀念と奮闘せられたのであつた。而して忠信搖がず謙遜の道を歩まれたので、彼等は日を重ねるに従つて、耶穌は身に受けらるゝ

喝采を斥け、人の熱情を醸す物質的權威を棄てらるゝ卑賤な人の子なりと認識するに至つた。パプテスマのヨハネすら主のメツシヤたる所以の此の簡單な試験を課せられて、其の心搖いだのであつて、十二使徒が之を疑ふに至つたのは無理はないのであつた。然るに『汝はメツシヤなり』との答へが猶豫もなく直ちに表はれ出たのは重大な告白であると言はねばならぬ。彼等は未だユダヤ人たる思想に尙ほ囚はれてゐるのは勿論であるけれども、既に其の主の恩寵に滋くも浴して、其の榮光の到底疑ふべからざるを深く感じたのであつた。其の現状の彼等の信仰とは矛盾せるを思ひつゝも耶穌のメツシヤにして、イスラエルの救主なるを思はざるを得なかつたものであつた。

耶穌の稱讚

耶穌は歡喜に溢れつゝ此の告白を祝された。其の努力の効空しからず、其の信任の仇ならざりし歡ぶべき證據は握られたのであつた。即ち『ヨナの子シモン、汝は福なり、蓋は血肉汝に示せるに非ず、天に在す吾が父なり』と



叫ばれた。此所に耶穌の用ゐられた名に注目すべきである。シモンとは彼が耶穌に見えざりし以前の舊時代に冠せられた此の使徒の名であつて、ヨナとは『エホバの恩寵』の意味である。彼の告白は彼が神の恩寵の眞の子たる新たな人間となつたことを示めすものである。此の偉大な信仰は人間の智慧を以て教へられたものではない、天の父の啓示し給へる所であつた。他の場合に耶穌は『父の外に子を識るものなく、子及び子の顯はす所のものの外に父を識るものなし』(太十一〇廿七)と仰せられた。

ペテロ  
に對す  
る約束

此の重大な告白が耶穌の聖眼に如何なる價値があつたかは、獨り此の弟子に斯くの如き祝福の語を寄せられたのみならず、驚くべき褒賞を約束せられたのを見ても明かである。今度は初めて彼を引見せられた記念の日に自ら彼に與へられた名を、意義を籠めて用ゐつゝ、『我れ又汝に告げん、汝はペテロなり、我が教會を此の磐の上に建つべし。陰府の門は之に勝つべからず、又我れ天國の鑰

を汝に與へん、汝が地に於て繋ぐことは天に於ても繋ぎ、汝が地に於て釋く事は天に於ても釋くべし』と約束を授けられた。耶穌の教訓中此の語ほどに無情に取扱はれ、悲しくも無視されたものはない。此れぞ法皇權の動かすべからざる基礎となつた聖句であつて、人間の頑迷を證明する悲しむべき例として、誠に悲劇に外ならぬのである。畢竟此れ身を挺してすら當時の祭司商賈に戦を排まれた耶穌の聖句を基礎として新たな祭司商賈を建設し、舊態に勝りて暴力を揮ひ、其の領域一層廣く、其の感化の一層兇惡な所業を敢てするものである。ロオマ教會の註釋が偉大な師父の何人に由つても是認せられてゐないのを見ても充分である。オリゲンはこの約束を以て單にペテロのみならず、ペテロの告白に同意する總ての弟子に對して結ばれたものであると教へ、聖クリソストムは磐とはペテロに非らずして、ペテロの信仰即ち『彼の告白の信仰』であると主張した。聖ジエロームは磐とは耶穌自らの事であると云つた。即ち『恰かも耶穌が「世の光」と稱せらるゝに足る光を使徒に與へ



られたると等しく磐なる基督キリストに信仰を置けるシモンに、ペテロ即ち磐なる名を授けられたり」と。而して彼は又長老並びに監督に言及し「是れ此の聖句を悟らずしてパリサイ人の倨傲に幾分學ぶものなり」とまで言つてゐる。聖アウガスチンは始め聖アムプロオスの聖歌せいこに準じて岩とはペテロなりと考へたが、後に其の前説を全く取消しはしなかつたけれども、磐とは基督キリスト自らなりとの見解を持するに至つた。

使徒時  
代の二  
註譯

然し耶穌イエスが「汝は磐なり、我が教會を此の磐の上に建つべし」と仰せられたのはペテロを指して言はれたことは疑ふべき道理がないのである。此の聖語みことばに甚だしく華かにして、強い感情の表はれてゐるのは其の偉大な告白を供提して聖意みことばに歡喜を溢れしめた使徒に對する讚辭であつた。實に血肉に由りては明かならざる意味が聖靈の啓導に由つて示めされたものである。是れに就いて二つの使徒時代の思想があつて、其の意義が遺憾なく徹底してゐるのではないけれども尙ほ其の最善の註解たるを失はない。

(1)教會は  
活ける神  
殿なり

第一は活ける神殿は、活ける石を以て建設せざる可らずとの教會に對する嚴肅なる觀念である。エペソ人に對して聖パウロは「是の故に汝等今より賓旅たひよに非ず、亦寄寓者やどれるものに非ず、聖徒と同じ邦、又神の家に屬するものなり、且汝等使徒と預言者の基の上に建てらる、耶穌基督キリスト自ら其の隅の首石おんいしとなれりひこいへみ全屋皆な構合くみかて、彼の中に在り、やゝに増して聖殿主せいだんぬしの中に成るなり、汝等も偕いへに彼の中に建てられたり、是れ靈に由りて神の居すみ給ふ所となるべき爲めなり」(二九—三)と書き送つた。此れ實に使徒時代の教會の中心思想であつて、聖ペテロが此れを思ひ浮べて、其の想像力を刺戟せられたことは特に注意すべきである。彼が其の第一の書に古への預言者の語ことば(賽廿八、〇十六)を受け續いで「主は人に棄てられ給へど神に選ばれたる貴き活ける石なり、汝等彼に來り、活ける石の如く建てられて靈の室いへとなり云々」(二〇四、五)と記すに當つて其の心にカイザリヤ・ピリビに於ける主の約束を描がいてゐなかつたであらうか。此所に耶穌イエスの本來の意味がある。耶穌イエスの教會は



活ける神殿であつて、其の石は活ける人間である。而してペテロにして若し其の靈の家に築かれたる第一の石ならしめば、其の榮譽や格別にして比ぶべきなきものである。其の告白を彼と等しうするものも亦彼と同じ褒賞を受くべく、然り、彼よりも價値あるものは、一層赫灼たる光榮を輝かすことも出来るけれども尙ほ彼が耶穌の榮光を先づ第一に告白したと言ふ無比獨特の榮譽に至りては、何人も其の誇るべき地位を彼と争ふを得ないのである。カイザリヤ・ピリビの此の重大なる時期に主耶穌基督の教會は誕生し、活ける神殿の第一の礎石は据えられたのであつた。

基督と  
信者の  
合一

此所には又基督と之を信する人間との一致合同てふ雄大なパウロの思想が含まるのである。此の使徒が斯くの如き言語に絶する秘義を主張する其の語の如何に不可思議にして大膽なる！『我等は基督が身の肢なり』(弗五〇)『汝等の身は基督の肢なるを知らざるか』(哥前六)『各人基督に於て一體たれば亦互に其の肢たるなり』(羅十二)『體は一にして多くの肢あり、一體の凡ての肢は多けれ

ども一の體なり、基督も亦斯くの如し……若し一つの肢苦しまば諸の肢共に苦しみ、一の肢貴ばれなば、諸の肢共に喜ぶなり』(哥前十二)『今我れ汝等の爲めに受くる苦しみを喜び、又我が肉體を以て基督の體即ち教會の爲めに其の患難の缺けたる所を補ふ』(西一)『此所に其の結構は異なるけれども耶穌が『我れ天國の鑰を汝に與へん、汝が地に於て繋ぐ事は天に於ても繋ぎ、汝が地に於て釋く事は天に於ても釋くべし』(賽廿二)と仰せらるゝ眞の意義が存するのである。約束はペテロに對して結ばれたのであつて、此の時以來彼は教會の搖がざる出現として、其の第一なれども然かも唯だ一個、活ける教會の石となつたものである。然し日ならずして他の人々の加へられたとき、此の約束も繰返して結ばれたのであつて、之を以て見てもペテロ唯だ一人に與へられたるに非ずして教會の全兄弟に與へられたものなるは明かである(太十八)。此れ實に驚く可き約束で、其の背後に含まるゝ主義、此れが据えられた其の基礎は果して何であらうか。此れ天に在る全教會と地上の教會との合同一致



を示めす不滅の眞理ではあるまいか。一つの靈、一つの生命は全體に通じて居る。地上に於ける基督の聖徒は世界に對する基督の證人であつて、彼等は基督の代表者である。故に基督の名に於て彼等の行動は悉く基督の承認せらるゝ所である。彼等の言語は彼等の言語に非らずして、彼等のうちに宿る基督の靈の聖語である。彼等の決定する所は天に於て批准せらるゝのである。『我れ誠に汝等に告げん、凡そ汝等が地に於て繋ぐ事は天に於ても繋ぎ、汝等が地に於て釋く事は天に於ても釋くべし』(太十、二十、可十三、〇)。

二様
合の一

斯くの如きもの實に教會の特權である。然し教會が不可思議なる體に合一する場合にのみ此の特權を生ずるのである。而して此れには二様の合同があるのである。一方には肢と肢との間の合同であつて、聖パウロは『神は體を調和へたまへり、是れ體のうち分るゝ事なく、諸の肢互に相顧みて扶けん爲めなり』(哥前十二、〇)と言つた。耶穌は此の眞理を『汝等のうちに二人のもの地に於て心を

合せ何事にも求めば、天に在す吾父は彼等の爲めに之れを成し給ふべし。蓋は我が名の爲めに二三人の集れる所には我れも其の中に在ればなり』(太十八、二十)と言明せられた。又一方に彼等の活ける頭と肢との合同であつて教會の至高の特權は、教會が基督に屬し、基督より生命を賦與せられ、基督の靈に活くる場合にのみ生ずるのである。聖パウロは『全體此の首に由り諸の節と維を以て相助け、相聯なり、神に育てられて長つなり』(西二、〇)と言ひ、耶穌は『汝等我れに居れ、さらば我れ又汝等に居らん、枝若し葡萄樹に連らざれば自ら實を結ぶ事能はず、汝等も我れに連らざれば亦斯くの如くならん、我れは葡萄樹、汝等は其の枝なり、汝等我れを離るゝ時は何事をも行能はざればなり』(約十五、)と仰せられた。教會が基督より離るれば即刻其の代表者たる權を失ふのであつて、其の生命は既に基督の生命ではなく、其の行動は基督の行動ではない。復活の主が弟子に現はれ給ふ其の週の忘る可らざる記念の第一日に此の眞理を顯る鮮やかに示めされたのであつた。曰く『汝等誰の罪を



釋すとも、其の罪釋され、誰の罪を定むるとも、其の罪定めらるべし』と。然し此の語に先立ちて「氣を嘘うそきて彼等に曰ひけるは「聖靈を受けよ」(約二四〇)と仰せられたのであつた。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が並んでいる）

### 第參拾貳章 苦難と榮光

『全き生涯を示めし給ふ汝は

恩寵深き十字架を心に留むるを望み給ふ。

恩寵深き十字架の一を

留め給ふ汝は只管に

之に思ひを潜め給ふ』

聖ボアゲエンチユラ

(太十六〇二十一十七七〇十三、可八〇三十一九〇十三、路九〇廿一廿六)

受難と復  
活の第一  
一 暗示

ペテロの唇より、其の弟子たちの信仰の告白を聽かるゝは耶穌イエスに取  
りて歡喜に堪へ給はざる所であつた。然し其の歡喜の潮が耶穌イエスの聖胸に  
沈下するや否や、彼等の證言が再び民衆の熱狂を惹起すべきを怖れ給ひつゝ、其の  
メツシヤなるを何人にも告ぐる勿れと誡められ、然る後重要な宣言を與へられた。



是れより前既に耶穌は己れを待てる悲運に就いて漠然たる暗示を與へられたけれども、世俗的王國てうエダヤ人の夢を胸に描きつゝ彼等は悉く之を心に留めなかつたのであつた。然るに今は彼等が此の真相を知らざる可らざる時期であつて、彼等の告白は耶穌をして之を發表せらるゝの勇氣を與へしめた。即ち耶穌は『エルサレムに往きて長老祭司の長學者等より多くの苦しみを受け、且つ殺され、第三日に甦るべき事』を彼等に示めされた。

ペテロ  
の抗議

此の宣言は十二使徒の耳には百雷の如くに轟いた。彼等は吃驚した。而して耶穌を熱愛せるペテロは之を耐ふるを得ず、其の欣慕せる師の袖を控えて、戦慄き惑ひつゝ抗議を呈出した。「汝に恩恵あれ、主よ、此事汝に来るまじ」と。此れ仇の厚意を寄する語であつてペテロの特徴が好く表れてゐるけれども、尙温かな愛情から湧いたものであつた。斯るが故に耶穌は之に一層の苦痛を感じられたのであつた。其の傳道の間十字架の影は終始一貫其の眼前に鮮やかであつて、俗

世の隆盛に赴かるるは耶穌に取つては一大事であつた。其の面は確固として搖がず、墓地に前程を望んで進まれたのであつた。此の世を贖ふ犠牲たるべき耶穌の死は天の父の聖旨であつた。然かも耶穌の肉は殘虐なる處刑に戦慄き、誘惑は間斷なく身に迫まつて、路を轉じ、容易なる方を選ばしめんとしたのであつた。其の公生涯に入らるるの當初、惡魔は世界の諸國と、其の榮華とを耶穌の眼前に開展して「汝若し俯伏して我れを拜せば此等を悉汝に與ふべし」との約束を以て、荒野に於て耶穌に迫つたのであつた。惡魔は爾來頻りに、耶穌の眼前に十字架の殘酷なるを呪咀しつゝ、他の圓滑な行路を示めして、絶えず之に迫つた。然し耶穌は常に此の誘惑者の甘言を排し、自己を棄て、自己を犠牲とせしめんとして召さるゝ聖音に聽従し、天の父の聖旨を成すに全身全靈を獻げ、其の事業を完成せられた。今や誘惑は其の暴力を揮つて新たに迫つて來た。其の語は惡魔の聲であるけれども今し方偉大な告白を供提した愛せらるゝ弟子の口を藉りてゐるのであつた。誘惑者は



ペテロの形態を装へると等しく、温かな真情を献げつゝ、之を強要して説服しやう  
 其の と試むるのであつた。耶穌が身震ひして、言下に之を假借せられなかつた  
 答辯 のは當然であつた。耶穌は其の美はしき外形の背後に潜む誘惑を認め給ふ  
 た。先づ身を廻して、彼等の思想や如何と他の弟子たちに一瞥を與へ、然る後、常  
 に恩寵の聖語の溢るゝ恵み深き柔和な聖唇より『サタンよ、我が後ろに退け、汝は  
 我れに礙くものなり、夫れ汝は神の事を思はず、人の事を思へり』との宣言が迸つ  
 た。

十二使徒の健忘

主が其の死と復活とを特に暗示せられたのは此れが始めてであつて、  
 此れよりは一層詳細な二回の事件に由りて更らに明かにせられた(太十二  
 三可九〇卅、卅一、路九〇四十三、四、太廿〇)。斯く明白に繰返して教へられても尙ほ、大  
 破綻を弟子たちが驚駭して迎ふると言ふのは羞耻此の上なき不可思議な事實である  
 やうに見える。彼等に取つて十字架は絶望の災害と思はれたので、復活の朝に其の

事件を婦人たちから聞いても、彼等は之を信用せず、常談と見做したのであつた。  
 否ペテロやヨハネは空虚となつた墓地を眼前見ても、尙ほ唯だ驚くのみであつて、  
 彼等は有り儘に之を豫想することは到底出来なかつたのである。

ユダヤ人的偏見に因へらる

斯くの如き豫告に對して彼等が抗議するは誠に怪しむべきであるけれ  
 ども、此れは受取り難い事ではなかつた。人間は其の理想を變改する  
 ほど困難なるものはないのであつて、弟子たちは地上の王國に對するユダヤ人的  
 期待に眼眩んで、頑固に之を追求してゐるのであつた(路廿四〇七、廿一、太十八〇二)。  
 既に耶穌は二回までも其の受難を發表せられた後にすら、彼等は其の玉座に待すべ  
 き席順を争つたのであつた。エルサレムを指して最期の旅に上らるゝときには、  
 彼等は其の王國を宣揚する爲めに赴かるゝものと考へた(太二十〇八、可十)。耶穌  
 が三度、嚴かに暗示せられ後までも、ゼベダイの子等は玉座の左右の席を與ふる約  
 束を受けんとして母と共謀して耶穌に迫まつたのであつた。即ち彼等は耶穌が其の



受難に就いて示めざるゝ意義を單純に悟る事が出来なかつた。彼等はメツシヤの殺され給ふ如きは有り得べからざる事と考へ、驚きつゝ其の聖語に耳を傾け、唯だユダヤ人的理想のみを固執してゐるのであつた。福音記者は『弟子其れを聞きて甚だ哀めり』(太十七)と言ひ又『彼等此の言を悟らざりし、悟らざるやう隠されたるなり、彼等もまた懼れて此の事を問はざりき』(路九)と言つてゐる。或は又『弟子此の語を少しも達らず、亦此の言へる事彼等に隠れたり、亦其の語れる言を知らざりき』(路十八)と言ふ。斯く耶穌は一回は一回より力を加へて是非とも其の本來の事情を悟らしむる爲め此の豫告を銘記せしめらるゝ必要があつたのであるが、此等を見ても彼等が遅鈍度すべからざるものであることを明かに知らるるのである。

其の當  
然の例

此れは誠に不思議であるけれども、又不釣合ではなかつた。耶穌の明々白々な宣言を排け、彼等がユダヤ人的偏見に囚はれ、潔からざる食物

に對する舊思想に執着し(太十五、十、二十、可八、十)、又耶穌が其の王國の傳播は、種子の成育や、醱酵の力のやうに徐ろに確實に行はるべきを教へられた比喻を輕じて、其の直ちに歸り來るべき豫言に信任を置かず、耶穌は世の排斥したものに厚意を寄せ、スカルに於て説教せられ、特にフキニシアに傳道せられたるに拘はらず、彼等はユダヤ人と同等の條件を以て異邦人の教會に加はるゝを拒める等皆な此れと相均等すべき行動である。此れは實に弟子たちの心の鈍重な事を示めすのみに非らず、同時に耶穌に對する彼等の信任の程度を示めすものである。彼等はメツシヤに對するユダヤ人的觀念を有してゐた。然かも耶穌の一言一行は是れと全く背馳してゐるに拘はらず、此の極端な矛盾を其のまゝにして耶穌のメツシヤなるを確信したのである。耶穌の行動は、彼等がメツシヤは當に斯くあるべしと信ずる所とは全く反對であつた。けれどを尙ほ彼等は其の恩恵を味つて、彼等の靈性の休憩所と頼んでゐたのであつた。



苦難を俱  
にせん爲  
め召さる

彼等の主にして死の必要ありとの宣言は彼等に取りて霹靂の如くに轟いた。驚駭しつゝ佇立する彼等に、耶穌は如何なる手段を取られたであらうか。耶穌は寧ろ進んで今一撃を彼等に與へられた。嘗に耶穌自ら苦しまれねばならないのみならず、彼等も亦其の苦みに與らねばならないのであつた。人心には何人と雖も主權を争ふ二條の要求がある——自我と耶穌、即ち是れであつて、人若し果して弟子ならば耶穌に其の主權を献ぐべき筈である。而して自我の阿嫂に對して『否』と主張し、十字架を取り、自我を之に掛け、自我を死に渡さねばならないのである。『若し我れに従はんと欲ふものは己れを棄て、其の十字架を負ひ我れに従へ』と。曩に使徒の職分に赴任せしめらるゝに當りて、耶穌は既に『十字架を負ふべきを』(太十卅八)示めされたが、今は更らに身に及ぶべき苦難を宣言せらるゝと同時に發表せられた爲め此れは單に比喻に非ず、畏懼すべき現實なるを認識するを得たのであつた。即ち耶穌の仰せらるゝ通りの意義を悟つたのであつた。

鼓舞  
奨勵

耶穌が斯く打撃に重ねるに打撃を以てせらるゝは不思議のやうに思はるゝ。又彼等が耶穌に轉じ來る所は既に充分に明かに悟つてゐるのであつた。彼等に必要なるものは新たな警告よりも寧ろ其の間、確たる信念を與へらるゝことであつた。然かも實際耶穌の斯くせられたのは頗る思慮深い處置であつて、彼等の丈夫の精神、彼等の義侠心並に彼等の信仰を煥發せられんが爲めであつた。又彼等の召されたるは英雄的苦節を全せんが爲めであつて、之に耐ゆる勇氣を鼓吹せられたものであつた。耶穌に對するの愛情、耶穌の彼等に寄せらるゝ信任、彼等を誘導せられたる神聖な行路に就きて彼等に訴へらるゝものであつた。彼等は果して『耶穌と福音の爲めに』極力努むる事能はざるものであらうか。尙ほ一層進んで耶穌は其の生命を保持せんと欲するものは之を失ふことを、宛然彼のロオマの諷刺家の『名譽の爲めにこそ生命を献げつゝも尙ほ生命の爲めに其の生命の目的を忘れて』の語と同じ事を以て誠め給ふた。『若し人全世界を得るとも、其の生命を失はば何の益あら



んや、又人何を以て其の生命に易へんや」と。人間は生命を一つの外に有しないものであつて、若し一次び之を失はば、何所に之を求むることが出来やう。此の耶穌の最後の議論は最も人を動かすものであつた。ユダヤ神學に由ればメツシヤは世界の終局に榮光を以て現はれ、審判を下さるゝものとせられた。故に耶穌は此の人の好く知る教理を身に引用せられた。若し其の弟子にして試練の間に失敗して、卑怯の振舞があつたならば、彼等は何の面目あつて、審判の重大な日に耶穌に見ゆる事が出来やう。如何にして耶穌の恩寵深き聖顔の審問に對する事が出来やう。『姦惡なる此の世に於て我れと我が道とを耻づるものをば人の子も亦聖使と共に父の榮光をもて來るとき之を耻づべし』と。此れ實に恐るべき宣告である。彼等が斯く親しんだ聖容は耻辱として彼方へ轉ぜられ、人と天使の嘲りの唯中に遺棄せらるべきを思はゞ常に心に留めて、其の重大時期に價值を具ふるやう努力せねばならないのである。

勝利  
の  
約束

斯くの如きものが、使徒たちの眼前に供提せられた光景であつて、耶穌は彼等に之を隠匿せらるゝ事は出来なかつた。然し此れに約束と、確信とを以て其の偉大な教訓を結ばれた。苦惱は如何に鋭くとも、勝利は確實で、彼等の中の或る人々は之を目撃するまで生き永らへる事であらう。『我れ誠に汝等に告げん此所に立つもののうちに神の國の權威をもて來るを見るまでは死なざるものあり』と。而して此の約束は成就せられた。即ち歴史の一不可思議は福音の傳播の速かなことであつた。福音は僅々三世紀ならずしてロオマの大帝國を包容し、遂に一基督教徒がカイザルの王座に即くこととなつた。十二使徒中には此の完成の期を目撃したものはなかつたけれども尙ほ彼等は此れと相若くものを見たのであつた。一時代の間には於てすら彼等が神の權威に由りて説教した所は當時知られた全世界に轟いたのであつた。パルスタインの國境より遙か、小亞細亞に、ギリシヤに、ロオマ大帝國に、福音は自由に侵入して、其の光榮を檀まにしたのであつた。紀元第五



十八年既に聖パウロは「基督我れを助けて異邦人を順従はしめん爲めに休徴と奇蹟の能と神の靈の能を顯はし、言と行とを以てエルサレムより徧くイルリコに至るまで其の福音を傳へさせ給ひしことの他は一つの言をも我れ敢て日はざるなり」(羅十五〇)と揚言するを得たのであつた。

山上にて

一週間の日が過ぎた。此の間が如何に用ゐられたか更らに記録はないけれども、無爲に時日を空費せられなかつたのは勿論である。其の事業に心身疲勞せられた耶穌はペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴ひて、山上に赴かれたが「彼等の前に其の容貌變り」て見え給ふのであつた。古來の傳説に由れば山はタポルの頂きであつたと言ふ。ギリシヤ教會では今尙ほ此の説を持して八月の六日に變貌の節を守り、之をタポリオンと稱してゐる。然し此れは實際たり得ざる妄想である。タポル山はガリラヤの南、カイザリヤ・ピリピから殆んど五十哩に近い所にあつて、加之此の頂上にはイタピリアムと稱する要塞あり、天來の秘義を示めざる

ゝには不適當な舞臺であつた。此の山は當然カイザリヤ・ピリピの近傍であつたに相違なく、ヘルモン山系中の一高峰で、僅かな距離を隔て、北に此の本峰が雪を頂いてゐたことであらう。

貌變

耶穌は天父の交際に由つて靈魂に休養を得んとして此所に來られたのであつたが、祈らるゝ間に言語に絶する奇蹟は行はれた。聖マタイは曰ふ「其の面目の如く輝き、其の衣は白く光れり」と言ひ、聖マコは「其の衣輝き白きこと甚だしくして雪の如く、世の上の布漂も斯く白くは爲し能はざるべし」と言ひ、聖ルカは「其の衣服白く輝きぬ」と言つてゐる。而して其所に二人の人物が耶穌の同伴として現はれた。此れモオゼとエリヤであつて、彼等は「耶穌のエルサレムにて既や世を逝らんとする事を」耶穌と物語つたのであつた。疲勞した弟子たちは眠つてゐたが、聽て眠りを妨げられて、始めて確かと覺むるや、此の驚くべき光景を目撃した。不意に幻影が消え始めたので、豫て熱烈なペテロは此の天來の訪問者を引き留



めんと考へつゝ、『ラビ、此所に居るは善し、我等に三つの廬を建らせ給へ、一つは汝の爲め、一つはモオゼの爲め、一つはエリヤの爲めにせん』と叫んだ。此れ實に愚にも着かぬ語であつた。聖ルカは『此は其の言ふ所を知らざりしなり』と評してゐる。彼れにして若し少しく思ひを廻らさば、口を緘むべき筈であつた。然し彼には彼れの目的があつたのであつて誠に粗暴極まる考へであつたけれども尙ほ厚き好意を表し忠誠の念のあるものに非ずんば思浮べ得ざる所であつた。彼は其の苦難に關する主の宣言を須臾の間も忘れる事が出来なかつた。而して山頂の光景は其れを遁れ給ふべき一方法であると彼には思はれた。彼は心私かに『何故にか此の神聖なる地を棄つべき。何が爲めに平地に降りて、彼の渦中に投ずべき。何が爲めにエルサレムに昇りて、恐るべき殘虐に會するの要あらんや。我等願くば此の幸福なる山中に永住して、長く此の天來の同伴と偕にあらん』と考へたのであつた。彼の語未だ終らざるに、雲は彼等の頭上を蔽ひ、主のバプテスマの時に天開け、聖靈

其の上に臨めるが如く、彼等は天上の聖音が『此は我が旨に適ふ我が愛子なり、汝等此れに聽くべし』(太三〇、七、可一〇、十)と言ふのを聽いた。彼等は恐怖に面を伏して倒れ、耶穌が起きよと命ぜらるゝまでは立つを得なかつたが、彼等が四周を見廻したときは、モオゼとエリヤは既に去つて、耶穌獨り残つて居らるゝのを見るのみであつた。

復活の豫告

此の驚くべき事件の眞の意義は、湖上を歩まれた主の彼の奇蹟と等しく、復活の豫表と見るに於て始めて明かとなるのである。神の全能に由つて耶穌の肉體は復活の生命の状態に歸せられたのであつた。聖パウロの語を藉りて曰ふと『靈の體』となられたのであつて、其の死より復活の後にはエマオの途上に於て、又エルサレムに於て、更らに湖の岸に於て斯くの如き状態で三次び現はれ給ふたのであつた。此の奇蹟には二様の目的があつた。第一の必要は耶穌に力を添へて、其の待てる暴虐な處刑に對し、之を鼓舞する計畫であつた。恰

耶穌が勵まさんが爲め



かも幔幕を掲げて、僅かに隙から永遠の世界を耶穌の眼前に露はさしめたやうなものであつた。又恰かも追放せられものに家郷を望ましむる如く、困憊せる旅客に休安を豫告するやうなものであつた。耶穌は人類の贖を成就せんがために、人の子の間に生活せられて始めて得らるべき榮光を瞥見し、又其の前程に己れを待てる歡喜と等しき豫兆を之に由つて得られたのであつた。變貌山上の此の好地位より、耶穌はカルザリイ丘上を過ぎて彼方に待てる事業の完成を、豫め認知られたのであつた。唯だ此の慰藉の豫兆のみではなかつた。耶穌の聖旨は十二使徒の鈍いこと、民衆の蒙昧、有司の毒心に痛くも心を惱まされたが、其の變貌の間に、其の事業を神は如何に認識せらるゝか、又榮光を授けられたる聖者が之を如何に見るかが之に由つて耶穌に示されたのであつた。今は孤獨のうちに地上にあつて、誤解せられ、棄てられ、迫められ給ふけれども、天の同情と嘉納との確實なるを明かにせられたのであつた。

受難を弟  
子たちに  
示す爲め

又變貌は弟子たちの爲めにせらるゝ目的であつた。即ちメツシヤの苦難を信ぜず又否定する思想を改めしめんがために之に伴ふべき榮光を彼等に示めされたのであつた。彼のイスラエルの榮譽輝く名簿中殊に偉大な榮光ある二人物との間の談話を傾聴して、彼等果して何を學んだ事であらう。彼等は『世を逝らんとする』即ちギリシヤ語に由れば『耶穌のエルサレムに於て成就せられんとする退出(註、出埃乃記の意を有す)』(彼後一〇 十五参照)に就いての此の聖者たちの語るを聞いた。弟子に對して忍ぶべからざる屈辱にして、又絶望的災害と思はるゝ此の事件は、モオゼとエリヤの判断に由れば、神が奴隷の境地よりモオゼの手に由つてイスラエルを導き出し、之を自由の國民たらしめ給へる際、行はれたる其の偉大なる救と相等しき驚嘆すべき勝利であつた。聖クリソストムの時代に用ゐられた聖ルカの福音書のうちには此れが甚だ明瞭であつて、其の一句は『彼等は耶穌のエルサレムに於て成就せらるべき榮光に就きて語れり』となつてゐる。而して斯くの如きもの



が其の後久しからずして教會に示めされたる主の受難の思想であつた。ヘブライ書には『我等死の苦しみを受けしに因りて、榮と尊貴を冠せられたる耶穌を見たり』(九二〇)と記さるゝ。

山より  
降りて

天父との交通に由りて能力を恢復せられ、又カルヴァリ丘上を過ぎて彼方に待てる榮光を瞥見せられて、苦難に赴く力を勵まされ給へる耶穌は、其の翌日は既に平原の方へ面を向けられた。若し此の物語の傳はるに於ては、誤解を招くべきを豫知せられて、耶穌は其の死より復活せらるゝまで彼等の目撃せる所を發表する勿れと其の弟子に命ぜられた。是れに由つて彼等は不審を抱くに至つた。既に耶穌は其受難を發表せらるゝに續いて復活に就いても教へられた(太十六〇二九〇廿二)けれども、唯だ驚異の念に因はれて希望洋々たる約束の意義を悟り得ざりし彼等も、今は此の事件のために注意を促さるゝ事となつた。然し彼等には隱語であつて耶穌の死より甦らるゝとの意味を、彼等は一つ一つに考へつゝ默想に耽るので

あつた。斯く沈思熟慮せる間に此の神聖な山上に於て目撃した光景と、此の問題との間の關係を彼等は果して各方面から研究したのであらうか。

エリヤ  
の來臨

彼等は其の意義を深く語つてゐたもので殊にユダヤ人的頭腦に關係する一大問題があつた。ユダヤ人一般はメツシヤの降臨に先立ちて、其の贖主を迎ふる用意をイスラエルに整へしめんがため、エリヤが再び此の世に現はれて、有力な改革を遂行するものと期待せられた。今彼等の目撃した光景は、此の教理に如何なる關係があるかを知るに苦しんだのであつた。エリヤは事實來たけれども何故に斯く來る事晩く、去る事速やかなのであらうか。彼はメツシヤたる耶穌よりも先きに來つて、耶穌の降臨前其の豫定の改革を完ふすべきであつた。即ち彼等は此れを其の主に質したのであつた。蓋しエリヤの再來は單にラビの夢に過ぎないのは勿論であつたけれども、耶穌は常に其の時代思想に厚意を以て接し、既にバプテスマのヨハネの使者の來訪して來た記念すべき日にも、此のユダヤ的觀念に對して愉快



な註釋を與へられた。耶穌はヨハネに對する讚辭に續いて『若し汝等我が言を承くる事を好まば、來るべきエリヤは是れなり』(太十一)と仰せられたのであつた。ヨハネはエリヤに對して期待せられた所を現實に行つたのであつて、メシヤの先程に進んで其の途を準備せんがために來つたのであつた。此れ實に剴切にして然かも新奇な適用であつたけれども、使徒として、彼等の職分に心を留めざる弟子たちは之を記憶しなかつたものであつた。故に今耶穌は己れを待てる苦難に就いて新たな暗示をせらるべき機會を捕へて再び之を繰返された。『エリヤは來りて萬事を改むべし、然れど我れ汝等に告げん、エリヤは既に來りしに人此れを知らず、唯だ意の任に彼を待らへり、此の如く人の子も又彼等より苦難を受くべし』と。

第參拾參章

カペナウンへ歸還

「此れが益なく効なきを思はれなば、汝は露はに汝の兄弟に諫めざる可らず。彼に對する暇きの因となるべきを慮りて其の罪を庇ふ勿れ。若し汝懇ろに祈らば此れに勝る能力を如何にして與へられざるを得べき。斯かれば暇く石を除き、暇きの因を破壊せらるゝ、主權者なる神の平和の天使たるを得べし」

セント・マルナルド

(太十七〇十四—廿三、可九〇十四—廿二、路九〇卅七—四十五、太十七〇廿四—七、太十八〇一—十四、可九〇卅三—五十、路九〇四十六—五十、十七〇一、二、太十八〇十五—卅五、路十七〇三、四)

學者及群  
民隱退の  
耶に侵入

耶穌が三人の弟子を伴つて山上に隠れ給ふた間に、平地に於ては種々の事件が起つてゐた。恰かもマグダラとダルマヌタの地方に退かれたとき、此の北方に遁れて來られ



ても尙ほ學者の一隊が群衆に取圍まれつゝ跡を慕つて、遂にカイザリヤ・ピリビの  
 隠退の地を發見するに至つた。彼等が尋ね當てたとき耶穌は居られなかつたけれど  
 も、九人の弟子の居るのを發見し、愚劣な敵意を挿んで彼等を惱まさうと考へたが、  
 願つてもなき機會を興ふる事件が湧き起つた。一人の男が耶穌に願はんがため、其

狂の氣  
少年

所へ訪ねて來たのであつた。彼には氣の狂つた啞で聾で又激烈な癲癩の病  
 ある子があつて、之を癒されん爲め此の場所へ伴つて來たのであつた。彼

九人の  
無能

より興へられたので、即刻之を試みたれども、憐れにも失敗した。學者の  
 歡喜は極度に達した。彼等は意氣沮喪せる弟子たちを見て喝采し、若し

耶穌にして此所に在らるゝも尙ほ同じく此の無能を暴露せられたに相違ないと説破  
 しつゝ、群衆の耶穌に寄する信任を傷つくる材料として其の失敗を利用したのであ  
 つた(太十〇一、可六)。  
 (路九〇二)。

耶穌之  
を癒す

攻撃の唯中に耶穌は出て來られたが、忽ち群衆を驚駭せしむべき事件  
 が起つた。未だ變貌の姿の名残を留めた耶穌の聖容はシナイ山上より降  
 り來れるモオゼの顔(出卅四〇廿)の如きものがあづたらう。彼等は駈け寄つて耶穌に

挨拶した。耶穌は其の騷擾の原因を問はれたので悶々たる父は詳かに事情を具した。  
 耶穌は弟子の失敗を聽いて『噫信なき曲れる世なるかな』と叫ばれた。『我れ何時ま  
 で汝等と偕に居らんや、我れ何時まで汝等を忍ばんや、彼を我が許に携れて來れ』彼  
 等は其の少年を携れて來たが、刺戟の激しかりしまゝに、彼は烈しい發作に襲はれ  
 て苦悶しつゝ、泡を吹いて地上に倒れた。悶ゆる父の心中は病の子にも勝して苦痛  
 に撈らるのであつた。耶穌は兩者を救ふ思召を以て其の父に向つて『幾何時より  
 斯くなりしや』と問はれた。父は『少き時よりなり、惡鬼屢之を火の中或は水の中  
 に投げ入れて殺さんとせり、汝若し爲ことを得ば我れを憫み給へ』と答へた。彼は殆  
 んど絶望してゐた。弟子たちの無能が彼の信仰を搖がせたのであつた。既に彼等の失



敗せる所を耶穌が能くせらるべしとも期待しなかつたのであつた。耶穌は其の絶望的な彼の訴へを其のまゝに受けて「汝若し信ずる事を得ば、信ずるものに於て爲し能はざる事なし」と應ぜられた。非難のうちにも尙ほ恩恵垂たる聖語と祝福に満てる聖容の色に彼の失望は霧散して「主よ、我れ信ず、我が信なきを助け給へ」と叫んだ。斯く父の信仰を握つたのを見て、耶穌は小兒の治療に取り掛かれた。「啞にして聾なる惡鬼よ、我れ汝に命ず、出で、再び入る勿れ」と仰せらるゝや、甚だしく叫んで、酷く輾轉し、全く死人と同様に小兒は倒れたが、耶穌は彼の手を取り、之を起し、其の病を癒して父に返へされたのであつた。

弟子たちの  
失敗の  
理由

此れ主の權威の顯著なる表現であつて、深い印象を與へたのであつた。然し此所に父の感謝にも群衆の喝采にも關係しない二つの團體があつた。即ち一方は狼狽して佇む學者の一團と、一方は九名の弟子とであつた。彼等の失敗した所を主が成功せられたことは自然彼等に對する弾劾となつたので、彼等は家

路に歸る途上其の秘義の存する所を論じて合つた。聖クリソストムは彼等の失敗は彼等が主の「凡ての惡鬼を出し、病を醫す能力と權威を賜け、又神の國を宣へ傳へん爲めに彼等を遣はされた」とき與へられた其の恩寵を失つた爲めであると言つてゐる。恐らく此れが彼等の心中に潜む怖れであつたらう。然し彼等は此れを承認する度量なく、彼等には非難すべき點なきものとして互に饒舌しつゝ、口實を工夫したもと思はるゝ。彼等は此れを以て彼等が有する權威に及ぶべからざる特別に困難にして、執拗な類例であると論定した。而して其の宿所に着するや、耶穌に來つて之を訴へたが、耶穌は假借する所なく其の口實を排斥せられた。即ち彼等は「斯くの如き種類の惡靈は特殊の權威に由らざれば逐出すこと能はず」と言ふやうな口吻を漏した。然るに耶穌は之に應じて「此の族は祈禱に非らざれば逐出すこと能はず」と答へ給ふた。此れ實に急所を衝く一語である。彼等は耶穌の山上に赴かれて不在の間、時に時を悪用して、メツシヤの王國に於ける彼等の地位を夢想しつゝ、何人か偉大な



らんと論争してゐたのであらう。彼等は祈禱の精神を失つて、胸中に低級な野心を燃やしつつ、天來の炎を滅燼せしめたのであつた。彼等の失敗は此れが爲めであつた。主の精神は斯くして彼等から失はれたのであつた。

カペナ  
ウナン  
向ふ

今や耶穌は其の隱家を去らるゝ時が來た。尙ほカイザリヤ・ピリビに延留せらる希望はあつたけれども、到底十二使徒のみと交渉して居ることを得ざる場合となつた。其の隱遁の地は公けにせられたので、煩はしき群衆と毒心を含む敵とは既に迫つて來た。故に其の眼を避けつゝ、ガリラヤを経てカペナンへ向はれた。弟子には尙ほ教育を授けらるゝ必要があつたので、途上に於て之れを種々に訓誨せらるべき望を抱かれたのであつた。此の鄙の地方を旅行せらるゝ

再び受  
難の表

間に極力正當な觀念に彼等を導かんとして、其の受難の恐しき宣言を與へて、彼等の頑迷な不信を寸断せられたのであつた。『此の語を汝等の耳に藏めよ、夫れ人の子は人の手に付され彼等に殺され、殺されて第三目に甦るべし』と

仰せられた。此所では受難に加ふるに謀叛に關する恐るべき事情を豫め公表せられた。彼等が此れを聞いて『甚だ哀しみ』、『懼れて問ふことをせざり』しも道理であつた。彼等は悲境に陥られた彼の失望の時、カペナウンに於て仰せられた『我れ汝等十二人を簡びしに非ずや、然れど其の中一人は惡魔なり』(約六〇)との苦がい聖語を思ひ浮べたのではあるまいか。此れぞ彼等が自分等の中に謀叛の伏在するのを初めて曉つた時期であつた。

未納  
の税金

遂に彼等はカペナウンに到着して、銘々の家に分れて歸つた。耶穌はペテロの家に宿られたが、彼等が町に入る前に各皆耶穌の左右より呼び出されたのであつた。是れは耶穌の注意を促すべき要件の爲めであつた。二十歳以上に達したイスラエル人は何人も神殿の維持のために毎年税金を賦課せられた(俟三十一六)。アダルの月、即ち三月の十五日が其の期日であつて、之を忘るものは同月廿五日に神殿に於て支拂を要求せられ、尙ほ之に應ぜざれば動産差押への憂きを見ねばな



らなかつた。耶穌にも尙ほ税金が課せられたのであつて、從來年毎に之を納入せられた。然しバプテスマのヨハネの處刑を聽かれて以來、遠く諸所に彷徨せられ、カペナウンへは唯だ一度來られたのみであつた。今は既に八月も終りに近いのに、其の税金は尙ほ未納のままであつた。集金者は早くも耶穌の歸還を認めて、其の負債の償却を迫まつた。直接耶穌に之を迫らなかつたのは、如何に彼等が耶穌に敬意を表したかを示めず證據であつて、彼等はペテロを小蔭に呼んで、出來得る限り懇懇に「汝等の師は半シケルを出し給はざるか」と問ふたが、彼は「然らず」と訥りながら答へつゝ家に馳せ歸つて之を耶穌に訴へた。

ペテロ  
の當惑

亞ひで古今未曾有の光景が現出した。此れ福音の物語に獨特にして、我等の恩寵深き主の隠れた特性を示めすべき事件であつて、不信の徒には嘲笑の材料となり、信ずる者には躓きとなる鋭い事實であつた。時は恰かも別に故更批評を加へんと欲するものもなく、自由な行動を安心して取らるべき、主の傳

道中稀れに見る穩やかな時期であつた。唯だ耶穌を愛するもののみ左右に侍し、何事にも誤解の生ずる虞れはなかつた。故に耶穌は温かき諧謔を試みて、其の熱烈にして誠心厚き弟子の當惑を一掃せられたのであつた。耶穌に戯れの企てがあつたことは明かである。試みに其の事情を胸に描かれよ。集金者の要求にペテロは逡巡した。此れは實に當惑すべき問題であつたに相違はない。時は耶穌が十二使徒を體同して遠路の旅行から歸られたばかりであつて、多くもあらぬ一行の財囊は頗る窮乏に類し、然かも其の請求は猶豫を許さざるものであつた。ペテロは家に馳せ歸つて其の當惑の狀を訴ふる爲めに急いで來た。耶穌は此れを面白く思召したに相違はない。即ち萬事事情は耶穌に明かであつた。耶穌は集金人の寄つて來るのを認められて、彼等の要求の如何は聽かれなかつたけれども、弟子の面相に寄つて問題を悟られたのであらう。現に數日前ペテロは嚴かな事實を見聞して、未だ日も経ざるに斯く輕々しく失望するのを見らるゝは耶穌に取つては迷惑であつたけれど



も、然かも尙ほ事情が一見不合理のやうに思はるゝ所から、迷惑よりも寧ろ面白く思召したことであらう。

主の免  
税の  
権利の

耶穌は先づ口を開いて、穩やかに非難の調子でペテロに語を掛けられた。『シモンよ、汝は如何に思ふや、世界の王たちは税及び貢を誰より徴るか、己れの子よりか他の者よりか』と。ペテロは答へて『他の人より徴るなり』と言ふ。『然らば子は與はる事なし』と耶穌は言はれた。此の言は諧謔であつたけれども、尙ほ嚴かな意義を含むものであつた。事實に於て此等の句は耶穌が常に自らの神性を主張せらるゝ聖語の一つたるべきものであつた。耶穌は神の獨一子であつて、神殿は其の父の家である。耶穌の榮光の爲めに神殿は存在するのであつて、此れを維持するため信仰の献金を負擔せらるゝ義務は無いのであつた。故に其の賦課の免除を主張し得らるゝ筈であつて、其の行動が誤解を受くる故にこそ、此れを實行せられないまでであつた。耶穌の救主たる事を認識しないものに對しては、此れは單に律法

を破壊するものと思はるゝのみなるが故に、耶穌は其の責任を慮られた。其の傳道の當初に耶穌は律法の神聖と其の不變なることを主張せられた(太五〇十)のであつて、傳道の終期に及ぶまで、會堂と神殿との禮拜に出席し、又其のメツシヤたる事を擁護する證據として、之を引用し、其の教義と條項に慎重な尊敬を表されたのであつた。從來年又年神殿の課税を納められたが、今又『彼等を礙かせざる爲め』に之を納めらるゝ筈であつた。

魚の口  
の金

然し何所に之を求めらるゝであらうか。此れぞペテロの困惑した問題であつた。彼は長く廢した職業に復しやうと言ふ考へは少しも起らなかつた。湖中に魚がゐなかつたのであらうか、將た之を賣るべき市場が無かつたのであらうか。是れぞ耶穌が勧められた企畫であつて、其の弟子の困惑した顔を眺めつゝ微笑みを以て愉快な諧謔を試みられた。當時漁夫が魚類の腹中から寶を發見したと言ふ話しは屢々あつたので、ユダヤの物語に由ればソロモンが其の紛失した印章



を魚類の腹から発見したと言ふのは其の著しいものであつた。ラビの傳説に由れば安息日を嚴かに守るので有名な、篤信のユダヤ人に名をヨセフと呼ぶものがあつたと言ふ。彼の隣家に富豪があつたが、占者の語ことばに由ると其の富豪の財産は懸て隣家のヨセフのものとなると言ふ判断を聞いて、大いに驚き其判断の實現しないうちに、彼は全財産を賣り、其れで眞珠を買つて、船に乗せ、湖に浮べた。然るに其の眞珠が湖に落ちて、其れを魚が呑み込んだ。魚は捕へられたが、偶ヨセフが、其れを買つて、魚の腹中から其の眞珠を発見したと言ふのである。『汝海に往きて釣を垂れよ、初めに釣る魚を取りて其の口を啓かば金一シケルを得べし、其れを取りて我と汝の爲めに彼等に納めよ』と耶穌は心中斯くの如き物語を思ひ浮べつゝ命ぜられた。此れは畢竟諧謔であつて、ペテロが其の主の語の意味を誤解す可くもなかつたのであつた。

ペテロの  
家に於け  
る教訓

其の日、恐らく夜であつたらう、弟子たちはペテロの家に集つた。而して耶穌は其の教訓を尙ほ續いて彼等に授けられた。彼等は嘗に受難や復活の如き高遠の眞理に心を向けしめらるゝ必要があつたのみならず、尙ほ其の世俗的な醜態ペンダを除いて、天の王國の精神に浸たさるゝの必要があつた。而して靜かに彼等と交はり、高尚な議論を試みられた結果、耶穌は彼等の心中に横はる思想を看取せられたのであつた。先づ第一に謙遜に就いての教訓を彼等に授けられた。耶穌は彼等の世俗的の野心を彈劾せられたけれども、彼等を面責するに非ずして、  
 謙遜の教訓  
 彼等自ら質問を試むるやうに仕向けられた。カイザリヤ・ピリビの途上弟子たちは足並が聊か遅れた間にも、主の高い思想から落ち下がつて、其の本來の面目を發揮して秘かに論じ合つた所であつた(可十〇三)。即ち耶穌が謀叛人に付わたされ、苦難を受けらるべき豫告を力を極めて與へられた後、其の語の未だ耳に残る間の事であつて、然かも尙ほ物質的應報に戀々として、主が大權を掌握して、エルサレムに



君王として望まると場合に、彼等の受くべき將來の榮華をのみ夢みて論争してゐた。此れ畢竟彼等の心の鈍重頑迷なる憐むべき證據であつた。斯くの如きものが彼等の胸中に絶えず漂ふ光景であつて、旅行の途中も、耶穌の耳には達しないやうに囁きつゝ争つた。野心と嫉妬とは彼等の間に暫くも去らない所であつて、遂に論争は爆發した。即ち「天國に於て最大なるものは誰ならん」との問題であつた。

然し彼等は其の主の注意を脱する事は出来なかつた。其の時耶穌は何事も仰せられなかつたけれども、家に着してから、問題の如何を質問せられた。羞耻に堪へざるまゝに彼等は黙してゐたので、聽て甚だ有効な教訓を彼等に與へられた。「若し首たらんと欲むものは凡て人の後へとなり、且總て人の使役とならん」と靈界の律法を授けられた。而して尙ほ之に説明を加へられた。恰かも其所へ「蓋しペテロの家に相違ないが—室のうちに小兒がゐた。耶穌は此の小兒を團樂の中に伴ひ來つて、其の好んで慣用せらるゝ如く其の小兒を腕に抱き上げて(可十〇十)六參照」此れを活ける比喩

とせられた。是れぞ實に剴切なる説明であつた。小兒は野心と、其の野心より發生する利己心とは全く門外漢である。聖クリソストムは言ふ「設令冕冠燦たる女皇を示めすとも小兒は尙ほ欄樓を纏へる彼の母よりも之を慕ふことなかるべし。彼は必らず華麗なる女皇よりも、寧ろ其の見窄らしき母を擇び取るべし」と。此れぞ天の王國の國民の心掛けでなければならぬ。「我れ誠に汝等に告げん、若し改まりて嬰兒の若くならずば天國に入る事を得じ」と。十二使徒が天國に於て大いなるものたらんとする希望は誤りではなかつた。然し其の偉大を目標す理想を誤るものであつた。此の世界に於て偉大なりと仰がるゝ人物は、其の同胞より卓越したものであつた。然し天國に於ては人に事へんとを心掛け、弱くして力なく世より侮辱せられ、脚下に蹂躪せらるゝ最も多く援助を要するほど甚だしく柔和なものこそ其の最大の偉人である。斯くの如きものが耶穌の精神であつて、之を服膺するものこそ其の弟子である。耶穌は「我が名の爲めに此の如き一人の嬰兒を接くるものは我れを接く



るなり』と仰せられた。

愛に就  
きての  
訓誨

此れは耶穌の深刻なる譴責であつた。ヨハネは之に對して答ふる勇氣もなかつたであらう。彼は『我が名の爲めに』との一句に、近頃起つた事件を回想した事であらう。恐らく其れは彼とヤコブとがガリラヤに於て傳道に従事してゐるときであつたと思はるゝ、『師よ汝の名に托りて鬼を逐出せるものを見たりしが我等と共に従はざる故此れを禁めたり』と報告した。彼には如何なる追想が起つたであらうか。ヨハネが斯かる報告を提出したのは問題を轉じて、會話を他の方へ引き入るゝ積りであつたに相違ない。而して其の譴責を當然受くべからざると同時に自ら耶穌のために努力し、其の褒賞を受くるに足るべきを證言せんと欲したのであつた。然かも此れ道を誤つた語であつて、彼は更らに新たな譴責を受けた。何人たるを問はず、主の事業を爲すものは、神の爲めに努力する所以であつて敢て弟子たちには何の關係もないのであつた。唯だ斯くの如き人は其の團體に屬せず、彼等

の有する特權を授けられずして略取したものと考へるだけに留むべきであつた。實際彼等の憤慨はヨハネの素朴な語に明かに現はれてゐるのであつて、唯だ個人的に問題としてゐるに過ぎなかつた。彼等は此の人が耶穌を穢すことを禁じたのではなかつた、耶穌の事業に携はるに拘はらず、唯だ彼等の團體に屬せざるが故に憤るのであつた。斯くの如きは其の主の榮光の爲めに憤るに非ずして、自己の爲め、嫉妬の爲めに憤るに外ならなかつた。

『其の人を禁むる勿れ、蓋は我が名に由りて異なる能を行ひて輕易しく我れを誹り得るものあらじ』と言ひ耶穌は更らに『我等に敵對はざるものは我等に屬く者なり』との寛宏な主義を授けられた。此の使徒團以外にあつたものは何者であらうか。天國には十二使徒以外の傳道者が必要であつた。彼等は蓋しガダラの惡鬼に憑かれてゐた男(可五〇十八、二十)の如く、耶穌に病を癒やされても尙ほ之に従ひ行くを許されずして、其の家郷、其の村民の間に歸つて、此所で其の救主を尊崇してゐたも



のであらう。彼等は使徒の同伴に加はるを得ず、何等か彼等と相區別せられざるべからざる理由があつたけれども尙ほ主の名に由りて主の事業を行つてゐたもので、此れ弟子たるに充分にして満足すべき試験を経たものであつた。故にヨハネは、後年パウロが『また猜忌それみと分争あらそひに因りて基督キリストを宣ぶるものあり、黨を結ぶ心より基督キリストを宣ぶ』、然れども『孰れにもあれ、或は偽、或は誠、共に宣ぶる所は基督キリストなれば』  
(腓一〇十) 之を喜べる如くに之を認容すべき筈であつた。

弱者を顧慮せよとの教訓

耶穌イエスはヨハネの語ことばに深き苦痛を感ぜられた。此の不明の男こそ耶穌イエスが常に特殊の同情を傾けて、小兒のみの意味に非らず、弱くして、厚意と扶助と忍耐とを要する總てを含めて『此の小さきもの』と仰せらるゝ種類の人の代表者であつた。耶穌イエスは『其の名の爲めに此の小さき子こゝろを接せず』、弟子たちが之を逐ひ出し、之に援助の手を與へず、却つて礙つまづく石を其の足許に横へたことを慨かれたのであつた。古への律法は替者めくらの前へ礙つまづく石を置き、或は路を踏み迷はしむるを罪に

定めてゐる(利十九〇〇十四)。然るに主の眼中には天國の路に妨害となるべきものを置くは極惡非道の罪惡と見えたと。『我れを信ずる此の小子ちいさきものの一人を礙つまづかするものは磨石ひきうすを其の頭に懸けられて海の深みに沈められん方向は益なるべし』と。神が限なき價值ありと認めらるゝものを輕侮するのが此の罪の恐るべき所以である。尙ほ救の世よつ嗣きには之に事ふる天使ありとのユダヤ人の思想(希一〇十)を藉りて『汝等此の小さき子の一人をも慎みて輕視あなどる勿れ、我れ汝等に告げん、彼等が天の使者つかひは天に在りて天に在す吾が父の面かほを常に觀ればなり』と仰せられた。

犯罪者に關する教訓

ヨハネの話はなしに由つて又別の教訓を詳かに授けられた。即ち殘虐なる暴漢の一例に對する禁令である。此れ決して其の弟子を犯罪人に關係せしめんとせらるゝものではない、唯だ教會の原則を授けられたのであつた。恩寵溢るゝ我等の主は教會政治上細密な組織を示めされなかつたけれども、尙ほ人間の代々に、世に對する耶穌イエスの證人となり、其の眞理の擁護者となり、又其の恩寵の寶庫たる



べき神聖なる團體の起るを考慮せられた。此のためには耶穌は自ら之を支配せらるゝ必要あり、事件を處置する爲め、其の靈は之を誘導せらるべく、ユダヤ教の規則は聽て基督教會政治の條項たらんとして神の採用せらるゝを待つてゐた。ラビは教へて『メツシヤの來らんとし、モオゼの儀式を廢し、或は變改せられざるべし。唯だ之を進めて一層壯嚴なる形式と權威とを之に加ふべし』と言つたが、此の意味に於て其の期待に應ぜられたのであつた。耶穌はユダヤ教の規定を採用せられた。其の新たな團體を『教會』と稱せられたが、舊約書中のモオゼの五書に集會と稱する所から起り、此所に授けらる規定の大部分は、ユダヤ教會堂の規則に一層壯嚴な條項を加へて採用せられたものである。

此所に其の一例がある。耶穌は往々教會に起る無謀にして無責任な暴漢を防ぐに、如何なる手段を取られたであらうか。ラビの規定に曰く『若し汝の隣、害を汝に加へなば、唯だ汝と彼とのみの間に於て事を定めよ、蓋し彼若し汝に聽かば彼を獲べ

きを以てなり。然れども彼若し汝に聽かずば、彼等の證の爲めに二三人の面前に於て彼に語れ。此れにも尙ほ聽かずば、汝の眼に價値なきものと彼を爲せ』と。此の教會政治の規則を耶穌は採用して之を補はれた。曰く『若し兄弟汝に罪を犯さば其の獨ある時に往きて諫めよ、若し汝の語を聽かば其の兄弟を獲べし。若し聽かずば「兩三人の口に由りて證を爲し、凡ての語を定めんが爲めに」(申十九)一人二人を伴ひ往け、若し彼等にも聽かずば教會に告げよ、若し教會に聽かずば之を異邦人且つ稅吏の如きものとすべし』と。此のうちには『教會に告げよ』なる一句が挿入せられたばかり、一語一語ユダヤ教の規定と相同じ項目であつて何の相違もないのである。此の一條項も亦ユダヤ人は此れを實行してゐた所である。即ち明かに忠告を受けて後に罪人が尙ほ其の汚行を止めないならば、會堂で公然と之を發表して、汚穢の者と銘打たれたのであつた。故に耶穌が此所に定めらるゝ所には少しも新たな規則はない。皆悉くユダヤ教の規則であつた。而して主の靈を以て之を完整せられて始め



て遺憾なき恩寵溢るゝ組織となつた。恰かも斯くの如く耶穌は犯罪人を、——忍耐を以て、兄弟の親情を以て、彼等を獲んとする熱烈な希望を以て、如何なる手段を以ても其の目的を達すべき斷乎たる決心を以て又彼等に對して短慮を全く棄て、——取扱はれたのであつた。

教しの  
度に制  
限なし

此の教訓に由つてペテロは質問を起して、『主よ、幾たびまで我が兄弟の我れに罪を犯すを赦すべきか、七たびまで乎』と伺つた。ラビの規定では三たびまで罪を赦せば好いのであつたが、ペテロは恩恵を示めず積りで『七たび』と言つた。七たびは一週りの都合の好い完全な數であつた。然るに耶穌は『否、赦すべき數に限りなし、汝に七たびとは言はじ、七たびを七十倍せよ、兄弟若し悔いなば免るせ、若し一日に七たび罪を汝に犯して一日に七たび、汝に對ひ「我れ悔ゆ」と曰はゞ免すべし』と答へ給ふた。此れに續いて其の授け給ふた教訓のうちにも殊に深刻な意味ある比喩を説かれた。或る王が二百萬磅の夥しき負債を有する

奴隸を使用してゐた。斯くの如き負債は人間が人間に對して到底貸與し得ざる巨額である。蓋し神に對する我等の負債を現はすには最も適當な例である。償却すべき日が來たけれども彼は之を返済する事が出来なかつたので、王は彼の家財を沒收し、其の妻と小兒とを奴隸に賣らうとしたが、彼の懇願と誓約とに動かされて、其の宣告を取消した。然るに其の奴隸は戶外に出づるや僅々三磅十志（約三十五圓）を貸した同僚に會つたが、彼は直ちに其の咽喉を捕へて、償却を迫まつた。不幸な債務者は彼の脚下に平伏して、今しがた彼の絶望の口から出たと同じ語で彼に懇願して『我れを寛し給はゞ皆償ふべし』と言つた。然し彼は寸刻の猶豫も與へず、無情にも、彼を捕へて獄に投じた。王は其の話を聽いて大いに憤り、其の惡黨を前に曳き來れと命じ『惡しき奴隸よ、汝我れに求ひしに因りて我れ其の負債を悉く免したり、我が汝を憐みし如く、汝も亦友を憐むべきに非ずや』と遂に彼を拷問係に引き渡した。



耶穌は嚴かなる口調を以て此の徳義に就いて『若し各其の心より兄弟を救さずば、我が天の父も亦汝等に斯の如く行給ふべし』と力を籠めて教へられた。耶穌は特別に『我父』と仰せられた。人を救さざるものは神の子ではない。

### 第參拾四章 ガリラヤ滯留

『汝の力は強大ならず、あゝマンモンの悲惨なる奴隷よ、汝は耶穌基督の十字架を崇めつゝも尙ほ汝の財囊に信頼す、然れども汝の黄金失はれて後汝は始めて満足し、神を喜ぶに至るべきのみ』

聖ペルナルド

(路十〇一路十〇十三―五路九〇二十一―四路十二〇十三―廿一路十二〇廿二―廿四太六〇十  
九―卅四路十三〇一―十七)

悲しむ  
回へ  
願

耶穌はカペナウンに歸られたけれども滯在のためではなかつた。『耶穌天に升るの期至りければエルサレムに往く事を確く定めたり』。其のガラヤ傳道は終局を告げた。聖意は過去を回想し、其の完成せられた事を追想せられて取亂された。實に悲しむべき回顧である。濺がれた愛情は如何ばかり周到なものであつたらう。然かも其の酬ひの冷酷なことは如何ばかりであらう！ 其の播かれ



た種子の夥しくして收穫の貧弱さ！ 勿論人望の中心とはなされたけれども、民衆の熱狂を醸し、其の喝采を博せられたるも畢竟奇蹟の爲めであつて、其の使命を傳へられたる爲めではなかつた。忠誠を獻ぐる弟子としては、ガリラヤに横溢せる幾千萬人中の一掬の水の然かも一滴に過ぎなかつた。世俗の標準より判断すれば耶穌の傳道は全然失敗に終つた。此の熱愛せられつゝも、斯くも冷酷に見棄てられたる地を眺め給ふては、自ら悲痛遣る方なき非難の聖語が、其の唇より漏るゝに至つたも道理である。『あゝ禍なるかなコラジンよ、噫禍なるかなベテサイダよ、汝等の中に行し、異なる能を若しツロとシドンに行し、ならば、彼等は早く麻を着、灰を蒙り坐して悔い改めしなるべし。審判の日はツロとシドンの刑罰は汝等よりも却つて易からん。既に「天にまで擧げられたるカペナウンよ、又陰府に落さるべし」(賽十四〇)蓋は汝に行しし異なる能を若しソドムに行ししならば今日までも尙ほ保存しならん。我れ汝に告げん、審判の日にソドムの地は汝よりも却つて易かるべし』と。

## 七十人

主の計畫は徐ろにエルサレムに上らるゝにあつた。而してサマリヤを通つて、往く往く説教せらるゝ筈であつた。各方面より見て此れは主の最後の傳道であつて、有効な結果の齎らさるべきを望まれた。而して其の成功を收めらるゝ爲め如何なる手段を執らるゝであらうか。其の回心者のうちより七十人を選択して、十二人に加へ、使徒として之を任用し、沿道に遣はさんがため二人宛一組として「自ら至らんとする諸邑諸地」へ送り出された。其の第一の目的は自ら赴かる地の民心に準備を爲さしめ、其の傳道を歡び迎ふる心を開拓せしめらるゝにあつたけれども、尙ほ又同時に弟子たちのユダヤ的頭腦の容易に首肯し難き一大事實に對して彼等を向上せしめんと欲せらるゝのであつた。第一に使徒を選定せられたときは彼等の使命はユダヤ人に對するにあつたのでイスラエルの古來の十二種類に適應して十二名の數を用ゐられた。斯くして先づユダヤ人より始められたけれども、其の計畫には更らに大いなるものを藏められたのである。耶穌は世界の救主で



ある。故に今其の全世界に及ぶべき福音の前途と、世界的の救拯とを宣言せらるゝ時期とはなつた。ユダヤ人の思想に由れば人類は七十の國民から成立してゐると言ふ。故に地球上の全國民に對する其の使命を表象せんがため七十人の使徒を採用せられたのであつた。

遠の産  
分の配

七十人は各、其の行程に上つたが、耶穌はガリラヤ地方に旅行しつゝ、恐らく其の傳道の舞臺を重ねて訪ねて、暫し低徊せられたものであらう。其赴かるゝ所として、熱心な群衆が集まつて來たが、或る日説教の後に聽衆の中から或る聲が訴へた。如何なる苦痛が此の男にあつたのであらうか。此れ果して救ひに關する大問題であつたらうか。否な斯くの如きは彼の思ひも設けない所であつた。即ち彼は叫んだ。『師よ、我が兄弟に遺業を我れに分てよと命給へ』と。此れに對して耶穌は深き苦痛を感じられた。無論彼は耶穌を輕侮した譯ではなかつた。寧ろ彼は甚だ懇勸に願ひ出たのであつて、自ら能ふ限りの鄭重な態度を取つたのであつ

た。斯くの如き訴訟を裁定するのは會堂の宰の任務である。斯く彼は師即ちラビとして耶穌を尊び、其の仲裁を求むるほどに耶穌に深く信賴した。然かも耶穌は之を悲しまれた。世俗の問題は耶穌の關せらるゝ所ではなかつた。然るに此の要求は彼が耶穌を誤解せるを示めすもので、耶穌の聖意は此の危機には唯だ峻烈な豫想に更らに餘裕なく、唯だ最後の傳道の收穫にのみ心急がるゝ此の際に、斯くの如き訴へは殘酷なほどに聞えた。『人よ、誰が我れを立て、汝等の裁判人又物を分つものとなしど』と半ば之を輕じ、半ば之を憐みつゝ答へ給ふた。

愚なる  
富豪の  
比喩

然る後卑下むやうに彼から眼を轉じ、群衆に向つて此れを基として一場の教訓を授けられた。先づ第一に事實を指摘して『戒心して貪心を慎めよ、夫れ人の生命は所蓄の饒かなるには因らざるなり』と誠め、亞ひで説明のため一つの比喩を教へられた。或る農夫があつて豊年に豊年を重ね、其の收穫豊饒にして難題にも何の恐れもない有様となつて、遂に其の倉庫も之を収むるに足らざるほ



どに富んだ。「我が作物を藏むる所なきを如何せん」と叫び、工夫して纏て決心した。「我れ斯く爲さん、我が倉を毀ち更に大なるを建て總て我が作物と貨を其所に藏むべし、斯く靈魂に向ひ、「靈魂よ、多年を過す程の許多の貨物を有ちたれば安心して食飲み樂めよ」と言はんとす」(路十六〇三、)と。

耶穌は此の農夫を以て惡人の或る真相を描かうとせらるゝのではない。彼は富有であつたが、別に悪い點は無かつた。否な彼が斯く夥しき土地を有するを見れば寧ろ信用すべき人物であつた。彼は其の傭人の給金を掠めたり、或は穀物を市場に出さずに、缺乏してから高價に賣るやうな不正の手段で財産を集めた形跡は少しもな(書五〇四利十九〇十、三申廿四〇十四、五)。彼の過誤は重大な事實を忘れて唯だ世俗的の事件にのみ心を奪はれた點のみである(箴十一〇)。即ち神、死、審判、永遠の問題を等閑に付しゐる事である。彼は自他共に明敏伶俐な人物と認められども、唯だ神の眼には愚物であつて、遂に彼は愚昧な取引を爲たことを發見する時が來るのである。彼は其の靈

魂に對して「靈魂よ多年を過すほどの許多の貨物を有ちたれば安心して食飲み樂めよ」と言つたけれども、神は彼に「無知なる者よ、今夜汝の靈魂取らるゝ事あるべし」と仰せられた。

此の場合の中心思想と其の諷刺とに注意せられよ。彼は朝は曉より夕は夜に入るまで勞作いて、安逸淫樂を貪らず、僅かな收穫をも積むで、寧日なく努力する勤勉な人物であつた。彼は漸時に盛大に赴いて、倉庫の小ささを感じずるに及んで始めて、自分の富の少なからざるを發見した。彼は始めて佇立して、自己の地位を顧みる事となつた。而して今は苦役を廢して、其の勞作して儲け得たものを以て聊か樂む時であると考え、又彼は之を實行するに足るものであつた。彼は其の靈魂に對して「靈魂よ、多年を過すほどの許多の貨物を有ちたれば安心して食飲み樂めよ」と言つた。此の語の意味に注目すべきである。彼は自らの「靈魂」に對して居るのであつて、其の語は如何言ふ意味であつたらうか。彼は「靈魂よ、汝は長き年月世俗の事に集注



せり、今や汝の永遠の平和に屬する所を考ふべき時至れり」と言つたか。彼は當初には將來必らず斯くの如き時あるべきを思ひ、賢く心を持してゐたのであつた。然るに年の経過する共に彼は此の避け難き變化を來たしたのであつた。世俗てふ癌腫は深く其の靈魂に蝕ひ入つて、彼の宗教的本來の智能は衰弱し盡くして、彼は今安逸と飲食と淫樂の外は其の靈魂のために適當なるものを考ふる能はざるに至つた。彼は成功の人、其の野心を遂げ得た人と思はれたけれども、忽ちにして猛烈な覺醒の時が來た。彼は此の長の年月を、其の歡樂の杯の口まで溢るほどに充たすに努めて、今や其の唇に之を觸れんとする刹那に、見えぬ手が彼の手から之を拂ひ落したのであつた。此の年月を彼れは靈魂の爲めに宮殿を建築するに努め、之を眺めて得々たる間に、永遠より來る強風一陣、紙製の家屋のやうに倒潰した。彼は其の靈魂に對して『靈魂よ多年を過すほどの許多の貨物を有ちたれば安心して食飲み樂しめよ』と言つた。然るに神は『無知なるものよ、今夜汝が靈魂取らるゝ事有るべし、

然らば汝の備し物は誰が有となるや」と仰せられた。然り何人の所有となるであらうか。彼の相續人は現に此の比喻の起つた遺産の爭奪同様に二人の兄弟の間に争闘を起すことであらう。遺産の爭奪と、靈魂の喪失！實に痛むべき末路である。『凡そ己の爲めに財を積へ、神に就いて富まざるものは此の如くなり』と耶穌は結ばれた。

十二使徒  
に對する  
教訓

此の比喻は群衆に對して授けられた所であつたが、亞いで其の望まるところが如く十二使徒のみ残つたときに周到な用意を以て之を布衍して彼等に教へられた(可五〇卅三、四參照)。「汝等生命の爲めに何を食ひ、身體の爲めに何を着せんと思ひ煩ふ勿れ」と宣ふた。此れは甚だ必要な教訓であつた。十二使徒は斯くの如き警告を受くべき身分であつた。彼等は耶穌の爲めに萬事を擲つた。彼等は枕する所を有し給はざる人物の戰友であつて、往々晨に眼を覺しても食すべきものを知らず、日暮れて其の宿るべき家を知らない有様であつた。往々にして彼等には『何を食ふべきか』『何を飲むべきか』『如何にして衣服を調ふべきか』の問題が起つた。



是れぞ彼等が其の主と共に暮した時の有様であつて、此の世を去られた後も正に斯くの通りであつた。『今の時に至るまで我等は飢え、又渴き、又裸、又撻たれ、斯くて定まれる住處なし』(哥前四)と聖パウロは言つてゐる。

生活の不安  
不合理

此不朽の教訓中に耶穌は世の生活に就いての不安に關して三個條を授けられた。第一は此れが不合理になる事である。『天空の鳥を見よ、稼ことなく、穡ことを爲す、倉に蓄ふることなし、然るに汝等の天の父は之を養ひ給へり、汝等之よりも大いに勝るゝものならずや、野の百合花は如何にして長つかを思へ、勞めず、紡がざるなり、我れ汝等に告げん、ソロモンの榮華の極みの時だにも、其の装ひ此の花の一つに及ざりき、神は今日野にありて明日爐に投げ入れらるゝ草をも斯く装はせ給へば、況して汝等をや、嗚呼信仰薄きものよ』と。耶穌は此所で其の弟子たちを神の攝理、世界に對する神の賢明にして全能なる統治の下に托せられた。神は萬有を造り、又之を治め給ふのである。萬有は巨細漏さず、創造

主の恩寵の下に護られ其の所を得て居る。斯くの如きは耶穌の好んで用ひらるゝ絶對の論法である。若し神にして鳥や花や、微細なもの、否な、一莖の草をだに護らるゝならば、神の子たる汝等に對して焉んぞ其の注意を怠らるゝ事があらうか(太七〇十〇十三太十二)と。此れ實に耶穌の唇より漏るゝ有力にして確信ある議論なりしも、尙ほ未だ十字架を前程に見て、神の愛の啓示と、神の聖前に人間の無窮の價値あることが發見せられない時であつたが爲めに、其の最高の條目を缺いてゐる譯である。然るに此の教訓は聖パウロの『己れの子を惜まらずして我等衆ての爲めに之を付せる者は豈か彼に併て萬事をも我等に賜はざらんや』(羅八〇)との不可抗にして争ふ餘地なき威力を以て充分現はさるゝに至つた。

無効

世の生活の問題に對する不安は無効なることが其の第二である。『汝等のうち誰か能く思ひ煩ひと其の生命を寸陰も延べ得んや』である。未來に就て煩悶するのは已むを得ざる事である。我等の蓄藏する所に損害を生ぜば必ら



ず困難は轉じて來るけれども、我等の方からは唯だ現在の義務を遂行し、未來は神の聖手に委ねべきである。未來に對して恐怖するのは唯だ現在を住煩らく爲るのみであつて、困苦を避ける所以ではない。人の豫想する困苦は、實現しない事が多いのである。翌日來るべしと豫期した困苦は、其の日に至つては全く異つたものを見るのである。『此の故に』と耶穌は仰せらるゝ、『明日の事を憂慮う勿れ、明日は明日の事を思ひ煩へ、一日の苦勞は一日にて足れり』と。

非宗教的<sup>(3)</sup>

最後に世の生活に對する不安は非宗教的である。『此れ皆異邦人の求むるものなり』。彼等は天の父を知らざるが故に食物や衣服に就て不安を有するは怪しむに足らぬ。然かも神の子の心事は異なるべき筈である。『汝等の天の父は凡て此等のもの、必需ぬことを知り給へり』。世の生活に就いての不安を有する事實其の行動は異教徒であつて、耶穌は何れかの神を拜すべきを決斷せよと弟子に要求せられた。『人は二人の主に事ふること能はず、蓋は此れを惡み、彼を愛しみ、是

れを親しみ、彼を疎むべければなり、汝等神とマンモン（金の神）とに兼ね事ふる事能はず、此の故に我れ汝等に告げん、憂慮ふ勿れ』と。全然天の父の慈愛と智慧を信じ、其の聖手に總て此の世の所有を委せて、神の國と其の義とを最高の問題と考ふるは、最高至嚴の方策である。『汝等先づ神の國と其の義とを求めよ、然らば此等のものは皆汝等に加へらるべし』。此れぞ安心の秘訣である。聖クリソストムは曰く『人をして活達の心を有せしむるもの、用意、不安の念より救はるゝに若くものなし、殊に神彼等と偕に在り、萬事彼等を助けらるゝに従ひて、如何なる障礙にも拘束せられざるに於て然りとす』と。

ガラリヤ人の虐殺

耶穌のガラリヤに低徊せらるゝ間に、驚くべき悲劇の報告が到達した。ガラリヤ人の一團がエルサレムに上つて、献物を携へて神殿に詣でた。彼等は勿論敬虔にして平和な團體であつたけれども、ガラリヤ人は元來大膽な人種で、常にロオマの暴政に反抗せんと試みてゐたので、此の北部からの旅客



は、時の分封主ポンテオ・ピラトの嫌疑を被るべき點が幾分あつたのであらう。彼は彼等が祭壇に於て供物を献げやうとしてゐる所に彼等を斬殺して、之れを犠牲と共に燔かしめた。此の悲劇は久しからざる前に起つた事件よりも實に残忍な行爲であつた。即ちシロアムの池の側の塔が倒れて、其の藥湯に由つて療治しやうと志した病人と思はるゝ十八名が、壓殺せられた事である。

ユダヤ人の審判に就きて

其の不運の團體の中或るものはピラトの毒刃を免れて北部に遁げて來た。彼等は生命からがら遁げ歸つて、之を耶穌に、報告した。彼等が戰慄したのは道理であつた。彼等の目撃した所を以て既に充分であるのに、尙ほ彼等はユダヤ人であるが故にユダヤ人の觀念からして一層周章狼狽爲す所を知らなかつた。ユダヤ人の根本思想は幸運は神の恩寵を受けてゐる證據であるが、之に反して非運に陥るは神の怒りに觸れた證據とせられた。テマン人エリバスは曰ふ「誰か罪なくして亡びしものあらん、義しきものの絶たれし事何所に在りや」(百七)

と。此の思想は舊約全書中隨所に見る所であつて、(詩卅七〇)ユダヤ教經典のうちにも殊に面白い形を以て現はれてゐる。其の經典の或る所には或る富有な學者の蓄へた四百樽の葡萄が腐敗したとき、其の友人たちが、恰かもヨブの友人の如く、此の不幸のうち神の攝理を認め、彼の行爲を調査して、此の審判の彼に與へられた理由を發見したと記してある。彼は尋ねた「然らば汝等は此の不幸の我が上に降れるがために、我れ何事か罪惡を犯せれるものと爲すか」と。我等は原因なく汝を罪したるものと神を攻撃するを得べきか」と彼等は答へた。彼は直ちに「好し、さらば我れに就きて罪ありと思ふものあらば知らしめよ」と應じた。「我等は或る人(本人を諷して)が其の園丁の所有たる葡萄畑の所産を奪へりと聞けり」と友人たちは迫つた。「園丁は少しも我れに齎らざりき。彼は我が所得を悉く盜めり」學者は叫んだ。彼等は此の辯解を許さず、「竊盜者の者を盜むものは竊盜者に外ならず」なる諺を引照して、彼が園丁より略奪したに相違ないと主張した。



耶穌に對する攝理の警戒

斯くの如きものが世界を支配せらるゝ攝理に就いてのユダヤ人の論理であつて、此のガラリヤ人の災害に對する残忍な着色であつた。

此の非運の災難は神の怒りの證據であると一般に確信した。彼等の同伴者は罪人であつた。故に神の聖手を以て彼等を撃たれたのであるとした。耶穌は此くの如き時代思想を抱かれなかつたのみならず、力を籠めて之を排斥せられた。勿論耶穌も災害は攝理に由つて行はるゝことを拒まれなかつた。然し此れは決して審判ではない。唯だ警告であつて、民衆は此れを見て自ら戒むべきものとせられた。『汝等此のガラリヤ人は是の如く害まされし故に凡てのガラリヤ人よりも益りて罪ある者と意ふや、我れ汝等に告げん、然らず汝等悔改めずば皆同じく亡ぼさるべし。シロアムの塔倒れて壓し殺されし十八人はエルサレムに住める凡ての人々よりも益りて罪あるものと意ふや、我れ汝等に告げん、然らず、汝等悔改めずば皆同じく亡ぼさるべし』と。

耶穌を拒むイスラエル亡ぶ

此の豫言は此の後四十年を経てエルサレムの滅亡を以て應ぜられた。エルサレムの塔がロオマの攻城車の爲めに覆へされたとき、市民

は其の最後の避難所たりし神殿の中に於て虐殺せられた。彼等にして悔改したならば、此の災害を避けることが、實際出来たであらうか。然し此れ正に文字のままに事實であつて、彼等は耶穌を信ぜず、悔改めよとの召命を輕んじたが爲めに亡びたものであつた。彼等は『國をイスラエルに還へす』べきメツシヤのみを情けなくも夢みて動かなかつた。彼等は何れの時代にも常に詐偽師を國民の救主として崇めたのであつた。國內は絶えず動搖し、謀叛の絶間が無かつたので、遂にロオマ帝國も勘忍するを得ず、恰かも煩さい蜂の巢を粉碎するやうに、此の爆發し易き國民を粉碎したのであつた。イスラエルを滅亡せしめたものは、其のメツシヤに對する誤れる理想である。彼等は『其の心柔和にして謙遜り』、『叫ぶことなく、聲を擧げることなくその聲を街頭に聞えしめず』來られたる眞のメツシヤを拒んだ。彼等にして若し



耶穌いえずを受けて其の恩寵溢るゝ教訓に従はゞ、彼等はロオマの復讐を受くべき筈がなかつた。彼等は何の困難もなく、一國民として今日まで存在し得たことであらう。

實を結け  
ざる無花  
果の比較

耶穌いえずは更らに此の緊急の惨事の嚴かな豫告を聽衆の心に深く徹底せしめんが爲めに比喻を語られた。或る所有主が其の葡萄畑に無花果樹を植

ゑたが、樹木が葡萄畑に長つことは農業の法に應はないことであるけれども、尙ほ此れを惜んで、望を掛くる所があつた。斯くの如き格好な土地に植へられたので、夥しき實を結ぶであらうと待望せらるゝのが當然であつたに拘はらず、無花果には實を結ばなかつた。斯くして所有主は續いて三年間空しく樹の實るのを待つた。無花果の樹の實を結ぶに至るには三年を要する。然し此れ等の年は過ぎても尙ほ果實が見えなかつたので樹は憤慨せらるゝ事となつた。所有主は遂に忍耐が盡きた。彼は園丁に向つて『我れ三年來りて此の無花果樹いちじくに果を求むれども得ず、之を斫り去れ何ぞ徒らに地を塞ぐや』と命じた。園丁は之を取り做して『主よ我れ其の周圍を堀

りて之に糞するまで今年も容るせ、若し果を結ばゞ善し、結ばずば後に之を斫るべし』と請ふた。

無花果樹は他の國民以上に眷顧を被つたイスラエル國民(賽五〇一―七詩八 十〇八―十六參照)である。

所有主は神であつて、園丁は神の怒を引き留むる神の慈愛である。三年とは贖主あがなひぬしの降臨に由つて其の頂點に達した恩寵の長の年月であつて、猶豫の年とは其の没落に及ぶまで経過する時期である。此れ實に嚴かな宣言である。イスラエルは審問の座にあつた。其の運命は既に天秤の上に乗せられてゐる。斧は振り揚げられ、神は其の最後の警告の結果を見給ふまで暫しく其の手を留めて居らるゝのである。其の處置は已むを得ない事となつて、一撃は遂に加へられ、エルサレムは粉碎せられて、イスラエルは地の表面に散亂せしめられた。

安息日に  
婦人を癒  
やさる

耶穌いえずがガリラヤに滞留せらるゝ間に、他の事件が起つた。其の場所は或る名も無い地方であつたらしく、其の傳道旅行の途上に於て説教を試



みられた或る村であつたと思はるゝ。安息日に會堂に出席せられたが、禮拜者の間にリウマチスであつたに相違なく、かゝる 僂<sup>か</sup> 僂<sup>る</sup>りて殆んど伸びない婦<sup>かんな</sup>が居た。彼女<sup>かれ</sup>は十八年間斯くの如き病に苦しんだのであつて、耶穌<sup>いすす</sup>は之を見て憐れに思召され、傍近く彼女<sup>かれ</sup>を呼んで、彼女<sup>かれ</sup>の上に其の手を按き給ふや、忽ちにして其の屈折した體は矯められたのであつた。此の辟村の會堂の宰はカペナウンやエルサレムの狡猾な牧會者と選<sup>こ</sup>を異<sup>こ</sup>にしてゐた。彼は心の鈍い、狹量な、徒らに傳統的思想に盲從する理屈家であつた。而して異端の罪と裏心より思考する所に困惑したのである。彼は耶穌<sup>いすす</sup>を攻撃するを避けて、民衆に向いて論じ立てた。曰く『事を爲すべきの日、六日あれば其の中<sup>い</sup>に來りて醫<sup>い</sup>やさるべし、安息日に爲<sup>せ</sup>ざれ』と。

會堂の  
宰の  
不平

主の  
辨妄

耶穌<sup>いすす</sup>は之を反駁せんと速刻應ぜられたけれども、彼の眞摯な妄信は差し赦して彼には迫まらず、彼の語<sup>ことば</sup>に對せられた。『汝等俳優よ、汝等各安息日には其の牛や驢を解き、厩より牽き出して水を飲まざるや。況して此の婦<sup>かんな</sup>は

アブラハムの裔なり、十八年サタンに縛られたる其の結びを安息日に解くべからざらんや』と。此れユダヤ人の妄想に對して剴切にして急所を衝く宣告であつた。彼は怠慢なるべき處には謹嚴であつて、謹嚴なるべき所には怠慢であつた。其の損失する虞れなき所には頗る正確な安息日嚴守者であつたが、一次び物質的利益の伴ふ場合は、律法を破却すべき口實を求めた。『汝安息日に何の動作<sup>はたらき</sup>をも爲すべからず』と律法は定められた。而して家畜に水と與ふるは勞作である。然るにラビは此の難題に活路を求め、奇怪至極な修正を加へて良心を蹂躪した。彼等は安息日にも水を飲ます爲めに獸を水の側に牽き出すのみならず、其の前へ水を曳いても差支へはないが、唯だ水を獸類の所へ運び、或は之を其の前に据ゆべからずと教へた。必ず家畜を水の側に伴つて、彼等自らの勞作<sup>はたらき</sup>で之を飲ませねばならないのであつた。斯く彼等の財産に關する場合は彼等は律法を度外に置いて省みず、憐れな困窮した同胞人類に對しては嚴格な文字通りの律法遵奉者を以て自ら任じたのであつた。



第參拾五章

ガリラヤ旅行

『あゝ、足に生血滴る牧羊者、

訴へつゝ、叫ぶ善き牧羊者よ、

山又山に汝何をか尋ね給ふ？

美はしき谷の牧場に美はしく、

餘れる羊の群は樂み啼きつゝ、

喜びて飲み食へり。

汝、其の九十九を有しつゝ、

尙ほ一匹を惜しみて尋ね給ふや』

クリスチナ・ツイ・ロセツチ

(約七〇二一十、路十三〇廿二一三十、太七〇十三、四、路十三〇卅一、三十四〇一十五〇、路十七〇五、六、太十八〇十二、三、路十六〇一十二、十四、五、十九一三十一)

主の兄弟の忠告

耶穌はガリラヤに訣別して、エルサレムに其の聖足みちを向け給ふべき時とはなつた。テスリ即ち十月の十五日に始るべきかりはすまひ構慮いはひの節は近い。

而してガリラヤの巡禮者の行列は今將に聖都に向つて出發せんとしてゐたのであつた。中に加はつて耶穌の兄弟も亦旅行の用意を整へたが、耶穌に來つて行を共にせられんことを勧めた。彼等は未信者であつた。否、彼等は耶穌の宣言を嘲けつてゐたけれども尙ほ耶穌の名聲を少なからず楽しんだのであつた。其の兄弟に預言者を有する事は彼等に取つて稀有の名譽であつた。彼等は粗大な頭腦を有した人物らしく又當時のメツシヤに關する理想を抱くを免れず、耶穌がイスラエルの王として君臨せらるゝ志の現はれざるに耐へずして、速かに其の目的を遂行せられんことを迫まつたのであつた。耶穌をして此の節いはひに上らしめ、禮拜者の群がる中央たんなかに宣言を授けて己れを信ずるものを集め、其の弟子を集めしめんと欲した。『汝の行ふ所の事を弟子たちに見せんが爲め、此を去りてユダヤに往け、蓋は己れを顯はさんとし



て隠かに事を爲すものあらず、汝此等の事を行はゞ己れを世に顯はせよ』と彼等は言つた。

其の  
答辯

此れ侮辱に當る語である。彼等は耶穌を以て彼等の如く名譽に戀々たるものとなし、又憶病のために差控へらるゝものと考へた。耶穌は憤怒と輕蔑の口調を以て之に應ぜられた。『我が時は未だ至らず、汝等の時は恒に備はれり、世は汝等を惡むこと能はず、我を惡む、そは彼等が行ふ所は惡しと我れ證すればなり、汝等此の節に上れ、我が時未だ至らざれば我れ今此の節に上らじ』と。事實耶穌は節に上らるゝ筈であつたけれども、構廬の節に上らず、六ヶ月後に逾越節に赴かるゝ筈であつた。此れを耶穌が達觀して、動かざる一點として指定せられた決勝線であつた。耶穌は此の最大祝節に上つて、眞の贖罪の小羊として、世の罪に對する犠牲として、自らを獻ぐることが天の父の聖旨であることを知つて居らるゝけれども、時未だ至らざるが故に、拔け駈けをして之を破られないのであつた。彼等

の時の常に備れる物質的な兄弟と異り、耶穌は不斷に神の聖旨を窺ひ、其の磨かるゝ所に従ひ、神の時を待たるゝのであつた。危懼の念なき彼等にはエルサレムに赴くは容易なことであつたけれども、有司の敵意を受けらるゝ耶穌には甚だ危険であつて、其の時の至るまでは、生命を徒らに失はれないのであつた。

其の  
出發

逾越節には尙ほ六ヶ月を餘して居るけれども、尙ほ耶穌はエルサレムに向はれざる得なかつた。往々、説教しつゝ徐々に南部に進み、最後の重大なる大團結の時季に聖都に達せらるゝ計畫であつた。其の兄弟が耶穌に別れて、旅行に出發した後に、耶穌も亦巡禮の團體に加はらず、唯だ十二使徒に護られて『昭然ならずして隠かに』出發せられた。カペナウンとサマリヤの國境の間には人口稠密な都市村落の群がるガリラヤ州の長い平地が横はつてゐる。耶穌は此の都邑を通過せらるゝ毎に住民に説教せられた。其の聖意は柔和に満ち充ちて、其の調子には燃ゆるが如き熱情が籠つたに相違はない。此れを彼等が其の聖唇より親しく



聞き得べき最後の説教であつて、其の光榮を以て來り、生けるものと死ねるものとを審問のために尊き純白の玉座に倚らるゝ彼の畏るべき日まで、再び聖容を仰ぐ能はざるべき訣別であつた。

神學的  
遁辭

ガリラヤを通過して其の旅行の途上、一事件が起つた。耶穌の説教の中心は救ひに關することであつて、聽衆に其の宣言を感銘せしめらるゝや去就を争ふ煩悶が彼等の間に起つた。其の聽衆の中に深い感動を受けつゝ、尙ほ決心を避けんと試みたるものがあつた。彼は如何なる手段を取つたであらうか。彼は恰かもサマリヤの婦の行爲に符合する態度に出でた。耶穌が彼女の良心に探り入らるゝや彼女は別問題を論じたのであつた。即ちユダヤ人とサマリヤ人との間の昔からの争論、神學上の問題を供提して、『主よ、我れ汝を預言者と知れり、我等の列祖は此の山にて拜しゝに汝等は拜すべき所はエルサレムなりと曰ふ』(約四〇十)と言つた。此の男も亦半ば此れに等しき工夫を試みた。『主よ、救はるゝもの少きか』

と。此れ其の當時の神學上に不定の問題であつた。或人はイスラエル人は何人も『來るべき世には所得』を與へらるべしと言ひ、或人は又之に反對して希望薄き議論を立てた。或るラビはエジプトより出でたる國民中唯だ二名のみが、約束の地を踏める如く、メツシヤの王國に於ても然りと論じた。此の質問は當然の結果を避けんがために試みたのであつて、彼は深く感激しつゝも尙ほ、其の重大な條件に戦慄し、遁辭を求めんと焦慮して、益もなき此の論題を供提したのであつた。

主の答

此れ明白に遁辭であつて、耶穌は直ちに此を排斥して、聽衆に對して當然の結果を示めされた。『問題は救はるゝもの多きか、少きかに非らず、汝は其の何れに屬するかにあり。窄き門に入る爲めに力を盡せ、窄き門より入れよ、沈淪に至る路は濶く、其の門は大いなり、此れより入るもの多し、命に至る路は窄く、其の門は小さし、其の路を得るもの少なり』此の答辯の意義は古へより道德家が好んで用ゐ、遂に一般の人々の知悉するに至り、殆んど

二の門  
二の道



諺となつた思想を其のまゝ此所に引用せられたものであつた。即ちヘシラダスの如き古代の詩人の言つた所であつた。ギリシヤの「天路歷程」とも稱すべきケベスの奇怪な話タブレット(書板)はクロノスの神殿に吊した書板かきいたの畫の説明であると思はれてゐるが、此れは人生生活の経過を象徴して記したものであつた。ケベスは此れを見たが、神殿を守まもつた老人が其の説明をしたと言つてゐる。曰く

「眞の教訓に接すべき道は何れぞ」と余は問ひぬ。

「汝上を見よ、遙かに人の住まざる、恰かも砂漠の如き地を見ん」

「然り、之を見る」

「小さき門あらん、門の此方に道あり、人の稀れにして、僅に二三人あるのみ。

此の道は嶮岨にして巖石多く登る能はざるに似たり」

「然り、誠に」と余は答ふ。

「彼所に聳ゆる山嶽あり、前後左右に千尋の嶮崖を控へたる急峻の阪路あるが如

し」

「我れ之を見る」

「然らば即ち其れぞ眞の教訓に至るの道なり」と老人は言へり」

とある。

此の諷刺の引用

二路ありとの諷刺は諺のやうに一般に知られてゐたので、耶穌イエスは救ひの大業に之を引用して、一般社會の生活の主義に倣ふ聽衆に警告せられたのであつた。人若し美德と智慧に到達せんと欲せば峻嚴にして勞力を要する道を選び、動かざる心を以て之に攀ぢねばならないと言ふ意味であつた。格言に曰く「高遠なるものは皆困難なり」と。救ひは何いづれにも勝さりて尊きが故に最も困難なるべき筈である。唯だ確固不拔の努力に由つてのみ到達せらるゝのであつて、何人も自己に對して假借すべからざるものである。此れを得るものゝ多少を怪み、或は其の高さに恐れて空しく立つは愚の至りである。「彼方に狭き門あり、彼方の道は嶮し、入り



て登れ」と耶穌は叫ばれた。

メツシヤの國の饗宴

耶穌はユダヤ人に教へて居られたので、更らに二條の道の想像からラビが好んで用ゐ、又後に耶穌の屢用ゐられた他の——メツシヤの國の大饗宴——教訓に不意に轉じて話を進められた（路十四〇十五—廿四、十六〇廿三、太十二〇—五〇廿）。斯くの如く話に一轉換を試みるのがユダヤ人の演説の風習である。「家の主人起きて門を閉し後に汝等外に立ち門を叩きて「主よ、主よ、我れに啓け」と曰はんに、主人答へて「我れ汝等は何處より來りしかを知らず」と曰はん、然る時に「我等は汝の前に食ひ飲みし、汝又我等の嚮に教へたりしと言出さんに、主人答へて「我れ汝等に告げん、何所より來しか知らず、皆惡を爲す者よ、我を去れ」と曰はん、汝等アブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者は神の國にありて、汝等は外に投げ出さるゝを見ん時に哀哭切齒する事あるべし。又人々西や東、北や南より來りて神の國に座するならん、夫れ後の者は先に、先の者は後に爲るべし」と。是れユ

ダヤ人の耳には峻烈な語であつた。耶穌は既に頑迷なイスラエル人の悲惨なるを宣告せられたが、此所に更らに廣大な准許の行はるべき事、即ちイスラエルの處罰せられた後、聖パウロさへ同意するに苦しんだ——異邦人の召命とイスラエルの喪失した特權の彼等に付與へらるべき事實を預言せられた。

警告

其の南方に旅せられて、太守ヘロデ・アンバスの所領たるテベリアの近傍に達せられた頃、パリサイ人の一團體が近いて來た。彼等は耶穌に對して警告を齎したのであつた。即ち太守が耶穌の人望を聞いて、擾亂の起るべきを憂ひ、尙ほバプテスマのヨハネの拘引を唆した有司等にも煽動されたに相違なく、民心を收攬せる中心人物を取去つて人民の熱狂を冷却せしめんと決心したと言ふのであつた。此等のパリサイ人は彼の殺氣を含む計畫を發見した。彼等は決して信者ではなかつた。然かも彼等は耶穌に對して友情を表し、太守の虐殺の犠牲として耶穌の没落せらるゝを悲しんだのであつた。彼等は耶穌に來つて、耶穌がガリラヤの國境を過ぎて暴漢



の領地の彼方に入られたるに追ひ及び、路を急がるゝやうに勸めて「へロデ汝を殺さんとする故に此所を離り往け」と叫んだ。

主の  
應答

耶穌は彼等の警告を意に介せられなかつた。而して此の詐術に富む暴漢に傳ふべき語を彼等に托して、「汝等往きて其の狐に告げよ、我れ今日明日惡鬼を逐去し病を醫し第三日に此事を了らん」と仰せられた。ヘブルの語で「今日明日」とは『今暫く』(撒前廿〇)の意味である。耶穌は尙ほ暫くガリラヤに傳道せらるゝ必要あり、脅迫を怖れず、其の素志を貫かるゝのであつた。「然れども」と耶穌は諷刺的に哀みの調子を以て「今日、明日又の次の日には我れ必らず行くべし。蓋は預言者はエルサレムの外に殺さるゝ事あらねばなり」と付言せられた。來訪者は其所を去らるやう耶穌に忠告し、耶穌は其の如く此所を去らるゝけれども、其れはへロデを恐れ給ふが爲めではなかつた。エルサレムに於て預言者は皆殺された。故に最大の預言者又預言者の君主の死なるゝも此所が至當であつた。

深切なる  
パリサイ人

斯くの如き友情あるパリサイ人の會見は一快事であつた。彼等は惡名至らざるなき團體に屬するものであつた。彼等の名目は畢竟偽善者の別名に過ぎず、彼等は我等の主を取つては殘虐にして無道の敵であつた。然かも尙ほパリサイ人のうちには善良な人物もあつた。彼等はイスラエルの宗教教師であつて、其の一部分は狹量にして偽善の徒輩であつたけれど尙ほ高雅な人物の除外例はあつた。其の傳道の間には耶穌に體同したパリサイ人と言つては誰だ一人も無いやうであるけれども、初代教會の中にはパリサイ派の代表的人物(徒十五)があつた。ニコデモやアリマタヤのヨセフは共にパリサイ人であつて、耶穌の弟子たるを告白するを恐れなければ、尙ほ心に於ては弟子であつて、斯くの如き人物が此の團體中に少くなかつたやうである(約七〇四、十八參照)。ユダヤ人なる福音記者、聖マタイ及聖マコは此の惡むべき團體に全く好意を有したものだと思はれないけれども、異邦人の温な眼を以て聖ルカは此所にさへ善良な靈魂を發見し(七〇、卅六、五十一、十一〇)、耶穌に善意を表したバ



リサイ人のあつた事を此の外にも記して事實の湮滅を防いでゐる。彼は耶穌がパリサイ人の家に招かれて食卓を共にせられたことを三次び記してゐる。且つ其の都度主人は傲慢な人物で、彼等は食卓に招待して之を尊ぶ積りの人の子に對して甚だ禮を缺いでゐたことを記してゐるけれども、尙ほ招待した事が既に善意の或る程度を示めずに足るのである。

安息日

の宴筵

パリサイ人よりの友情の一例がガリラヤの最後の旅行中に起つた。

即ち耶穌はパリサイの宰の家から、安息日の饗宴の席に招きを受けられたことである。安息日が社交上の重大な日であつたことは如何にも不思議であつて、前日に料理した食物の冷へたまゝを用ゐられたけれども、特別に珍味のものであつたと思ふのが至當であらう。聖アウガスチンは、彼の時代にも尙ほユダヤ人が不思議に安息日を歡樂の日としたと傳へてゐる。此の主人は耶穌の招伴として法教師とパリサイ人の團體を招いたが、彼等は好奇心に充ちて來會した。彼等は異常の

光景を目撃せんことを豫想して來たのが無駄ではなかつた。其の近隣に腹脹を患つた男があつたが、彼はマクダラのマリヤの如く(路七〇卅七)。パリサイ人の家に來つ

腹脹の男癒る

て、其の宴會の室に入り、耶穌の聖眼に留まつて、其の憫みを受くべきを願ひつゝ、其の前に佇んで、無言のまゝに訴へた。願は應つた。耶穌は

『安息日に醫すは宜きや否や』と法教師とパリサイの客の一團に問はれた。ラビの筵に由れば患者の生命が危険の場合にのみ安息日に療治することを許したのであつて、此の男の病は危急の治療を要しなかつたので、明日を待つて癒されんことを請ふべきであつた。而して彼等斯く答ふるのは自然であつた。然し彼等は既に耶穌が此の問題を解決せられたことを知るが故に黙して答へなかつた。耶穌は彼を招いて之を癒し、歸らしめて後、人道の本然の立脚地から例の如く其の行動を辯明せられた。『汝等のうち誰か驢馬或は牛などの阱おなに陥ちたらんに安息日には遽かに曳出さざるや』との論法は如何にも剴切にして痛快である。腹脹と井おなの底とは明白に同一であ



つて、諛にして若し獸類を救ひ出すことを許すべくば、況して人類を其の苦痛より救ひ出して何の不可があらうか。

主の卓上演説

此のパリサイ人等の耶穌に對する友情は、彼等がカペナウンに於ける同派の人々と異り、何の抗辯をも試みなかつたので好く現はれてゐる。

曩に同様の論法を以てパリサイ人に對せられたとき、彼等は『出て耶穌を殺さんと謀』(太十二)つた、宴會は酣となつた。耶穌は温情籠もりつゝも、深刻骨を刺す教

主座

を彼等に授けられた。主人の次座は宴會に於ては榮譽の席であつたが其の時殊遇を切望した何人かが其の席にゐた(太廿三)。(六参照)。其の光景を耶穌は面白く思召して謙遜を装ひ、自ら欺くを心に晒ひつゝ、格好な諧謔を以て之を諷せられた。

即ち古への賢人の皮肉な格言(箴廿五)を引用しつゝ、『汝若し名譽を求めば謙遜を装へ。宴筵に末座を選べ、汝の主人來りて『友よ首座に進め』と汝に言はゞ、同席のもの前に汝尊まるべし』と仰せられた。又主人に向つても忠言を授けられた「汝

何人を招くべきか

午餐或は晚餐を設くるとき朋友、兄弟、親戚、又富める隣の人を請く勿れ、恐らく彼等又汝を請きて其報答を爲さん、汝筵を爲さば貧乏、廢疾、跛者、

瞽者などを請け、然らば汝福なるべし。蓋彼等は汝に報ゆること能はず、義しき人々の甦らん其の時汝に報答あればなり』と。此れ徒らに流行の社交術に過ぎずして、彼等の間には友情もなく虚禮の贈答のみで、若し之を貧者に與ふれば、神の祝福を獲得するの幸あるべきを唯だ誇りと贅澤の浪費たるを戯れに諷刺して戒められたのであつた。

口頭の敬虔の嫌惡

斯くの如き深刻な卓上演説を以て宴席を賑はされた。其の諷刺は急所を衝いたので、席上の一人は之を避けんとして、『義しき人々の甦らんとし』なる一句を捕へ寸鐵を不意に挿む積りで『神の國に食するものは福なり』と叫んだ。此れ單に宗教的常套語に過ぎない。耶穌に取つて精神のない口頭のみ宗教談ほど不快とせられたものは無かつた。或る時使徒たちは自己の節義なきを覺つ



て『我等に信を増させよ』(廿三〇)と耶穌に願つた。然るに耶穌は東洋の格言を藉りて『若し汝等芥種一粒ほどの信あらば、此の桑樹に「抜けて海に植れ」と曰ふとも汝等に従ふべし』(可四〇卅一、二。路十三〇十九参照)と答へ給たのであつた。此れ嚴肅にして、又慨歎せらるゝ譴責である。彼等に缺くる所は信仰に非ずして敬虔の念であつた。彼等をして其の事業に忠ならしめよ、焉ぞ神が彼等を失敗しめらるゝであらうか。耶穌は斯くの如き語を忍ばるゝことを得ず、此のパリサイ人の卓上に於て峻酷な比喻を以て其の寸鐵的挿話に酬ゐられた。或る人が大晚餐會を催して、大團體を招待し萬事準備の整つた所で、東洋の風習に従ひ使を遣はした。然るに『彼等皆同じく辭した。一人は田を買入れたので、之を見に行かねばならないと言ひ、一人は牛五耦買入れたので、之を試むる爲めに行かねばならぬと言ひ、第三の人は妻を娶つた爲めに應ずるを得ずと辭した(申廿四〇。五参照)。第一と第二の人の謝辭は全く口實たるは明白である。彼等は單に招に應ずるを厭へるもので、何れも眼前に起つた事實を謝辭に利用した

ものであつた。彼等の語は頗る鄭重であるけれども、彼等の傲慢な態度を増すに過ぎない所業であつた。彼等の口頭のみのお慰に何の價值があらうか。別の機會に耶穌は『我が言ふ所を行はずして、何ぞ我れを主よ、主よと言ふや』(路六〇。四十六)と問責せられたのであつた。

家の主人は彼の好意の斥けられたのを聽いて大いに憤り、宴會は其のまゝ行ふけれども、客の種類を變へんことを決心した。使を市内の大路小路に遣はして貧者、廢疾、跛者、瞽者を伴ひ來らしめたが、尙ほ席の餘れる爲め彼は更らに『道路や藩籬の邊りに行き、強ひて人々を引來り我が家に盈たしめよ』と命じた。此所に滑稽の狀がないであらうか。主人は其の準備を浪費せざるが爲めに、種々雑多な群衆を其の宴席に招き寄せて惡戯に類する歡樂を擅まにし、彼を辱めた人々には『我れ汝等を要せず、我れ此の棄てられたる人々の汝等より價值あるを信ず』と言つた。此の比喻の後半の意味は唯だ明瞭である。此れ聽て來るべき審判の預告であつて、大



路小路の賤民とはイスラエルの排斥せられたもの、即ち税吏罪人の容易に耶穌に信賴せるもの、又道路や藩籬に彷徨せる市外のものとは——異邦人に非らずして何人であらうか。

弟子たる資格

耶穌は其の旅程に上られたが、途上多くの群衆が従つて來た。彼等は何と考へたのであらうか。耶穌が今エルサレムに赴かるは、イスラエルの王としての宣言を其所に發表せらるゝ爲めに相違なく、彼等は終始之に隨伴して其の勝利の餘威に與らんと計畫であつた。彼等にして若し、耶穌の實際の運命——玉座に非ずしてカルヴァリイ山上の十字架の待てるを知らば其の熱狂は褪せ、彼の喝采は其の響を收むる相違はない。不意に耶穌は身を廻して、熱狂する群衆を顧み、弟子たるの資格を彼等に告示せられた。「凡そ我れに來りて父、母、妻子、兄弟姉妹、又己れの生命をも憎むものに非ざれば我が弟子となることを得ず。又其の十字架を任はずして我れに従ふものは我が弟子と爲ることを得ず」と。主に對する忠

誠の念に牴觸するものは、人心に最も密接な關係をすら悉く無情に遺棄し、世の加ふるを得る極度の苦痛侮辱をも、主の爲めに敢て忍ぶ決心あるものに非ずんば弟子たるの資格はないのであつた。彼等は果して斯くの如き苛責に對する覺悟を有したであらうか。彼等果して其の價値を考へたであらうか。彼等が深入せざる前に彼等をして思ふ所に従はしめられねばならぬ(太廿一〇、廿三參照)。「汝等誰か城を築かんに先づ座して其の費え、此の事の竣までに足るや否やを計らざらんや、恐くは基を置ゑて之を成し能はずば見る者皆嘲笑ひて「此人は築き始めて成し遂げざりし」と曰はん、又王出で、他の王と戦はん先に先づ座して此の一萬人をもて彼の二萬人に敵すべきや否やを謀らざらんや、若し及かざれば敵尙ほ遠たれる時に使を遣して和睦を求むべし、然れば此の如く汝等其の所有を盡く捨てざるものは我が弟子と爲ることを得ず」(太廿三參照)と。斯くの如きもの即ち弟子の資格である。即ち耶穌は若し汝等我れに従はんと思はゞ、先づ其の費用を計算せよ、無謀の熱情に驅られ、汝が持續する勇氣を有



せずして、此の計畫に與かる勿れ』と仰せらるゝのであつた。

稅吏及  
罪人  
の會食

此の峻烈な宣言は群衆の熱情を冷やしたものと思はるゝ。彼等は皆退去して了つた。然かも耶穌は孤獨ではなかつた。群衆と立混ることを憚つた近邊の稅吏や罪ある人々が此の機會を窺つて近いて來たからであつた。彼等の一人は特に耶穌に對して敬意を表したものだと思はるゝ。而して耶穌は其の招待に喜んで應じ、世に棄てられた一團と共に食卓に着かれた。恰かもカペナウンに於けるラビの家の光景と相似たものであつたので、此の時も亦前と同様パリサイ人が其の耻辱とすべき行動に對して『此の人は罪ある人に接じりて共に食せり』(太九〇九一十三、路七〇廿七)と叫んだ。

主の  
答辯

彼等の誹謗に應じて耶穌は三つの譬——迷へる羊、失はれた貨幣、失はれた子——を以て罪人に對する態度に双びなき辯明を確立する教訓を授けられた。尙ほ進んで、縦しパリサイ人には彈劾を受けられても、其の態度の天

に於ては嘉納せらるべき雄大な宣言を下された。宛然人間が失つたものを悲しみ、再び之を發見すれば歡喜措く能はざる如く、罪に由りて失はれたものを神は悲まれ、之が復歸するとき、歡喜せらるゝを示めされたのであつた。

迷へ  
る羊

『汝等のうち誰か一百の羊あらんに、若し其の一つを失はば九十九を野に置き、往きて其の失ひし羊を獲るまでは尋ねざらんや、尋ね得ば喜びて之を己が肩に負け、家に歸りて其の友と其の邊りの人々を召び集めて曰はん、我れと共に喜べ、我れ失へる羊を獲たればなり』我れ汝等に告げん、此の如く一人の罪ある人悔い改めならば、悔改むるに及ばざる九十九の義人よりは、尙ほ天に於て喜ばらん。斯くの如く憐れな失はれた羊の苦悶は、羊の價値如何に拘はらず、牧羊者をして寂寥の感措く能はざらしむるのである。而して耶穌は之を取つて罪人の慘憺たる状態は神の聖意に痛烈な苦悶を與ふるを示めされたのであつた。



失ひし  
クドラ  
マ

『また婦のうち誰かドラクマ(金銭)十枚を持ち、其の一枚を失はんに燈火を燃して家を掃除し、之を獲るまでは切ろに尋ねざらんや、尋ね得ば其の友と其の邊りの人々を呼び集めて曰はん、「我れと共に喜べ、我が失なへるドラクマを獲たればなり」。我れ汝等に告げん、此の如く一人の罪ある人悔い改めなば神の使の前に喜びあるべし』。此の賤しい婦が、其の乏しい蓄への中から失つてはドラクマに苦悶遣る方なき思ひをけ掛るのであつた。斯く耶穌は神の眼には一人の罪人も無限の値價あり、其の踪失は神の損亡なりと宣ふのであつた。

失ひ

第三の比喻は更らに驚嘆すべき宣言である。罪人は常に所有品の缺失

し子

の如きに非らず、實に神の子の迷へるものであつて、慈父の心情は其の發見に熱注せらるゝと宣ふのであつた。其の教へに由れば、或る人が二の息子を有してゐた。一般に父は其の生存中に遺産を分配するの風習があつた。然るに弟息子は律法に準じて長子の半額の遺産を相続せんことを迫まつた。斯くて目的を遂げて遠國に

起き放蕩の爲めに之を消費して了つた。彼は傭人に成下がつたが、其の苦勞に加へて、其の地方に激烈な饑饉が襲つて來たので餓死を免れんが爲め、ユダヤ人の眼には最下等の職業たる豚牧にまで墮ちた。彼は憫れにも豚の食する豆莢を以て其の腹を満たすほどとなつた。斯くて此の零落の間に、傭人すら尙ほ腹を満して餘りあるパンの豊かな父の家を思ひ浮べた。彼は自ら『我が父に往きて曰はん、「父よ我れ天と汝の前に罪を犯したれば汝の子と稱るに足らざるものなり、汝の傭人の一人の如く我れを爲し給へ』』と考へた。此れ實に放蕩息子が卑下の情を示めず、最も遜つた語であつた。彼にして若し其の生活豊かならんか、此の悔恨の念を催すことは斷じて無かつたであらう。彼が其の本然の狀を悟つたのは、罪を考へたからではない、唯だ窮乏に陥つたからであつた。彼は決して『我れ耻しき行ひを爲せり、我れ父の心を痛めたり、我れは極惡無道の人非人なり』とは考へなかつた。彼の渴望する所は父の家に豊かなパンであつた。『我が父の所には食物餘れる傭人の幾何か有るに我れは



飢て死んとす。起ちて我が父に往かん』と考へたのであつて、彼の罪が利己心にあつた如く、彼の悔恨も亦利己心からであつた。事實彼は其の父に抱擁せられて其の頑迷な心が碎かるゝまでは決して悔改してゐるのではなかつた。此れ耶穌が罪人の神に歸るには其の事情の如何を問ふべきに非ざるを教へられたものではあるまいか。彼が窮乏を感じて、天にだに其の眼を擧ぐれば足るのである。罪人にして一次び天父の家に歸り、天父の慈愛を發見せば、罪の眞義を悟り、神聖な悲愁を催して其の罪を悲しむに至るべきである。

家にて

の歡迎

彼の動機は下劣であつたけれども尙ほ此の放蕩息子は起つて、家路に向つた。彼の父は四六時中、心撈らるゝばかりに憂悶しつゝ、絶えず放浪者の歸りを待つた。然るに一日喜ばしくも彼は遙かに其の子の影を認めた。父は駆け寄つて、其の腕は襁褓に包まれ、垢に穢れた其の子を抱き取つた。放蕩息子は『父よ、我れ天と汝の前に罪を犯したれば、汝の子と稱ふるに足らざるなり……』と言

つて語は絶えた。應て又其の傭人の列に加へられんことを願ふも聽かず、父は頻りに奴隸に命じ『至も美き服を携ち來りて之に衣せ、其の指に環を箝め、其の足に履を穿かせよ、又肥えたる積を牽き來りて宰れ、我等食して樂まん、是れ我が子死て復る生き、失ひて復た得たればなり』と叫んだのであつた。

長子

此の物語中の悪人は放蕩息子に非ずして、實は其の長子であつた。家出の息子が歸つて來たとき彼は野良に出てゐたが、家近くに來て、歡樂の騒ぎを聞いて何事なるかを僕に質した。彼は其の事情を知るや大に憤つて、其の父が出て來て懇請するのを振り切つて家に入らなかつた。『我れ多年汝に仕へて未だ汝の命に背かず、然れども我が友と樂しむ爲めに羔をも與へし事なし、然るに遊妓の爲めに汝の業を耗やしたる此の汝が子歸れば之が爲めに積を宰れり』と此の吝嗇漢は叫んだ。彼は兄弟を認めない、放蕩息子を『汝の子』と稱するのであつた。同時に彼は自ら又父の子たるを認めない奴隸根性を有し、其の父を苛酷な監督者と心得てゐた。勿



論此れは宗教を以て『奴隷の轡』(加五)と爲すパリサイ人を代表するものであつて、みづどり税吏、罪ある人々を弾劾するに汲々として、天父の慈愛より排斥せられたものと彼等を見做してゐるのである。然かもパリサイ人すら尙ほ神のみことろ聖意には怒に非らずして憫みを以て見らるゝものと耶穌は認められた。彼等は孝心を失つてゐるけれども尙ほ皆神の子であつて、其の排斥する者共を侮蔑するけれども尙ほ彼等の兄弟たるを免れない。『子よ汝は常に我と共に在り、又我が所有は皆汝の屬なり、汝の弟死て復た生き、失ひて復た得たるが故に我等喜びて樂しむは當然の事なり』と父は慰めた。耶穌の聖意は獨、罪人に對するのみならず、パリサイ人に對しても亦寛大であつて、其の兩者に對し、溫情溢るゝ憫憐の眼を以て見られ、兩者を父の家に伴ふに努められたのであつた。

財産  
の  
用法

次に耶穌は譬を以て財産の用法を説いて罪人の友たる道を授けられた。此れは其の弟子——元來貧しくして財産の用法を教ふる必要な十

二使徒に對してとはない、其の教を受けて、主と之を仰ぐに至つた人々、特に其の好意を嘉して、パリサイ人の憤慨をすらを招かれたつぎどり税吏に對して授けられたものであつた。彼等は富有であつたので、此の問題を彼等に授けらるゝのは最も剴切であつた。

残酷な  
差配人

耶穌の譬に曰く、或る富豪があつた。其の所領を思ふがまゝに差配人に治めさすのが東洋の風習である。ポテバルとヨセフの物語に溯れば『彼ヨセフを其の家を幸さどらしめ、其の所有を盡く其の手に委ねたり、彼其の有てる物を悉くヨセフの手に委ね、其の食ふパンの外は何をも顧みざりき』(創卅九)とある。此の物語中の差配人は主人の信用に背いた。主人は其の犯罪を知つて、監督を始めた。『汝に就きて我が聞きたる事は何ぞや、最早汝を操會者と爲し得ざれば其の扱ひたる事柄を我に陳べよ』と言ひ渡した。此の不運の男は、斯くして世間に投げ出されて、何を爲やうかと熟考した。『我れ鋤を執るには力なく、施しを乞ふは耻かし』



(路十二<sup>十</sup>七、八參照)と。然るに愉快な工夫が不圖浮んだ。「我れ名案を得たり」と彼は叫んだ。所有主が其の田畑の作物を徴収するのは東洋の風習であつて、差配人は其の所有主に納むる額に超えても自ら相當と認むる所を思ふが如く小作人に拂はしめるのである。此れ其の差配が義しい人に非らざる限り壓制の起るのは當然な宜しくない組織である。而して此の差配人は無慈悲な男であつた。今機會は到達した。小作人等は多く皆負債に追はれてゐるので、彼は彼等を召集した。「汝我が主人に負債何程ありや」と彼は宛然所有主に納むる如き風を装つて第一の男に尋ねた。「油百斗なり」と答へたので、彼は決算表に五十斗と書かしめた。「次に汝は——汝の負債幾何あるや」と第二の男に問ふた。「小麥百斛なり」との答へに、彼は八十斛と書かしめた。

此れ實に敏捷な所置である。小作人は彼が其の主人を説いて、斯く納品を減額せしむるに力を盡したと思ふことであらう。彼は小作人等が此の恩恵に對して必らず酬ゆべく、事務所から放逐せられたと聞かば、彼等は定めて彼を養はんが爲めに家に迎へて助ける事であらうと豫期したのであつた。彼は狡猾な無頼漢であつた。相手の人物を見て、此れには五割、彼には二割を減じて、之を彼等に與へた。此の處分法は主人の知る所となつたが、却つて彼は之を大いに興味を感じた。即ち彼には之を面白がる餘裕があつた。此の手加減は彼に取つては痛痒を感ぜざる所であつて、其の減額は彼の徴収する分には關係なく、差配人が付掛けの分であつたからであつた。彼は此の惡黨の伶俐なことを笑ひつゝ賞讃した。

其の適用

「汝等此の狡猾なる惡人の教を學べ。汝の金を用ゆるに巧みなれ。愛情を以て之を費やせ。汝此の世を去りて天の門に至らんとき、汝等が此所に於て救へる者に祝せられん。不義の財を以て己が友を得よ、此は乏しからんとき、彼等汝等を永遠の宅すまひに接へんが爲めなり」(詩十五〇一、哥後五〇一參照)と耶穌は之を説明せられた。

不義の財

「不義の財」なる語は如何なる意味であらう。若し「不義を以て得たる財」の意味ならば税吏みつぎとりの惡辣な手段で得た財産に對して際どい語ことばを用



わられしと見るべきあるけれども、其所には聽衆中税吏のみならず、他のものも居た。加之惡辣な手段で得たものを、慈善に費した所で、其れは唯だ贖償であつて賞すべき徳行とは言はれないのである。我等の主が「不義の財」と「眞の財」(十五〇)とを直ちに對照せられたので此の語の意義が明かにせらるゝのである。此れへブル語の相對辭である。詩篇の作者が「義しき路」(詩廿三)と言つた場合は、「何れにも赴く方なき迷路」と對照すべき、希望する決勝點に赴く路の意味であつた。斯くの如く耶穌が「不義の財」と仰せられたのは迷ひと失望とを醸す此世の富の意味であつた。此れに由つて「貨財の惑ひ」(太十三)と言ふ耶穌の聖語、又聖パウロの「定めなき財」(提前四〇)なる語を思ひ起すのである。此れ此の世の敗れ易き財を以て天の朽ちざる財(路十六〇九、十七、六)を教へらるゝ用意周到な論理である。

「銀行家  
たれ」

福音記者は曾つて傳へなかつたけれども師父たちは耶穌の「汝等銀行家たれ」との聖語を好んで引照してゐる。此れが此所に比喻を結ばれた

格言に直接の説明となり、又此れから説明を藉ることの出来る適當な例ではあるまいか。「汝等銀行家たれ。小事に忠しき者は大事にも忠しく、小事に忠しからざるものは大事にも忠しからず、故に若し汝等不義の財に忠からずば誰か眞の財を汝等に託けんや」と此れ實に神が人間に對せらるゝ方法である。ラビの物語に誠に美はしい一例がある。モオゼがミデアンの野でエテロの羊を牧つてゐるときに、一匹の山羊が迷ひ出た。探してゐるうちに泉で水を飲んでゐるのを發見したが、彼は「汝は疲れたり」と言ひつゝ其の肩に負ふて之を伴ひ歸つた。然るに神は彼に對して「汝は他人の畜類を憐みたるに由り、汝を我が群れイスラエルの牧羊者たらしむべし」と宣ふたとある。

「ラザロ  
の富豪  
の譬」

更らに耶穌は此の譬を其弟子に授けられた。パリサイ人も亦耳を傾けて居つたが、蓋し彼等に取つては頗る耳の痛い教訓であつた。金錢に對して愛着の念の強いのが彼等の間の通情であつて、彼等は富貴は神の特別の恩恵であ



ると考へた。主の教訓は直接に彼等に觸れたので彼等は晒笑つたが、主は更らに彼等の反した唇を指しつゝ、「汝等人々の前に自己を義とするものなり、然れど神は汝等の心を知れり、夫れ人の崇ぶ所のものは神の前に悪まるゝものなり」と仰せられ、更らに譬を以て「爰に富め人あり」と新たな教訓に移られた。而して兩三語のうち活ける如き光景を描き出された。聖クリソストム（コリヤ）の語を用ゆると「此の富豪の生活は贅澤のバプテスマを受けたもので」あつて、紫の外衣と麻布（リシナル）下衣を着て、珍味佳肴を載せた燦然たる食卓に倚つてゐた。然るに一方にラザロと呼ぶ一人の貧者がゐた。ラザロはエリザル即ち「神救ひ給へり」の略であつて。耶穌は此の男の性質を示めず爲めに此の名を用ひられた。此の義しきラザロは嘗に貧しいのみならず病に罹つて居た。且つ彼は臭氣紛々たる腐敗物の塊のやうで、贅澤の食卓の殘物に憬かれ、此の富豪の門に横臥してゐた。何人も心を掛けて勞はるものはなかつたけれども尙ほ彼は孤獨の身ではなかつた。神は彼の救主で、眼に見えない天使は彼の

周圍に廻り護つてゐた。殘屑を獵る犬は柔かな温かな舌を以て其の腫物の膿を舐つたが、此れぞ彼等の獻げ得る唯一の包帯であつた。然るに此の貧しい男は死ぬ事となつて、天使に由りてアブラハムの懷ろに運ばれたが、富める人も亦死んで葬られた。「此の紫の外衣を着たる富豪の爲めに行はれた葬儀は幾多の會葬者に圍まれつゝ、人の眼には莊麗なるものなりき。然れどもこの腫物に蔽はれた乞食の葬儀は天使隨伴して之れを大理石の墓地に非ずしてアブラハムの懷ろに運び、神の眼には一層莊大なるものなりき」と聖アウガスチンは曰つてゐる。

彼等の此の世の生涯を比較し、其の幔幕を掲げて耶穌（イエス）は來世に於ける彼等の状態を示めさるのであつた。ユダヤ人もギリシヤ人も等しく眼に見えざる世界なる觀念を有してゐた。ユダヤ人は之をシオルと稱し、ギリシヤ人は之れをヘエデスと言ひ、共に善惡兩者の靈魂が此の世の如くに生存して其の行爲に對する應報を受くべき地と考へたのであつた。自ら之に興り得る希望なき義しきものの幸福を絶えず目



撃せねばならない事は、不義なるものに一層の悲惨を加ふる所以であると彼等は考へた(○十<sup>四</sup>)。斯くの如きものが我等の主の在世當時、死者の状態に就いて勢力ある思想であつた。然るに主は此れを事實としてにあらず、唯だ其の教訓の主點に力を籠めんが爲めに用ゐられたのであつた。主が其の幔幕を掲げて此の兩者の境遇を示さるゝとき、眼に映る所は驚くべき逆轉の光景であつた。富める人は死んで葬られた。而してヘエデスに於て苦痛の中に其の眼を擧げた。遙か彼方にラザロがあつた。然し早や既に飢えに迫つた見窄らしい乞食ではなかつた。天國の饗宴の賓客として其の上座を占め、アブラハムの胸に寄り掛つてゐた。宛然樓上の客室に於て其の愛せらるゝ弟子が耶穌の胸に倚つた(○廿三)のと一般である。『父アブラハムよ、我れを憐み、ラザロを遣して其の指の尖を水に蘸し、我が舌を冷やさしめ給へ、我れ此の火燄の中に苦しめばなり』と彼は叫んだ。アブラハムは之に答へて『子よ、汝は生きたりし時に汝の福を受け、又ラザロは其の苦しきを受けしを憶へ、今彼は慰められ、汝は苦し

めらるるなり、斯れのみならず、此所より汝等に涉らんとするも得ず、其所より我等間んに涉するも亦得ざる爲めに我等と汝等との間に限<sup>さ</sup>め置かれたる巨<sup>おほ</sup>なる淵あり』と言つた。ラビの教に由れば幸福と苦悶との間は甚だ近しとせられ、或は其の隔は唯だ一指尺に足らないと言ひ、又或は壁一重に隔てらるゝのみあると言つた。然し耶穌は其の間に大いなる淵があつて其の宣言は變改し難く、間隔は永遠であると宣ふのである。

尙ほ耶穌は其の苦悶の正當なるを辯明せられた。富める人はラザロを遣はすを許されざるを以て、更らに『然らば父よ、願くば我が父の家にラザロを遣り給へ——蓋は我れに五人の兄弟あり——亦彼等が此の苦しみの所に來らざる爲めにラザロ證據とせしめよ』と請ふたが、アブラハムは又之に『彼等にはモオゼと預言者あれば之に聽くべし』と答へた。絶望者は重ねて『然らず父アブラハムよ、若し死より彼等に往くものあらば悔改むべし』と請ふたけれども、『若しモオゼと預言者に聽かずば



縦たごひ死より甦いえずへるものなりとも其の勧めを受けざるべし』り拒まれたのであつた。耶穌いえずの此所に示めざるゝ所は人が滅亡する機會のない事を言明せらるるのである。古への神の約束の下にも生命の道は之を行ふものには明かであつた。『安息日毎に會堂』で讀まるる聖書の中に、神は極力其の權威を示めし、恩寵溢るる懇請を試みて居らるるのであつて、之にも尙ほ悔悟せざるものあらば、是れ其の智識に缺く所あるが爲に非ずして、其の心の頑迷なるが爲めである。縦よし死より甦いえずるものありとも、彼等は到底之に聽従すべくもないのである。主に反對するものは果してヤイロの娘やナインの婦の息の子甦いえずりに由つて之れに聽従したのであらうか。彼等は耶穌いえずがラザロを甦いえずされたのを見て之に聽従したであらうか。否な、主自ら聖書に従つて第三日みづかめに死より復活せられたとき之に聽従したのであらうか。

二様の適用  
（一）弟子に對して

此の譬は二様の聽衆に、各別々の目的を以て授けられたのである。一方に弟子のためである。此の譬は『不義の財を以て己が友を獲よ』

此は乏しからんとき彼等汝等を永遠の宅すまいに接むかへんが爲めなり』との狡猾な差配人の譬のうち否まる思想を、更らに力説せられたものである。若し此の富豪にして其の門に在る乞食と交り結んだならば、彼の感謝を得べきである！見えざる世界に移れる日ラザロは天の饗宴に彼を迎へんとして必らず出でて來たことであらう。一方は又パリサイ人に對してとあつて、彼等の嘲笑つた『人の間に尊たまるるものは神の前に惡いえずまるるものなり』と耶穌いえずの答へられた格言の説明であつた。彼等の神聖な天職を侮蔑せるパリサイ人は世俗的となつた。彼等の饗宴を開くや、其の門前に貧民の餓死するを顧みず、友人、兄弟、親戚又は富有な隣人を招いた（路十四〇）。彼等は此の恐ろしい畫面のうちに自己の肖像と、彼等を待てる苦悶の預言とを認識すべきである。

此の富豪は實際不正を所作はたらいてゐない事を注意すべきである。彼は食卓の殘屑をラザロに與ふるを拒まず、又其の門から逐ひ拂つた譯でもなく、其の富も亦惡辣な



手段で得た形跡は少しもない。然らば彼の罪は何所にあつたのであらう。彼れが唯だ富有であつた爲めであらうか。否主の眼中富を罪となし、窮乏を功ありとせらるるやうな事はなかつた。ラザロの貧乏なのがアブラハムの懷に抱かれた原因ではない。彼は其の救主として神を有してゐたからである。富豪の罪は富有であつたからではない。彼は其の周囲の人々の悲慘を關せずとなし、安逸、利己、贅澤の生活を送つた點である。彼は其の富を神の光榮の爲め、又其の同胞の公益の爲めに用ゐなかつた。彼は自ら銀行家たらず、不義の財の伶俐な差配人とならなかつた爲である。

### 第二十六章 サマリヤ經由

『天の君王は世を救はんが爲め力を盡されたるを

何故に侮辱せられ、何故に棄られ給へる。

餓を忍び渴きに耐へ

貧苦に憐み、十字架をすら

喜びて貰ひ給へるを。

聖ボナヴェンチヌラア

(路十七〇十一―廿一、十八〇一―十四、九〇五十一―六、十〇十七―二十、廿五―廿七)

十人の  
癩病人

遂に耶穌は侮辱せられ、敵意を挿める地方たるサマリヤの境に達せられた。既に七十人が二人宛一團となつて、耶穌のために道を備へて先發したので、其の來訪は一般に好く知られてゐた。故に或る村に達せらるるや十人の癩病者が之を待つてゐるのを發見せられた。彼等は耶穌が此の地を通過せらるるの



を知つて、耶穌は必らず自分等のため、病を癒やし給ふであらうとの望みで此所に停んだのであつた。「師耶穌よ」と耶穌の來らるゝを見るや、穢を恐れて立ちつゝ遠方から叫び、「我儕を矜恤み給へ」と祈つた。此れ實に憐むべき光景であつた。普通の事情の下には「ユダヤ人とサマリヤ人は交通を爲なかつた」。然し彼等の間の少くも一人はサマリヤ人であつた。苦惱のうち此の一團はユダヤ人とサマリヤ人とが同病相憐れんで兄弟となつたものであつた。耶穌は彼等の願ひを容れ、往きて彼等の尊敬せる祭司に己を示めさんことを命じ給ふた。彼等は直ちに之に服したほど耶穌に信賴してゐたが、往く速上に其の病は癒やされたのであつた。彼等のうち一人を除いて他は銘々の所に歸つたが、其の一人は幸福にも肉體の變化したのを感じて急ぎ歸り來り、同時に大聲に神を讚美しつゝ、耶穌の許に達して其の前に平伏し、心に溢るゝ感謝を献げた。唯だ一人のみが感謝の爲めに歸つて來たが、然かも其れはサマリヤ人であつた。「潔められしものは十人に非ずや、其の九人は何處に在るか

此の異邦人の外に神に榮を歸せんとして返りたるもの非らざるか」と耶穌は歎ぜられた。

此の事件は、ユダヤ人の感恩の念なき性狀を現はす適例であつて、耶穌に深き苦痛を與へた。侮蔑せられたサマリヤ人が却つて、耶穌の恩寵を受くるに適はしい新たな證據が供せられ、然かも斯くの如き危機に際してゐられた場合なるが爲め、一層に之が耶穌を動かしたのである。今將に其所を通過して往く／＼説教せられるべきサマリヤに入られた所で、此の憐れな外國人の態度は、傳道の當初のスカルの町の光景を思ひ起すべき、成效の美はしき前兆とも思はれたのである。

パリサイ人の嘲笑

此所にパリサイ人のゐたのを見ると、此の國境の町はユダヤ人の例であつたことは明かである。此の感恩の念厚きサマリヤ人に對する耶穌の讚辭に憤慨したのか、彼等は來つて「神の國は何れの時來るか」と問ふた。是れ嘲りを帯びた質問である。彼等はメツシヤの威風堂々勝利の態度で現はれ給ふべきを信



じた。然るに耶穌の此の村に來らるゝや殆んど賤民と言ふべき漂浪者で、下層民の弟子を僅に從へらるゝのみなるを以て、彼等は其のメツシヤとして宣言を嘲り、何時神の國を建設せらるゝ目的なるかを齷弄して尋ねたのである。耶穌は簡潔にして鋭い一語を以て「神の國は顯はれて來るものに非ず」と答へ給ふた。顯はれ來るとは天文學者或は天候豫言者の用ゆる専門語で、耶穌は有司たちが繰返して「天よりの休徴」(路十二五十四、太十六〇二一三)を要求するよりは、ガリラヤ人が空の變化を觀取する熟練の遙かに勝されるを示めざるゝ意義を以て、恐らく之を用ゐられたのであらう。「神の國は顯れ來るものに非ず」此所に視よ彼所に視よ」と人の言ふべきものに非ず、夫れ神の國は汝等の衷にあり」と仰せられた。彼等は何時神の國は來るかを尋ねつゝ、既に來れるを、何人も悟らないのであつた。彼等はバプテスマのヨハネが「然れど汝等の知らざる所のもの一人汝等の中に立てり」(約一〇二六)と言つたサンヒデリウムからの使者と一般の事情の下にあるものである。

不義なる  
裁判人  
と  
寡婦の譬

パリサイ人には剴切な答辯を酬ゐられたのであるけれども、尙ほ弟子たちは彼等の嘲笑に其の心甚だしく亂れた。蓋し彼等の思想に相照應したからである。彼等はメツシヤの王國に對して此の一般社會の意見に同意を表し、彼等の主の卑賤な状態が彼等の信仰に取つては悲しむべき蹟きとなつたのであつた。耶穌は其の心を讀んで彼等の蓄ふる所を悟られた。彼等は十字架に掛らるゝ主を見て神が遂に彼等に反する宣告を與へ、彼等の前途を護る事を拒まれたものと考へたことであらう。故に耶穌は神が一見遺棄せらるゝと思はるゝ其の實際の事情を示めし、確固不拔、搖かざる信仰を彼等に鼓吹せんが爲めに譬を説かれた。即ち或る町に裁判官があつたが、罪に定められた寡婦が其の冤を訴へて來た。此れ當然裁判官の同情を引いて、直ちに之が救済に努力せしめざる可らざる事件であつたけれども、其の裁判官は不義な人物であつた。到底此の貧しい寡婦から賂賄を得る見込がなかつたので、其の歎願を拒絶した。然るに寡婦は其の拒絶に譬易せず、不斷



に來つて懇願するので、遂に逐拂ふことを得ないばかりで、彼は其の切願に耳を傾けることゝなつた。耶穌は滑稽な彼の獨言を「我れ神を畏れず人をも敬はざれど、此の憐れを煩せば、彼女が絶えず來らず、又惡意を以て我れを見ざらしめんがため、其の惱みより之を救はん」と現はされた。

「神は斯くの如きに非らず、神は罪人の悔改せんことを久しく待ち給ふが故に、晝夜祈る所の選びたるものを遂に赦はざらんや」と耶穌は問はれた。耶穌に非ずして何人か不義無情の人物と神とを比較して斯くの如き教を施し得るものがあらうか。天の父に關する其の教理に恩寵卓越するものなくば、誤解を受くる危険を聊かも感ぜず、斯かる教訓を與へらるゝを得たであらうか。事實此の論法に無限の力を與ふるものは裁判人の奸惡性である。此れ實に彼の「然れば汝等惡しきものながら、善き賜を其の子に與ふるを知る、況して天に在ます汝等の父は求むるものに善き物を與へざらんや」(太七〇十一路)との論法の如き絶對の理論である。若し夫れ此の不

義の裁判官が、全然利己主義から、此の要求者の歎願に耳を傾けて、其の希望を満したとするならば、況んや慈愛と同情とに満つる神は、其の民の祈禱に耳を傾け、遂に其の思召に適う時期に、彼等の苦悶より彼等を救はれないことがあり得やうか。

パリサイ人  
と税吏

耶穌は到る處に神の國の福音を宣傳せられたので、此の國境の僻村に於て僅かの滞在の間にも亦之を抑制し得られないのである。此のパリサイ人と税吏の重要な譬も亦此所で説かれたものと思はるゝ。此所はユダヤ人の村であつて、サマリヤとの接近は勢其の住民の心にパリサイ思想を顯著ならしめたものであらう。「彼等は自ら義と思ひ人を輕しむる」ものであつた。主の此の譬は傲慢を貶けて、神の前に彼等の立脚地を示めさるゝにあつた。構廬の節は近きにあり、巡禮者の幾團體はエルサレムに向ふ途上、此所に在つた。耶穌は即ち神殿に祈禱に赴く二種の人物を表はされた。此の二人の代表せる所は頗る顯著な對照を爲して



ゐる。一人はパリサイ人であつて、彼等が此の神聖な殿堂に赴くに不思議はない。然るに他の一人は税吏であつて、彼が此所に來つて祈ると言ふことは如何にも怪しむべきである。兎も角甚だ誇張した面倒な禮式を以て此の聖徒は敬虔な態度で佇みつゝ、『神よ我れは他の人の如く、強索、不義、姦淫せず、亦此の税吏の如くにもあらざるを謝す、我れ七日間に二次斷食し、又總て獲るものの十分の一を献げたり』と身振をして祈つた。此れは實は口で言ふ語ではないのである。彼は傍に居るものの稱讚を博せんがために叫んでゐる語であることは明かであつて、其の口に言ふ所は聽て胸中を其のまゝに表はしたものである。『斯く彼は自己に祈禱を献げてゐるのである』。又彼の祈りは其の職分に格好なものであつた。萬人に勝りて『義しき行ひ』を爲すものと自ら誇るはパリサイ人の特徴であつた。斷食は神の爲めに謙遜するの必要の生ずるとき、例令へば戦争、疫病、蝗害、不作、饑饉、旱魃等の起つたときは何時でも會衆に向つて望まれたのであつた。然るにパリサイ人の嚴格なもの

は毎週月曜日と木曜日に斷食した。律法は農産物牧場の産業の十分の一を献ぐべきを命じた(利廿七〇卅一卅二、十八〇廿一廿四民)。然るにパリサイ人は此の律法に定めた以上に及び、彼等の所得は悉く十分の一を献げ、滑稽にも彼等の料理中の獸肉すら躊躇しつゝ、徴發に應じたのであつた。此のパリサイ人が公言した所は悉く事實であつて、其の祈禱の缺點は、自ら義しきものと爲す精神を誇るにあつた。従つて他に對して殘虐な侮蔑を加ふる精神となつたものである。彼のみが義しく、其の同胞人類は悉く審判を以て一掃せらるべきものであるとした。聖クリソストムは之を一言にして『汝の倨傲なる語を謹め、せめては「或る人々」と言へ、「他の人」悉く強奪、不義、姦淫とは何事ぞ、汝の他は皆強奪者と爲すか、あゝパリサイ人よ。他は悉く不義にして汝のみ義しきか。他は悉く姦淫して、汝のみ獨り淳潔を保てりや』と論じてゐる。同時に税吏は悔恨遣る方なき姿で遙かに佇んだ。パリサイ人は彼を認めなければ、彼の胸中如何なる戰鬥が行はれてゐるとも知らず、唯だ自分の雄大な義に阻ま



れて彼の存在を眼中に置かないのである。此の罪人は「立た」けれども、パリサイ人の如き複雑な、傲慢な態度ではなかつた。其の眼は俯してゐた。元來パリサイ人の態度が正當でユダヤ人の祈禱の所作は斯うであつた。然し此の罪人は其の罪の意識から首を垂れた。彼の罪過は彼を碎いて、眼を擧ぐるを得しめなかつたのである。聖クリストムは彼が仰げば辰星は彼を訴へ、天空には其の宣告文を印せらるゝを見る心得して、天を望み見得なかつたものであると譯してゐる。彼の祈禱は悔恨の嗚咽の下から、恩寵を歎願する「神よ此の罪人なる我れを憐み給へ」との叫びであつた。パリサイ人は自ら己れのみ獨り義人なりと考へたと同様に、此の税吏は自らと比較すべき罪人の他にあるべしとも思はないのである。

「我れ汝に告げん、此の人は彼の人よりは義とせられて家に歸りたり」と耶穌は仰せられた。勿論彼が神に讃稱せられたのは其の罪あるが爲めに非ず、其の悔改の情あるが爲めである。彼が其の賦與せられた恩寵に歡喜しつゝ、神殿を出たことは記

してない。恐らく彼は頭を垂れつゝ、此所を出て、數日間は尙ほ悲しみのうちに在つたことであらう。然かも尙ほ彼が其の罪を告白して、其の恩寵を叫び求めた刹那に、彼は神に嘉納せられて、救ひの喜ばしい確證を握り得たのであつた。後に何れの日か彼は足も軽く、心も浮き立つて、再び神殿に詣でつゝ、神が其の靈魂に與へられた所を感謝したことであらう。「誠に神は聽き給へり、聖意を我が祈りの聲に留め給へり、神は讃むべきかな、我が祈りを貶げず、其の憐憫を我れより取り除き給はざりき」と。

サマリヤ人の  
拒絶

此の國境の町より耶穌はサマリヤに發足せられ、其の豫定に準じてサマリヤ人の村に入られた。此所は既に其の七十人の先發隊を遣はされたので、之を迎へて其の傳道を喜ぶ準備の整ふたものと豫期せられた。然るに其の豫期は失望と變つた。住民は其の通過を憤慨し、腕力を以て之を阻み、村に入らるゝを容さなかつた。福音記者は註して「其のエルサレムに向ひ行く態なるが故」なりと



言つてゐる。彼等の不深切な行動はユダヤ人とサマリヤ人の間の不斷の争闘以上であつたことは明かであつて、此れを推論するのは容易である。即ちガリラヤ人が節の季節に聖都に上るに當つてサマリヤを通過したが、其の報が住民に傳はるや、敵意を含む示威運動が起さるゝのが常であつた。構慮節かりはすまひのいはひに上る巡禮者の一團は既に其の道を通つた所であつて、耶穌が其の弟子と共に此所に來らるゝに當つて、冷遇を受けらるゝは當然であつた。一同はガリラヤ人で、エルサレムに向ふものである。弟子たち、殊にヤコブとヨハネ、即ち過激な精神の雷の子等は憤怒した。『主よ、我等エリヤの行せし如く天より火を召び降して彼等を滅さんとす、耳さか』と叫んだ。耶穌は鋭く之を叱責して『汝等の心如何なるかを自ら知らざるなり、人の子は人の命を滅す爲めに來らず、唯だ之を救ふ爲めなり』と應じ、他の村に移られた。

七十人の歸還

此の町の人民か主を拒絶したことは、聽て轉すべき事件の前表に過ぎない。反猶太感情はサマリヤに普及して、一語だも説教の餘地はなかつ

た。故に其の計畫を擲つて、直ちにユダヤ州に向はるゝ他はなかつた。其の旅程の何所に於てか、曩に遣はされた七十人が傳道を終つて、經由した所を報告せんが爲め一團となつて耶穌を迎へた。彼等はサマリヤを旅行する間に少しの敵意をも挿まれず、耶穌を迎ふるや、驚駭と得意に浮々としてゐた。『主よ惡鬼さへも汝の名に因り我等に服せり』と彼等は叫んだ。彼等の語に耶穌は少しも喜ばれなかつた。此れ實に信仰のないことを示す證據ではあるまいか。元來其の名に由りて大事業を爲さしめんがために彼等を遣はされたものである。然るに其の成功に對する彼等の驚駭は彼等が其の信任の意義を如何に誤解せるかを示めすに足るのであつた。彼等は畢竟其の期待せる所僅少なるが爲めに自己の成就せる所を多として驚くのである。事實彼等の成就したものは無意義である。耶穌は更らに大事を觀取して居られた。曰く『我れ電の多くサタンの天より隕つるを見し、我れ汝等に蛇、蠍を踏み又敵の權を制ふる權威を賜けたり、必らず汝等を害ふものなし』(賽十四〇十二參照)と。斯くの如



き權威を賦與せられつゝも、彼等は僅少なるものを望んで、僅少なるものを完整裂した。彼等の得意は又靈的傲慢を排列するものであつて、耶穌は他に歡喜すべき更らに大なる理由あるを示めされた。『汝等は誠に驚くべき權威を授けられたり、然れども惡鬼の汝等に服しし事を喜びとする勿れ、汝等が名の天に録るされしを喜びとすべし』(出三十二〇三十二、三、馬三〇六勝四)と。神の生命の書に其の名の記さるゝは人類の到達し得べき最高の誇りであつて、之を實現せんには、其の傲慢を確く自ら押へて、敬虔な信仰を以て拮据奮勵怠らざるにある。

一法教師の似非質問

耶穌はサマリヤの南部の境を徑てユダヤ州に入られ、恐らくエリコと思はるゝ一市に達せられた。而して會堂に赴いて説教せられたと思はるゝ。其の説教の終るや、會堂の規定に従つて、聽衆の一人が立つて、質問を試みた。彼は法教師であつて、律法を説明し敷衍し、又其の意義を判ずるを職とするものであつた。彼は面倒な方語で聖書の句を引いた。而して其の説明を求めんが爲めに非

ず、唯だ耶穌を困惑せしめ、聽衆の面前に於て狼狽せしめ、又恐らくは訴訟の基礎を得んがため教理に背く語を捕へんと謀つたものであらう。此れぞ爾來耶穌がユダヤの聰明な智者と絶えず戦はれねばならなかつた爭論、殊に受難週に此の辨證論の寶庫を開かれて最高調に達した論戰の前表であつた。耶穌は永遠の生命に關する教訓を施されたらしく、法教師は「師よ、我れ何を爲さば永遠の生命を受くべき乎」と尋ねた。耶穌は彼の狡猾な計畫を知つて、如何なる勿卒の場合にも曾つて敗れを取られなかつた驚くべき潤澤な方略を以て之に應じ、自らを護ると共に、先づ批評的立脚地を自分の側に占むる利益を收めんとして、彼の質問に對し、反問を以て答ふる手段を擇ばれた。『律法に録されしは何ぞ、汝如何に思ふや』と。厚顔にして口輕き答へは聲に應じて『汝心を盡くし、精神を盡し、力を盡し、意を盡し主なる汝の神を愛すべし、亦己れの如く隣を愛すべし』と提出せられた。此れゼモオの律法を巧みに接續せしめたもので其の時代のユダヤ教派の宗教的義



務の精髓となつたものであらう(可十二〇三十一三參照)。法教師は確固たる信念を以て之を引照し、彼が豫期した如く、攻撃の機會を得るものと、異常の快活な調子を以て答へたのであつた。此の『隣』とは同胞ユダヤであるとはラビの間に認められた意味であつたが、彼は狡猾にも、耶穌が、一層意義の解釋を此の語に與へらるゝであらうと推したのであつた。耶穌は之を嘉みして『汝の答へ然り、之を行はゞ生くべし』と仰せられた。法教師は機會を遁さじと『我が隣とは誰なるか』と問ふた。

善きサ  
マリヤ  
人の譬

是れ誠に狡猾な策略であつたけれども、方略に於て耶穌は其の無益の争鬭に足を絡らまゝゝを避けて、譬を以て答へ給ふた。即ち或る旅行者がエリコからエルサレムに向つたが、途上、『血の坂』と恐るべき名ある峻しい道に差し掛つたときに匪賊に襲はれた。彼等は旅人を逐剝ひで、之を半死半生の酷い眼に遭せた。ユダヤの祭司は廿四時間宛順番で神殿に侍したが、其の職にある日限の半數は食物と水の豊かな此の『棕櫚の都』に宿つた爲めに、エルサレムとエリコ

との間を絶えず祭司が往來するのであつた。此の逐剝に遭つた旅人が血に塗れて横はる所に祭司が坂を降りて来て彼を見なければ、道を避けて通つた。次にレビの人が來たけれども彼も亦道を避けて通つた。間もなく商人らしいサマリヤ人が驢馬の背に揺られながら差掛つたが、他には路に人影も見えなかつた。彼は此の不幸の旅人を見るや、急いで之を助けんと近いた。而して其の傷を、當時の治療の手當たる脂と酒とを以て洗ひ、之に包帯を施し、彼を驢馬に乗せ、旅宿に伴つて介抱し、翌朝は其の旅程を急ぐまゝに早く起きて出たが、旅宿の戸口で二デナリを主人に與へて負傷者の介抱を彼に托した。一デナリは勤勉な男の一月の工賃であつて、二デナリあれば此の傷いた旅人が再び旅行に發足し得るやうなるまでの宿料に充分であつたであらう。然し此れ以上の必要が無いとも限らないので、サマリヤ人は費用を意とせざるを主人に告げて『費へ若し増さば我れ歸りの時汝に償ふべし』と言つた。

『然らば此の三人のうち誰が強盜に遇ひし者の「隣」なると汝意ふや』と耶穌は



問はれた。此れには一つの答の他に致方はない。己むなくも「サマリヤ人なり」と答へざるを得なかつたけれども、尙ほ此の憎んだ言語を口にするの勇なく、不承不承に「其の人を矜恤あはれみたるものなり」と口訥くちどりつゝ答へた。耶穌は忽ち「汝も往きて其の如く爲せよ」と命ぜられた。耶穌は遺憾なく勝利を博せられた。今將に無益の論争に煩はせられやうとせられた耶穌は實に驚くべき手練を以て不承不承に反對論者を自ら曲に陥らしめ給ふたのであつた。

### 第參拾七章

### エルサレム傳道

「何の煩か汝にある？ 開け、

汝と共に樂しまんごするものを見よ

開け、然らずば我れ汝を去らん、

而して汝我が顔を渴望し、

恩寵をなげ哭き求むる日あらん

其の時汝の今在る如く我も聾者たらん

我が爲めに開け」

クリスチナ・ツイ・ロセツチ

(路十〇卅八―四十二、約七〇十一―五十二(太十一〇廿八―三十)、約八〇十二―一〇卅九太

廿三〇卅七―九、路十三〇卅四五、太十一〇廿五―七、路十〇卅一、二)

耶穌はガリラヤを出發せらるゝに當つて、かぢま構廬の節いはりに上らるゝ考へは、

なかつた。往く往く説教を試みつゝ、徐ろに國內を巡遊して、すざ逾越節いはひにエ

ベタニ  
ヤにて



エルサレムに達せらるゝ筈であつた。然し神の攝理に由つて他の命に接し、其の在世界の日外觀に由らず唯だ信仰に由つてのみ歩み、天父の聖旨の導かるゝまゝに一步一步を進め給へる耶穌は與へらるゝまゝに服し、かりはチミヒ構廬の節の執行中にユダヤに達して聖都に志さゝれた。斯くて『血の阪』を昇り、橄欖山を隔て、エルサレムに二哩以内の村落ベタニヤ赴かれた。此所にはラザロと其の姉妹マルタ、マリヤの住居があつて、耶穌は此の一家を訪はんがために道を横切られたのであつた。北方の都マグダラに於て罪の生涯より救ひ給ふ耶穌の好意に由り、マリヤは罪赦され、潔められて此の家に歸つたので、彼等一同耶穌に感謝の誠を獻げ、耶穌は又其の歓迎を嘉納せられた。

**節の  
歡樂**

かりはチミヒのいはり構廬節はユダヤの祭日中最も歡樂を極むる節會であつた。『其の歡樂に與らざるものは未だ以て歡樂ありと言ふべからず』とラビは言つてゐる。第一にエヂプトより脱出の記念の爲めと、彼等の祖先が荒野の放浪中に棲まつた天幕の記念のためであつて、國民は橄欖と烏枯の樹の枝とを以て厚く組んだ木の

枝の假小屋を作つた(利廿三〇卅三―十四、尼八〇十五)。同時に又此の節は收穫の祭日であつて、田畑や葡萄畑の産物を集めて守つたのであつた(申十六〇十三―十五、出廿三〇十六)。市民は其の假小屋を平屋根の上や、家の庭前に構へ、外來者は街上や、都の胸壁の下に營んだ。斯くの如き愉快な假小屋の中で、彼等は一週間の長い日を休業して祝つたのであつて、是れが彼等の宴筵と交歡の委節であつた。彼等は『肥たるものを食ひ甘きを飲み、而して其の備を爲し得ざるものに之を分ち遣り大いに歡樂』(尼八〇九)んだのであつた。

**其の善  
「贈物」**

耶穌がベタニヤの村に達せられたのは此の歡樂の季節中であつた。家の主婦たるマルタは恰かも祭日の宴會の準備に忙はしかつたが、耶穌の來訪と共に、萬事に遺憾なからしめんとする彼女の心配は一層加はつた。之に反してマリヤは、萬事に關せざる如く弟子の態を取つて、其の聖足の下に座りつゝ耶穌の慈愛垂たる聖容を仰いで、其の教訓を味つてゐた(跡二〇四十六、使廿二〇十三參照)。彼女が斯く座つてゐるのを見て『供給の事多くして心入り乱れたる』多忙の主婦は憤つた。主に



對する恭敬の念から暫くは押包んでゐたが、遂に耐ふる能はざるに及んで口を開いて『主よ、我が姉妹我れを一人遣して勞働しむるを何とも意はざるか、彼に命じて我れを助けしめよ』と訴へた。耶穌は之に應じて『マルタよ、マルタよ、汝多くの端に由りて思ひ慮ひて心勞ひせり、されど我等の要するもの少し』と仰せられた。此れ主婦が準備せる食物の奢侈に對する柔かな譴責であつた。更らに簡単な食事で事足るのである。夥しき食料此れ何の要ぞ、『然れど我等の要するものは少し』と其の慣用の語法に由つて不意に地上より天上に轉じ『即ち一つなり、マリヤは既に其の善業を選びたり、此れは彼より奪ふべからず』と加へられた。此の歡樂の季節に人々は宴會を開き又『贈物』を贈答してゐるけれどもマリヤは消え行く食物に心を掛けないのであつた。彼女は善き『贈物』を選んだ、即ち天よりマナを以て其の靈魂に餐應してゐるのであつた。

ベタニヤより耶穌はエルサレムに赴かれたが、此れ大膽な行動であつた。其の以

エルサレムに於ける期待

前聖都を訪れ給ふや、彼等が安息日破棄と思考した所を意とせずベテスタの池に於て奇蹟を行ひ(約五〇)、有司たちの怒を買はれたのであつた。

斯くて彼等は耶穌を殺さんことを志してゐるのであつた。其の後と雖も彼等の敵意は聊かも減退せず、寧ろ其の急を加へてゐるのであつた(約七一)。十八ヶ月の間、耶穌は其の時期の到るまで彼等の毒手を免れてエルサレムの外に居られた。祭日は一日一日と進むけれども、耶穌は其の姿を現はされないので、有司も人民も等しく失望した。而して禮拜者が構廬節の最大祭日に參集したとき耶穌を渴望する事更らに甚だしきを加へた。北方よりの巡禮隊が『エルサレム向はるゝ』耶穌を見て、中途にあらるゝとの噂を廣めたものであらう。節は遂に始まつたけれども耶穌の來られざるに彼等は待ち難ねたのであつた。有司は其の名を口にすることを忌み、侮蔑の假面の陰に憎惡を包みつゝ『彼は何所に在るや』と求めた。人民は有司たちの斯くまで惡感を有する人物に就いて、公然とは噂を慎んだけれども皆好奇心に驅られ、殊に



硬骨の禮拜者の間には其の時議論が戦はされた。或人は『彼は善人なり』と言ひ、或人は『否な民を惑はすものなり』と言つた。

到着

遂に耶穌は節の第四日目、殆んど之を求むる望みを一同が斷念した所に神殿の外苑に姿を現はして説教を始め給ふた。其の教訓は異常の感動を聴衆に與へ有司たちは驚駭する外はなかつた。彼等は未だ會つて斯くの如き教に接したことはなかつた。而して『ミドラシユの家』にラビの膝下に侍したこともない此の人物が如何にして斯くの如き智慧を有するかと怪しんだ。耶穌は彼等の質問に對し、其の智慧は自ら有せらるゝに非ず、神の智慧なりと答へ給ふた。尙ほ曰く『人若し我を遣しし者の旨に従はば此の教への神より出するか、又己に由りて言ふなるかを知るべし』と。此所に彼等の不信の秘義が潜むのであつた。彼等が其の既に知れる小なる眞理に忠ならざるが故に、耶穌の示めさるゝ雄大な眞理を悟り得ないのであつた。『モオゼ汝等に律法を與へしに非ずや、然れど汝等の中には之を守

耶穌の  
自衛

るものなし、汝等何故に我れを殺さんと謀るや』と。群衆のうちエルサレムの住民は僅かで、有司の計畫を知るものは少なかつたので、彼等の習慣の如く素朴な調子で『汝鬼に憑かれたり、誰か汝を殺すことを謀らんや』と叫んだ。然し耶穌は之に取り合はず、尙ほも有司の罪跡を列擧して、其の根據もなき不合理を責め給ふた。彼等は自分たちが絶えず安息日の律法を完膚なきまでに破棄して居るに心も用ゐず、耶穌の安息日に人を癒やされたことを憤つてゐるのであつた。律法に由れば小兒には生れて八日目に割禮を授くべき筈であつたが、偶八日目が安息日に當れば、彼等は安息日には何の業務をも爲すべからずとの律法を破るを意とせず、之に割禮を授けたのであつた。此れ律法の衝突である。然し人を癒やすは勿論割禮よりも大切である。『若し人モオゼの律法を破らざらんが爲め安息日に割禮を受くる時は、何ぞ安息日に人の全身を癒やしし事を怒るや』と。無論割禮の如く明かに人を癒やすことの命令は記されてはゐない。然し不文と雖も人道上よりは尙ほ一層重大なる事件であ



らねばならぬ。

群衆  
の  
意  
見

群衆の間に行はれた議論は鋭くなつた。此所にはエルサレム市民の一團があつて、彼等は有司の殘虐な計畫を知つてゐて、何故其れを實行しな  
いかを怪み『此れは人々の殺さんと謀る人に非ずや、今彼れ明かに言ふ、而して之  
を尤むるものなし、有司等は彼を誠にメツシヤなりと知るならんか』と言ひ、又一  
人は其の考を嘲りつゝ、『我等は此の人の何所より來りしを知る、若しメツシヤの來  
らんときは誰も其の何所より來るを知るものなからん』と言つた。此れぞ當時の思潮  
であつた。此れ聖書によりて救主はベテレヘムに生れ給ふ(太二〇一六四參照)べきは勿論承認  
すべきであるが、既に第一の贖主モオゼのミデアンの野に幽閉せられた如く第二の  
贖主は一次び現はれ、捕はれ、又現はれ給ふであらうとラビは言つた。而して其の  
再現の日は唐突であつて、豫測すべからざるものである。『此の三事には解決なし、  
曰くメツシヤ、掘り出せる貨幣、蠟尾鞭是れなり』と稱せられた。彼等の非難を謀

知して耶穌は「汝等我れを知る、又我が何所より來たるを知る。されど我れは己に  
由り來りしに非ず、我れを遣しゝものは眞なるものにて汝等の知らざる所なり、我  
れは彼を知る。そは我れは彼より出で、彼は我れを遣しゝものなればなり」と叫ばれ  
た。斯くの如きはエルサレムの市民の理論であつて、又當時の神學の所説であつた  
けれども、此の祭期に神苑に群つた民衆の大部分は市民ではなかつた。而して神學  
的偏見に囚はれず、主の宣言を公平に考へて之を信じたものが多かつた。彼等は「メ  
ツシヤの來らん時其の行す所の休徴しるし此の人より多からんや」と論じた。

有司  
の  
困  
惑

有司が空しく手を控へたのは勿論耶穌のメツシヤたるを説服せられた  
爲めではなかつた。彼等は耶穌に就いて憂悶し、復讐の念急なるものがあ  
つたけれども敢て手を下さなかつたのは群衆が耶穌の味方に立つたからであつた。  
彼等は皆悉く耶穌のメツシヤたるを認めた譯ではなかつたけれども、尙ほ異常に  
感動したのであつて、當時耶穌は其の中心人物であつた。有司たちは暴徒の必らず起



るべきを豫知して、彼等の手に餘る騷擾の突發するべきを恐れた。民心を收斂して居らるゝ間は到底耶穌には抵抗すべくもなきを彼等は悟つて、此の時より頻りに民衆に對して耶穌の信賴を傷くべき方策を講究するのであつた（使廿一〇廿七―卅六、太廿二路廿二〇二參照）。若し唯だ群衆が耶穌を憐む程度まで事を運ぶを得ば、豫定の行動を執るは意のまゝであつた。然し今斯くの如き多數のものが神苑に於て耶穌に對して信仰を告白したのを見て彼等は憤怒し、形勢最早傍觀すべからずとして、其の志を實行すべきの時なりと認めた。常に國民議會の大多數を占めたパリサイ人を首めとし、サンヒデリウムの議員を召集し、熟議の上機會を窺ひ、耶穌を捕へて、之を彼等の面前に縛き來らしめんが爲め神苑の役人を遣はした。斯くの如くして民衆の動亂を見ず、事を遂げ得べしと認めたからであつた。

最後  
の  
召命

神苑に於て耶穌は尙ほ信仰不定の徒に説教して居られた。「我れ尙片時も汝等と偕に居り、而して後我れを遣し、ものに往かん、汝等我れを尋ぬる

とも遇ふ可らず、我が居る所へ汝等來る事能はじ」と。これ最後の召命は今將に來らんとするの意味であつた。然し有司は此れを聞いて、不審と嘲笑とを以て騒ぎ立てた。是れ何の意味であらうか。彼等は其の非靈的な平生の思想に由つて、耶穌がイスラエルの地を棄て、再び彼等の邂逅すべからざるの地に赴かるゝのであらうか。耶穌が異邦人の地に赴かるゝものとは考へられない。其では突飛に過ぎる。既に世界全地、主としてバビロニヤ、エヂプト、シリア、少亞細亞、ギリシヤ、イタリイ等には其の異教人の地にユダヤ人の移住した植民地があつた。而して彼等は其の商業的手腕に由つて一般に富と權勢とを付植してゐたのであつた。頑固に祖先の信仰を守れる彼等は神殿に禮拜せんがため此の大祭節にはエルサレムに參集したけれども尙ほ彼等は其の住居の地方の氣風に染まぬ事は出来なかつた。彼等は其の隣接する土人の國語を學び、自ら不知不識の間に彼等の思想習慣に化してゐた。此等のユダヤ移住民は、傲慢なユダヤ州民には温かに迎へられな



かつた。有司等は意義不明な耶穌イエスの説を聽いて、異邦人のユダヤ移住地に赴き、異邦人に教へらるゝに非らざるかと怪しんだ。『彼が語りて「汝等我れを尋ねるとも遇ふべからず、又我が居る所へ汝等來る事能はざる可し」と曰ひし言は何ぞや』(彼前一〇)と。構廬かりはすまひの節いはひは一週間で終つた。然し其の規模は少ないけれど八日目には最も嚴かな節が行はれた。第一の日には十三匹の犢が献げられ、第七日まで一匹宛を減じて——總て七十匹を献げらるゝのであつた。八日目には唯だ一匹の犢が献げられた。七日間毎日牡羊二匹、小羊十四匹が献げられ、八日目には牡羊一匹、小羊七匹を献げた。八日目には元來節いはひとは別であつたけれども、一般には晉いはひに節中いはひの一日と思はれたのみならず、殊に緊要な日とせられた。此れ實に「節筵いはひの末の大なる日」であつて、狡猾なラビの譬に由つて、此の日の規模の少ないのは其の卓ぐれた所以であるとの説が行はれた。七十の犢は世界の七十の國民の爲めに献げられ、八日目の犢は唯だイスラエル國民のみの爲めの献祭であると言ひ、ラビは又之を譬へて或る國

國王が七日間宴會を開いて市内のあらゆる住民を招いたが、八日目に其の寵臣に「我等は今市民に對するの義務を盡せり、我等——汝と余と——何は無くとも肉か魚か野菜か、量は僅かなりとも、今共に慰せん」と言つたと稱して居た。

雨露の  
爲めの  
祈禱

構廬かりはすまひの節いはひはユダヤ人の收穫の本源いはひの節で、禮拜者は收穫に對する感謝を献げた。六日目の日の出に祭司は金の水差を携へ、歡びの歌を歌ふ一團を從へて、シロアムの池に赴き、水を汲んで、恰かも犠牲が祭壇に献げられたときを計つて、歸り來り、同時に水の門——此の儀式から其の名の出た——から神殿に入るや喇叭が鳴り響いた。祭壇の東の側に葡萄酒を献げる銀の盤があつた。而して其の側に今一つ銀の盤があつて、水差の水は此れに注がれた。此れ蓋し神が地を潤し之を養はるゝ雨露を記憶する感謝の意を表はしたのである。禮拜者は既に收穫したものに對して感謝するのみならず、彼等は又翌年の農業に對する祝福を祈つた。節いはひの七日間に彼等は露を祈り、八日目には雨を祈つた。



活ける  
水の河

八日目に、早魃續く東洋諸國には最も大切な其の『神の賜』を祈つてゐる所に、耶穌は立つて大聲に叫ばれた。『人若し渴かば我れに來りて飲め、我れを信ずるものは聖書に録し、如く(賽五十)、其の腹より活ける水川の如くに流れ出づべし』と。此れ聖書中からの直接の引用語ではない、聖書からの反響である(賽卅二、四十四、三、所二)。宛然ヤコブの井戸の邊りに於てサマリヤの婦に對し『我が與ふる水を飲むものは永遠く渴く事なし、且つ我が與ふる水は其の中に泉となりて湧き出て永遠生命に至るべし』(約四〇)と仰せられたと等しい聖語であつた。此れ以外には此所に福音記者は何事も載せてゐない。然し耶穌は此れ以上に仰せられたに相違なく、さもなくば斯くも群衆を動かすことは出来なかつたであらう。靈魂の渴きは活ける水に由りてのみ癒やさるべきを説かれたことであらう。聖マタイ他の關係なき所に附記してゐる『凡て勞れたるもの、又重きを負へるものは我れに來れ、我れ汝等を息ません、我れは心柔和にして謙遜なれば、我が軛を負いて我れに學

らへ、汝等心に平安を獲べし、蓋は我が軛は易く我が荷は輕ろければなり』(太十一、三十參照)と教へられたのは恐らく此の時であらう。此れ渴して苦悶する疲勞せる動物からの想像であつて、三つの問題が含まれてゐる。活ける水を飲んで力を新らたにする事、軛の深切な事、荷の輕い事はこれである。『律法の軛』とはラビの口に屢上つた語であつて、實際彼等は律法を以て苦惱極まる軛とならしめたに過ぎぬ。耶穌の與へらるゝ祝福を觀よ。耶穌は弟子の荷物を取去られない、蓋し荷物は神の賢明な攝理に由つて各人に與へらるゝ所である(太廿三、四、加五、〇一參照)。却つて耶穌は新たな重荷と新たな軛——耶穌の荷物と其の軛——とを與へらるゝのである。耶穌自らも弟子と共に之を負ひ給ふたけれども、然かも其れは疲勞を興へざる荷物、磨疵を被らざる軛である。同一の軛が兩者の首にあるのであつて、一方を耶穌が負はれ、一方を其の弟子が負ふのである。而して耶穌と其の弟子とは其の苦役にも褒賞にも偕に與るべき同一の荷物を相々に擔ふのである。



群衆の  
論争

斯くの如きものが節の大いなる日に於ける耶穌の教訓であつて、其の聽衆の心に感動を與へたのは當然であつた。斯くの如き耶穌イエスの説教はガラヤに於ては屢聽くを得た所であつたけれども、此の大切な日に神苑に群がつてゐた民衆は各種の地方から集まつたもので、始めて斯くの如き教を聽いたのであつた。彼等は驚駭措く能はざるものがあつた。或人は來るべき預言者にして、メツシヤのために道を備ふる預言者であると推論し、或人は此れ即ちメツシヤなりと主張した。或人は又「否なメツシヤはガリラヤより出づべけんや、聖書にメツシヤはダビデの裔にてダビデの住みし郷ベテレヘムより出でんと録るしゝに非ずや」と言つた。彼等はナザレの耶穌イエスとして主を見て無智にも之に反對し、愚かにも斯くの如き證言を試みてゐるのであつた。

サンヒ  
デリウムの  
証の召集

此の群衆の論争は主の敵に對して、之を捕縛すべき格好な機會を與へらるものと思はしめた。サンヒデリウムの役員は現場にゐたが、彼等は

群衆の騷擾を恐るゝに非ず、其の教訓に彼等自ら感激して手を下すことが出來なかつた。彼等が「切石の大公堂」に歸り來るや、待つてゐた議員は何故に耶穌イエスを捕縛し來らざるかを訪問した。「未だ斯の人の如く言ひし人非ず」と彼等は答へた。常にサンヒデリウムの大部分を占むるパリサイ人は憤怒の嘲りを浴せて「汝等も亦惑はされしか、有司つかさ又パリサイの人のうちに彼を信ずるものあらんや、律法おきてを識らざる此の衆おほの人は罰すべきものなり」と罵つた。此れ彼等の所謂「土の民」(註)「土百姓」(註)平民を侮蔑するパリサイの精神を告白する酷な嘲りである。耶穌イエスが此の牧羊者なき羊の如き、否な牧羊者なきよりも甚だしき此等の牧羊者を有する群民を見て之を哭かれたのは當然である。

ニコデモ  
の軟弱な  
辯護

主を庇ふ唯だ一人が立つた。即ち知名の士にして耶穌イエスを信じた一パリサイ人——主の傳道の當初にサンヒデリウムの代表者として夜蔭に乗じて訪れて來たニコデモと言ふ議員がゐた。當時の會見の記憶は彼の曾つて忘れ得ざる



所で、心には弟子であつたけれども尙ほ彼は憤怒と罵詈の頭上に及ぶべきを恐れて、其の信仰を告白するを憚つた。彼はサンヒデリウムの此議會に出席して、甚だ軟弱な辯護を試みた。彼はだ言ふ所を聴かずして人を罰するは合法なりや否やを質問したのみであつた。彼の論敵は彼の心中の機微を推したが、一齊に押し潰すやうに『汝も亦ガリラヤより出しものなるか』と嘲りつゝ、『考ね見よ、預言者はガリラヤより出づる事なし』と罵つた。彼等の偏見の眼には、預言者の名簿に幾多のガリラヤ出身者の載せらるゝを看過してゐるのである。嘲罵に由つてニコデモは沈黙したが其の小膽な聲は再び主の辯護の爲めにサンヒデリウに聞かるべくもなかつた。

節終りて  
エルサレム  
△ 停留

節終つて巡禮の群衆は皆都を去つたけれども、耶穌は尙ほ滞留せられた。神の攝理は其の目的とせられた所に反して耶穌をエルサレムに伴つたのであつた。而して耶穌は暫く此所に傳道し、彼等が耶穌の血潮を以て其の手を塗るまでに其の敵に説教せらるゝのであつた。エルサレムの住民はガリラヤと

は雲泥の相違があつた。彼等の住地はユダヤ人の生活と宗教との中心であつて、彼等は其の拔群のものなりとして自ち誇つてゐたのである。此れが彼等の滅亡の證據であつた。彼等は耶穌がガリラヤ人であつて、未だ曾つてラビの膝下に學ばれざるを理由として之を貶けてゐたのであつた(約七〇)。彼等はラビの學問のみに達して、耶穌の口を開からるゝや忽ちに何等か神學上の反對を提出し、耶穌の教理が彼等の理論に當筈まらないと言ふので之を貶けた。民衆の欣仰に護られて主は暴力を免れ給ふたけれども、尙ほ各方面に於て其の敵のために窺はれ、又妨害を被られたのであつた。

賽錢箱の  
側論争

神殿中賽錢箱の邊りが第一の論争の舞臺であつた。婦人のみが入り得る故に非らず、此れより奥に入り得ざる故を以て婦人の苑と稱する所があつて、禮拜者が其の献物を投ずる十三の箱があつて、形の似てゐる所から『喇叭』と稱せられた。耶穌は屢好んで此所へ來られて、説教せられたやうである。或る日



此所で説教中に『我れは世の光なり、我れに従ふものは暗き中を行かず、生の光りを得るなり』(可十二〇四十一、路廿二〇一)と仰せられた。此れ構廬の節の最後の日に行はるゝ光景を藉りての教訓であつた。此の日の暮に婦人の苑に於て黄金の燭臺の上に火が點されて、禮拜者は各自の手に眞鍮の炬火を握つて此の前で躍るのであつた。即ち此れを以て未だ曾つて見ざる強い宣言をせられたのである。「光」とはユダヤ人がメツシヤに對して献ぐる稱呼であつて『我れは世の光なり』と仰せらるゝのは、其のメツシヤたるを力説せらるゝ所以である。パリサイ人は直ちに之に反對して抗議した。自己のためにする辯證は無効なりと言ふのがラビの律法の主義であつた。故に彼等は『汝は自ら己れの證を爲せり、汝の證は眞ならず』と叫んだ。此れ彼等が幾分博識を誇るを示めす悲しむべき遁辭である。耶穌は尙ほ雄大な宣言を加へつゝ穩かに之を戒めへて答へ給ふた。即ち彼等の立法上の條目は耶穌には全然該當しないものである。耶穌は自らこれを證明せられねばならないのである。蓋し耶穌の他に其の何所

より來り、何所に赴かるゝかを知るものなく、眞の證明を爲し得るものはない。又其の證明を助け得るものさへないのである。『我れ獨りあるに非ず、我れを遣し、父と共に在ればなり、然り二人の證は眞なりと汝等の律法(申十九)に録されたり、我が證をするものは我れなり、我れを遣はし、父も亦我が證を爲るなり』と。彼等は其の靈界に疎きを自ら示めしつゝ半は嘲り半は困惑して『汝の父は何所に在るや』と問ふた。彼等にして若し靈的なる心意を有せば、耶穌の天より來られたるを認め、神の語を説かるゝ所以を悟つた筈である。

再び最期  
に就いて  
の宣言

又或る時耶穌は『我れ往かん、汝等は我れを尋ねべし、汝等己れの罪に死なん、我が往く所へは汝等來る事能はざるなり』と仰せられた。

此れ節の間に語られた教訓で、有司がユダヤ人の移住民に赴からるゝに似たりと考へた所を此所に反復せられたのである。曩の場合と等しく此の教訓を誤解して、之に甚だしき意味を附して、自分の神學の論法に由つて迷つてゐるのであつた。彼等



有司の  
其だし  
き誤解

は耶穌を以て狂氣せるものとなし、自殺するのであらうと臆断した(約八〇五十二、七)。ユダヤ人の信仰に由れば、自ら暴虐な手段を己が身に加へたものは見えざる世界に於ては死者の普通の住家に迎へられず、暗黒な深淵に送らるゝものとせられた。故に耶穌が「我が往く所に汝等來る事能はず」と仰せらるゝは自殺して地獄に赴かるゝものと想像したのである。此れ實に無禮にして侮辱せる思想であつて、耶穌は唯だ痛歎失望せらるゝ他はなかつた、此等の人々と耶穌とは異なる世界に屬せらるゝもので、交渉は全く不可能であつた。「噫此の故に我れ全く汝等に告ぐるを得ざるなり」と耶穌は叫ばれた。最早其の苦難の結末に赴かるゝ他に道はない。彼等が欲する如く耶穌に手を下して後復活に由りて之を悟り神に由りて耶穌の語られたことを驚き騒ぐであらう。「汝等人の子を擧げし後、我れの彼なるを知り、又我れ自ら何事をも爲さず、惟だ我が父の教へに従ひて此等の事を言へるを知るべし」(使二〇廿二、三廿六)

此の論争は苦痛ではあつたけれども尙ほ意義のないことはなかつた。「耶穌此の事を言へるとき多くの彼を信ぜり」。彼等はエルサレムに於ける耶穌の傳道の結果、獲られたる回心者であつた。此の他にも尙ほ實際に感動を受けた數名の有司があつた。(約九〇十六、十、九、二十廿四參照)新約全書中の簡単な區別で、其の恩寵に全く信頼するに非らず、唯だ其の教訓を聽いて其の道理に服したものを指す「之を信じ」たのみで、「耶穌に信頼」したのではなかつた。(日本譯聖書に區別なし)。彼等は弟子たり得べき人々であつたので、一日耶穌は全く彼等を促らへんとして之に説教せられた。然かも其の訓誨は彼等を憤らしめ、一語は遂に彼等をして耶穌を棄て、兇暴なる敵たるに至らしめた。「汝等若し我が道に居らば誠に我が弟子なり、且つ眞理を識らん、眞理は汝等に自由を得さすべし」(約七〇十、七參照)と仰せられたが、此れが彼等の慢心に觸れた。彼等の靈性はロオマの軛の下に消磨して、耶穌の靈的意義を悟らず、彼等の國民的屈辱を指して、侮蔑を加へらるゝものと其の聖

耶穌を  
信じた  
有司

第參拾七章 エルサレム傳道



「我等は自由の民なり」

語を解したのであつた。エヂプト人の束縛も、バビロンの幽囚も、ギリシヤ人の征服も、又現に彼等が苦しめるロオマの羈絆をも無視しつつ、自らアブラハムの後裔にして、他の奴隷に非らざるを主張するのであつた。耶穌は之に對して其の靈的意義なるを徐ろに説明せられた。耶穌の説かるゝ所は罪の軛の意味である。人が罪惡を犯す間は、奴隷であつて、神の家には入る資格なきものである。耶穌の供せんとせらるゝ幸福は即ち聖パウロの所謂『子たるものの靈』を彼等に與へ、耶穌自らの如き『神の子』たらしむるにあつた。『我れ汝等がアブラハムの裔なるを知る』と耶穌は仰せられつゝ、尙ほ彼等の脅迫する態度を指摘して『されども我れを殺さんと謀る、蓋は我が道汝等の裏に在らざればなり。我れは我が父と偕に在りて見しことを言ひ、汝等は汝等の父と偕にありて見しことを行ふ』と加へられた。

彼等は今や激怒した。而して道理にも耳を傾けず『我等の父はアブラハムなり』

「我等はアブラハムの子なり」

と答へた。耶穌は尙ほ嚴かな口調を以て『汝等若しアブラハムの子ならば、アブラハムの行を行ふべし。然るに今汝は神に聞きし眞理を告ぐる我れを殺さんと謀る。是れアブラハムの行に非ず、汝等の父の行を行ふなり』と喝破せらるゝや、彼等は『我等は私生兒に非らず』と誇つた。而して更らに其の主張を證據立つる爲めに、一層高い所に進んで『唯だ一人の父あり、即ち神なり』と稱した。『若し神汝等の父ならば、汝等我れを愛すべし』と之に應じ、彼等が惡魔の子であつて、其の父の事業——耶穌を殺さんことを窺ひ之を信ずるを拒むに汲々たるものであることを鄭寧に説き示めされた。

「汝は鬼に憑れたるサマリヤ人なり」

遂に彼等は憤激して、狂暴の態度に陥り『汝はサマリヤ人にて鬼に憑れたるものなりと我等が言へるは宜べならずや』と叫んだ。サマリヤ人とはエルサレムに行はるゝ罵詈の語であつた。是れ彼等の膝下に教へを受けざるものに對してラビが付する綽名の一つであつて、ガリラヤ人が『稅吏、罪あるもの』



友」と綽名を耶穌イエスに付したのと同じであつて、ユダヤ州民は其の智識を誇つて『サマリヤ人』或は『鬼に憑かれたるもの』と耶穌イエスを呼び做したのである。耶穌イエスは之に答へて『我れは鬼に憑かれたるものに非らず、我れは我が父を尊び、汝等は我れを輕んずるなり。我れは自己の榮を求めず、誠に實に汝等に告げん、人若し我が道ことばを守らば、窮りなく死を見ざるべし』と仰せられた。『今我等は汝が鬼に憑れたるものなるを知る。アブラハム既に死に、又預言者も死ねり、然るに汝は言ふ「人若し我が道ことばを守らば窮りなく死じ」と。汝は我等の先祖アブラハムよりも優まされるものならんや、アブラハム既に死に、預言者たちも死ねり、汝自らを誰と爲るか』と叫んだ。耶穌イエスは更らに之に應じて『汝等の先祖アブラハムは我が日を見んことを喜び且つ之を見て樂めり』(希十一〇)と答へらるゝや、彼等は『汝未だ五十に及ばざるにアブラハムを見しや』と重ねて叫んだ。『誠に實に汝等に告げん、我れはアブラハムの有らざりし先きより在るものなり』と耶穌イエスは結ばれた。

石にて打  
たんだ  
の計畫

彼等は耶穌イエスを狂者と稱したが、然し其の語は狂者に超ゆる暴戾なものと見做した。此れ正に瀆神の罪に當るものである。瀆神の罪は石を以て刑すべきものであつた。故に彼等は神殿建築中の爲めに其所に夥しく落ち散れる石を拾ひ取つて身の周圍に集めた。即ち彼等は石を以て耶穌イエスを殺さんと謀つたけれども、其の目的を遂行せざるに、耶穌イエスは免れて、群衆のうちに混ぜられ、好意を寄する群衆が其の後影を庇ふ間に神殿を去られた。

生來  
の警者

斯くの如き討論の間に日は過ぎて、修みやまよめ殿節間近の或る安息日に耶穌イエスは其の弟子となれる團體の間を歩んで居らるゝときに憐な光景——年若い替者が道の側に座つて施與を請ふてゐるのに眼を留め給ふた。神殿の門は乞食に取つて有望の場所であつたので(約九〇十八参照、使三〇〇二参照)彼は此所に座つて、禮拜者が前を通過するときに、其の現狀を訴へて施與を請ふたものであらう。耶穌イエスは其の光景に歩を留め給ふて、憐憫の情は胸に溢れるのであつたが、弟子は唯だ此れを議論の